

京都大学構内遺跡調査研究年報

2021・2022年度

2023

京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター

京大文化遺産調査活用部門

原色図版 1



京都大学医学部構内AM20区 不定形土坑出土鑄造関連遺物

原色 図版 2



京都大学医学部構内AM20区 不定形土坑出土黒織部沓茶碗

京都大学構内遺跡調査研究年報

2021・2022年度

2023

京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター

京大文化遺産調査活用部門

序

本年報は、文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センターの京大文化遺産調査活用部門がおこなった京都大学構内に残る遺跡の調査のうち、2021・2022年度に整理の終了したものについて、その成果をまとめたものである。

第Ⅰ部で報告する医学部構内の発掘調査は、がん免疫総合研究センターの新営にとまない、2021年の12月中旬から2022年の5月初旬にかけて実施されたものである。その結果、中世の土器溜や井戸、中世から近世前半にかけての土取り穴、近世後半から近代の溝や井戸などが検出された。なかでも、土取り穴は、調査区の全面にわたって認められ、その採掘が盛んに進められていたのがうかがえる。くわえて、土取り穴の埋土からは、鋳型片や鞆の羽口片、また、数多くの鉄滓や鉄製品などがみつかり、調査区ないしはそれに近いところで鋳造がおこなわれていたのがみとれる。こうした成果は、調査区ならびにその周辺における土地利用の移り変わりなどについてはっきりさせるうえで、欠かすことのできない重要な素材になると判断する。今後は、この報告の内容に留意しつつ、付近の調査成果と比較検討するなどして、いくつかの課題の追究に努めていくことが望まれよう。いっぽう、第Ⅱ部の紀要は、構内遺跡からも出土する、「塩壺（しおつぼ）」と俗に呼ばれてきた鉢形土師器の考察を試みたものである。第Ⅰ部・第Ⅱ部ともにご高覧いただき、ご批評・ご意見をいただければ幸甚である。

部門では、引き続き研究成果の公表に積極的にとり組んでいる。2021年度の末には、3年にわたって手がけてきた「白川道」に係わる研究プロジェクトの成果報告書を刊行した。そして、それと関連した展示を、本学総合博物館と連携した特別展「文化財発掘」の8回目として、「埋もれた古道を探る」と題して、2022年3月16日から5月15日にかけて開催した。さらに、2022年度からは、「白川道」に関する検討の結果を基礎にして、「都市化」という観点より、それに沿った地域の歴史的な推移や意義などについて明らかにしようとする、新たな研究プロジェクトをおし進めている。今後もこうした部門の活動に、ご支援とご協力をお願いする次第である。

2023年3月

京都大学大学院文学研究科附属
文化遺産学・人文知連携センター長

磯貝 健一

例 言

- 1 本年報は、京都大学構内で2021年4月1日から2023年3月31日までに発掘、整理作業をおこなった埋蔵文化財調査と保存の報告、および京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター京大文化遺産調査活用部門における研究成果をまとめたものである。
- 2 国土座標にしたがって一辺50mの方形の地区割りをして、遺跡の位置を表示した。
- 3 層位と遺構の位置については、世界測地系国土座標平面直角座標系（第Ⅵ系）により表示した。
- 4 遺構の略号は、奈良文化財研究所の方式にしたがって、井戸：SE、土坑：SKのように表示し、各調査ごとに通し番号を1から付した。
- 5 遺物には、遺跡の調査名を示すローマ数字と、調査ごとの通し番号を1から付した。この遺物番号は、本文、実測図、写真を通じて表示を統一した。
I：京都大学医学部構内AM20区の発掘調査
（例 I 1：京都大学医学部構内AM20区発掘調査出土遺物1番）
- 6 原則として、遺物の実測図は縮尺1/4、遺物の写真は約1/2に統一した。他の縮尺のものは、それぞれに縮尺を明記した。
- 7 参考文献は、本文中に〔著者名 発表年〕の形式で表わし、巻末に一括した。
- 8 古代・中世土師器の型式分類は、とくにことわりがない場合、『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ』（1981年）にしたがっている。
- 9 本文の執筆者名は各章の初めに列記した。また、遺構・遺物の撮影は原則として、それぞれ報告者が担当した。ただし、原色図版は写房楠華堂（内田真紀子氏）による。
- 10 編集は、笹川尚紀が担当し、千葉豊、伊藤淳史、富井眞、内記理、磯谷敦子、柴垣理恵子、長尾玲、西田陽子が協力した。
- 11 2021・2022年度の京大文化遺産調査活用部門内の組織は以下の通りである。
部 門 長：吉川 真司（文学研究科教授）
教 員：千葉 豊、伊藤 淳史、富井 眞、笹川 尚紀、
内記 理（2022年9月30日まで）
教務補佐員：磯谷 敦子、長尾 玲、柴垣 理恵子
事務補佐員：高山 典子

京都大学構内遺跡調査研究年報 2021・2022年度

目 次

第 I 部 2021・2022年度京都大学構内遺跡発掘調査報告

第 1 章 2021・2022年度京都大学構内遺跡調査の概要	1
1 調査の概要	1
2 調査の成果	1
第 2 章 京都大学医学部構内 AM20 区の発掘調査	3
1 調査の概要	3
2 層 位	5
3 土取り以前の遺跡	9
4 中・近世における土取りとその後	22
5 近世後半・近代の遺跡	28
6 小 結	40
参考文献	44
京都大学構内遺跡のおもな調査	47
報告書抄録	58

第Ⅱ部 京都大学大学院文学研究科附属
文化遺産学・人文知連携センター
京大文化遺産調査活用部門紀要Ⅳ

「塩壺」と俗称されている鉢形製品の検討（上）

1 はじめに－問題の所在と本稿の目的－	61
2 対象資料の特徴	62
3 資料認識の過程と問題の所在	63
4 資料の集成と検討(1)－鴨東地域北半－	65

図 版	卷末
-----	----

図 版 目 次

- 原色図版 1 京都大学医学部構内 A M20区
不定形土坑出土鑄造関連遺物
- 原色図版 2 京都大学医学部構内 A M20区
不定形土坑出土黒織部沓茶椀
- 図版 1 京都大学吉田キャンパスの地区割と調査地点
- 図版 2 京都大学医学部構内 A M20区
- 1 表土・攪乱除去後の全景（北東から）
 - 2 灰褐色土・黒灰色土掘りあげ後の全景（北東から）
- 図版 3 京都大学医学部構内 A M20区
- 1 完掘後の全景（北東から）
 - 2 集石の広がり（北から）
- 図版 4 京都大学医学部構内 A M20区
- 1 南部の集石の広がり（西から）
 - 2 東北部の集石の広がり（北西から）
- 図版 5 京都大学医学部構内 A M20区
- 1 S R 2・S R 3（北から）
 - 2 S R 2・S R 3（南東から）
 - 3 S X 4（南から）
 - 4 S X 4掘りあげ（北から）
 - 5 S X 5（北から）
 - 6 S X 51（北から）
- 図版 6 京都大学医学部構内 A M20区
- 1 S X 61（北から）
 - 2 S X 61（南東から）
 - 3 S E 4（西から）
 - 4 S E 4（北から）
 - 5 S X 64（南から）
 - 6 S X 2・3（東から）

- 図版 7 京都大学医学部構内 A M20区
S X 4 出土遺物
- 図版 8 京都大学医学部構内 A M20区
鑄造関連遺物
- 図版 9 京都大学医学部構内 A M20区
1 不定形土坑出土遺物
2 S X 2 出土遺物

挿 図 目 次

京都大学医学部構内 A M20区の発掘調査	図16 土馬……………22
図1 調査地点の位置……………3	図17 不定形土坑と集石……………23
図2 調査区の地区割り……………5	図18 南部集石 (S X 9) の平面図と断面図……………25
図3 東西畔南面の層位……………6	図19 不定形土坑出土黒織部……………26
図4 東西畔南面の層位 (つづき) ……………7	図20 S X 2 出土遺物, S X 3 出土遺物 ……………27
図5 土取り以前と土取り後の時期の遺構……………11	図21 近世後半・近代の遺構……………29
図6 S X 4 上部出土遺物(1)……………12	図22 S D22出土遺物, S K 1 出土遺物 (1)……………31
図7 S X 4 上部出土遺物(2)……………13	図23 S K 1 出土遺物(2), 小穴出土遺物 ……………32
図8 S X 4 下部出土遺物……………14	図24 灰褐色土出土遺物, 黒灰色土出土 遺物……………33
図9 S X 4 底部出土遺物……………15	図25 表土・攪乱出土遺物(1)……………35
図10 S X 5 出土遺物(1)……………16	図26 表土・攪乱出土遺物(2)……………36
図11 S X 5 出土遺物(2)……………17	図27 表土・攪乱出土遺物(3)……………37
図12 S X 5 出土遺物(3)……………18	図28 表土・攪乱出土遺物(4)……………38
図13 S E 4 出土遺物, S X 61出土遺物, S X 64出土遺物……………19	図29 表土・攪乱出土遺物(5)……………39
図14 鑄型……………20	
図15 ふいご……………21	

「塩壺」と俗称されている鉢形製品の検討 (上)	
図30 京大構内出土の厚手鉢形土器集合	62
図31 資料が報告された『烏丸線内遺跡 調査抄報』の表紙と挿図.....	63
図32 鴨東地域北半の対象資料報告地点 と点数.....	66
図33 形態の典型模式図とA X 28区S K 51出土品.....	67
図34 A U 25区S E 2 およびA R 19区S E 8 出土品.....	68
図35 14世紀代の遺構出土資料.....	69
図36 2つの資料群の外形輪郭の比較	70
図37 時期別にみた口径の分布.....	71
図38 口縁部形態模式図.....	72
図39 底部の諸形態.....	73
図40 底部の輪状圧痕諸例.....	74
図41 粘土帯積み上げ痕.....	75
図42 器面にみられる付着物事例.....	77
図43 鴨東地域北部における厚手鉢形土 器の変遷.....	78

表 目 次

表1 京都大学構内遺跡のおもな調査	47
表2 鴨東地域北半における厚手鉢形土 器報告資料一覧.....	81

第 I 部 2021・2022年度京都大学構内遺跡発掘調査報告

第 1 章 2021・2022年度京都大学構内遺跡調査の概要

第 2 章 京都大学医学部構内 A M20区 の発掘調査

第1章 2021・2022年度京都大学構内遺跡調査の概要

笹川尚紀

1 調査の概要

京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター京大文化遺産調査活用部門では、吉田キャンパスおよび附属施設の敷地内における建物新営など掘削をとまなう工事に際し、予定地の埋蔵文化財調査を、既知の遺跡との関係や過去の調査結果に照らして、発掘・試掘・立合にわけて実施してきた。2021・2022年度には、以下のように発掘調査1件、立合調査6件をおこなった（括弧内は、図版1および表1の地点番号）。

発掘調査	医学部構内がん免疫総合研究センター新営（医学部構内AM20区）	（第2章，図版1-505）
立合調査	北部構内ヘリウム管配管工事（北部構内BG29区）	（第1章，図版1-506）
	本部構内携帯基地局設置（本部構内AT30区）	（第1章，図版1-507）
	本部構内花谷会館とりこわし工事（本部構内AT26区）	（第1章，図版1-508）
	病院東構内中央診療棟等改修機械設備工事（病院東構内AK17区）	（第1章，図版1-509）
	北部構内基礎物理学研究所電気不良箇所改修（北部構内BG34区）	（第1章，図版1-510）
	宇治グラウンド倉庫新設（宇治グラウンド）	（第1章，表1-511）

2 調査の成果

以上のうち、2021・2022年度に整理を終えたものについて、成果を略述する。なお、医学部構内AM20区に関しては、第2章で成果を詳述しているので参照されたい。

医学部構内AM20区の発掘調査 本調査区は、医学部構内の南東隅に位置し、吉田橋町遺跡に含まれる。発掘調査の結果、縄文時代の自然流路や中世の土器溜・井戸、中世から近世前半にかけての土取り穴、近世後半から近代の溝・井戸などの遺構が見つかった。

本調査区では、全面にわたって不定形土坑が数多く認められた。それらは、黄灰色シルトを採取することを目的としたもの、すなわち土取り穴であったとみなされる。縄文時代後期に形成された公算が大きいとされる自然流路、12世紀後半や13世紀ごろの年代が与えられるとされる土器溜などは、その掘削によって破壊されずに残ったものであった。

黄灰色シルトの採掘に関しては、14世紀代にはじめられ、18世紀におよぶまで繰り返されたとされる。そして、不定形土坑の覆土のなかから検出された集石をめぐっては、土取

りがおこなわれた以前に、多量の礫を用いた遺構がその辺りに存在していた可能性が指摘されるにいたっている。

なお、不定形土坑の埋土からは、鋳型片や鞆の羽口片、数多くの鉄滓や鉄製品などがとりあげられている。くわえて、鋳型片のうちの1点は、密教法具の1つである六器の口縁部の外型にあたと断定されている。そうした事柄などを踏まえると、本調査区において鋳造がおこなわれていたという点をしっかりと排除するわけにはいかないだろう。

土取りの後、近世後半には、本調査区は耕地となった。おそらく、畑として使われたのだろう。検出された段差に依拠すると、本調査区には、少なくとも3つの土地の区画が存在していたのがうかがわれる。近世後半以降、19世紀末ごろにかけて、本調査区では、農作がおこなわれ、それにとまなう溝や小穴などが設けられるにおよんだと想定される。

本調査区の性格について最も重要となるのが、土取りに係わる事柄である。その年代や仕方・人々の相違はさることながら、それがなされた時期の黄灰色シルトの標高はどれくらいであったのか、いくつかの遺構などは何故に土取りによる破壊を免れたのか、黄灰色シルトが採掘された後に本調査区の周縁から土が運ばれ地面をならすことがなかったのか、集石を構成する礫は本調査区の近辺から移されることがなかったのか等々、これらをめぐって、総合的に丹念に検討を加えていかなければなるまい。そして、さらには、本調査区だけでなく、それに近接するそれぞれの調査地点からみつかった土取り穴もまた対象に据えることで、考古学や文献史学などの見地に基づき、全面的に洗いなおすのが不可欠になるといえよう。本調査区付近における土地利用の変遷を明確に跡づけていくためには、以上のような分析を決して避けて通ることができまい。

立合調査について 507地点では、平安時代の遺物包含層より、「て」字状口縁手法のB類の土師器皿片1点がみつかっている。508地点では、弥生時代前期末の洪水性堆積物である黄色砂と、それを切る落ち込みがみうけられた。なお、511地点では、表土しか認められなかった。しかし、宇治グラウンドは、萬福寺塔頭跡という遺跡の範囲内に含まれているが故に、同地点の周辺に関しては、注意深く調査を進めていくのが肝要であろう。

第2章 京都大学医学部構内AM20区の発掘調査

内記 理 笹川尚紀

1 調査の概要

本調査区は吉田山西南麓，京都大学医学部構内の東南端に位置し，吉田橋町遺跡に含まれる（図版1-505，図1）。ここががん免疫総合研究センターの新営が予定されたため，2020年度に予定地全域の発掘調査を計画した。ところが，調査区の一帯において土壌が水銀・鉛等により汚染されていることが判明したため，土壌の汚染の程度の検査や調査の実施に向けての協議がおこなわれ，調査面積や調査時期，調査方法についての検討が重ねられた。その結果，調査を2021年12月13日ようやく開始することができ，2022年5月6日までのおおよそ4ヶ月半に渡って継続した。当初の計画では1800㎡を掘削する予定であったが，汚染土壌への対策として，区画ごとに排土を仕分けして搬出する必要があり，また，ベルトコンベアの使用も制限されたため，1396㎡を掘削範囲と設定し，調査にあたった。発掘調査終了後，2022年8月31日まで発掘で出土した遺物の整理作業をおこない，その後

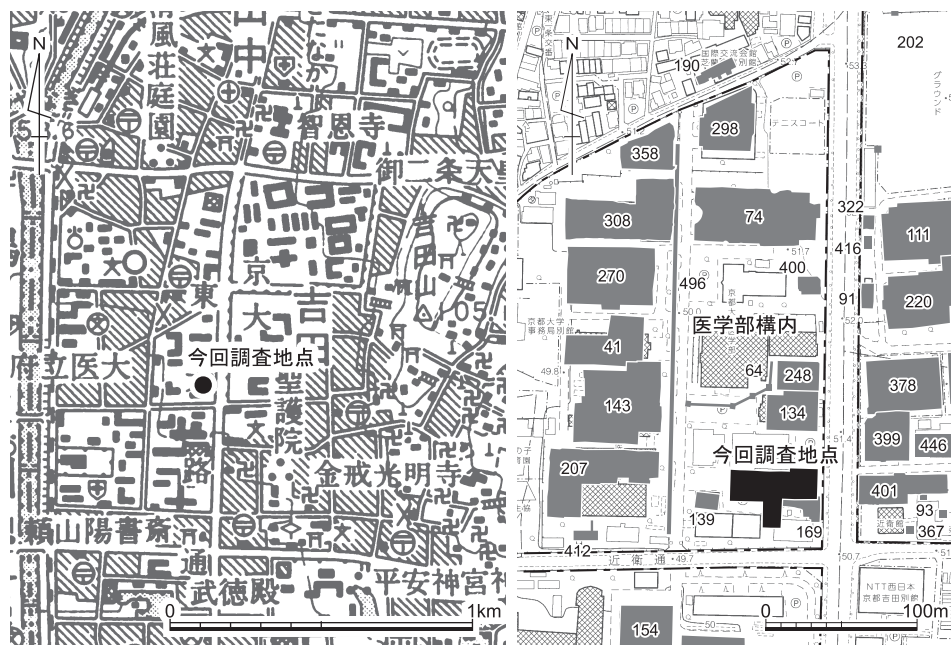


図1 調査地点の位置（左1/25000，右1/5000）

11月末まで報告書の作成にあたった。

まずは、近隣の調査成果を整理しておこう（図1）。本調査区の西に隣接する139地点における立合調査では、黄灰色シルトに掘り込む不定形土坑が確認された。出土遺物に14世紀中葉の土師器や瓦器が含まれることから、その頃の土取り穴であったと考えられる〔上田・川上・濱崎1986〕。

本調査区の北30mにある134地点の発掘調査では、一面に不定形土坑が広がっていた。遺物の内容から、14世紀中葉に埋積したものと考えられる〔五十川1986〕。

本調査区の南東に隣接する169地点においては、近世初頭の土取り穴が広がる様子が確認された。それらの遺構から出土した遺物には江戸時代前期の遺物が含まれていたが、その大半は平安時代後期から鎌倉時代にかけての12～14世紀のものであったようだ。それらの中に、平安時代後期のものと考えられる密教法具の鑄造に関連する遺物が含まれていた点は、東に隣接する吉田南構内南辺に所在したと想定されている福勝院の存在との関連から注目された〔浜崎1990〕。福勝院とは、鳥羽法皇の皇后高陽院泰子（1095－1155）が御願し、1151年（仁平元年）6月に造営された御堂である。

本調査区の東、東大路を跨いで隣接する399・401地点では、その西端において、不定形土坑群の広がりが見えられた。399地点の南半から401地点でみつかった不定形土坑群は中世後半期におこなわれた土取り穴と考えられており、また、399地点の北半の土坑群は近世の土取り穴と考えられた〔伊藤・富井・内記2016, p.40, p.88〕。

以上、近隣での調査成果を確認した。東西南北のいずれの隣接地区をみても、共通して不定形土坑が広がっていた状況が確認された。それらはいずれも、黄灰色シルトを目的とした土取りによって形成された土坑であったと考えられる。よって、今回の調査においても調査区一面で黄灰色シルトの採掘を目的とした土取り穴が広がっていることが予想された。調査史上の課題としては、それらの土取りがいつの時代に、どのような年代幅をもっておこなわれたかの解明が残されている。今回の調査区はある程度広範に広がっていることから、そのような問題を解決する糸口がえられるものと思われる。

今回の報告内容の関係から、あらかじめ調査区内の10mグリッドの内容を示しておきたい（図2）。今回の調査区は、世界測地系座標のX = -108475～-108433, Y = -20281～-20222の範囲にあり、AL19c 5からAM20b 3までの地区名をもつ10m四方のグリッドを組むことができる。また、次節において扱う層位の説明にかかわり、東西畔の位置を同図中に示しておく。

層 位

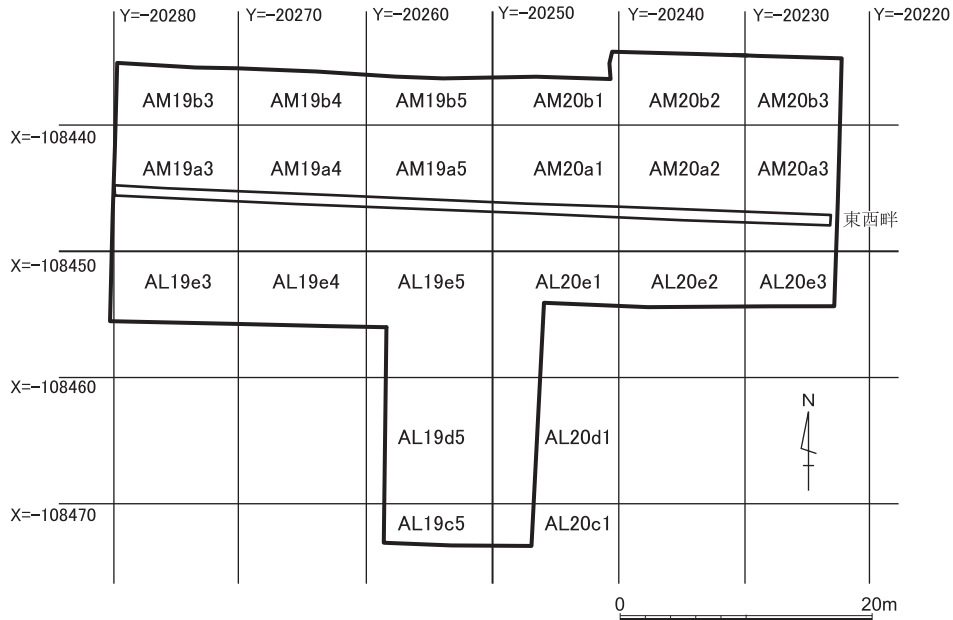


図2 調査区の地区割り 縮尺1/600

2 層 位

調査区の周りの現地表の標高は、調査区北半の四隅で51.114m（北東）、51.085m（南東）、50.915m（南西）、50.827m（北西）であり、南方張り出し部の南端2カ所では、50.81m（南東）、50.614m（南西）である。地表の地形が、概ね北東から南西へかけて緩やかに傾斜することが分かる。調査区北半の中央部に東西に走る畔（図2）を設定し、地層の観察はおもにその南面でおこなった（図3・4）。

第1層は、表土・攪乱である。畔の西端よりも西の調査区外の地点における標高が50.9mで、畔東端よりも東の調査区外での標高が51.1mであることから、第1層の厚みは、西端で80cmほど、東端で110cmほどあったことになる。第1層には、近代のレンガ造りの建物、すなわち、1901年（明治34）に建てられた医学部の解剖学教室の本館や実習室のレンガ基礎が含まれ、その時代の遺物も多く出土した。

表土・攪乱の下に示した第2層は灰褐色土の遺物包含層で、10cmほどの厚みを持つ。この第2層からは、近世の灯明皿や伏見人形、近代レンガといった、幕末頃から明治頃にか

京都大学医学部構内AM20区の発掘調査

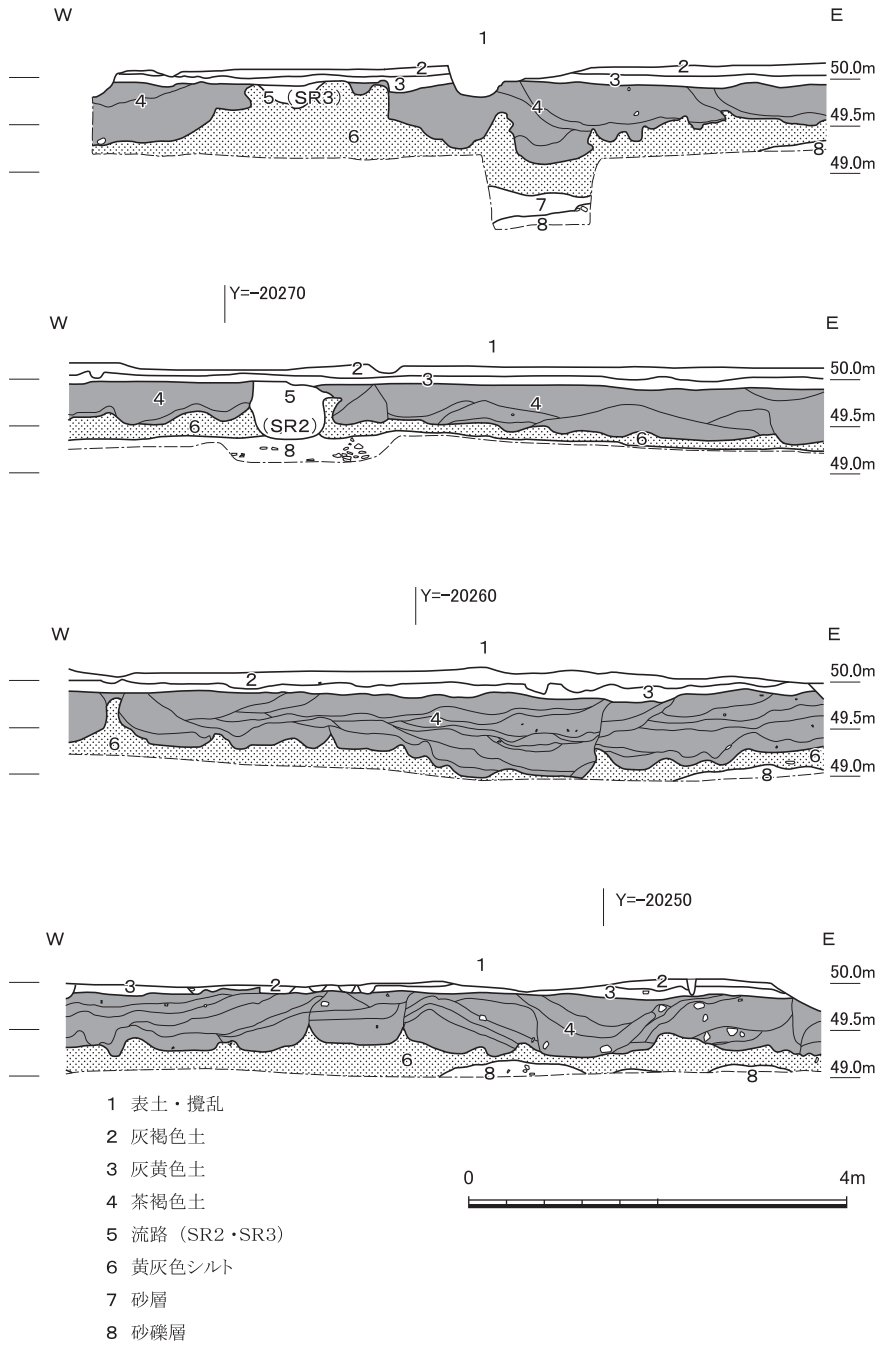


図3 東西畔南面の層位 縮尺1/80

層 位

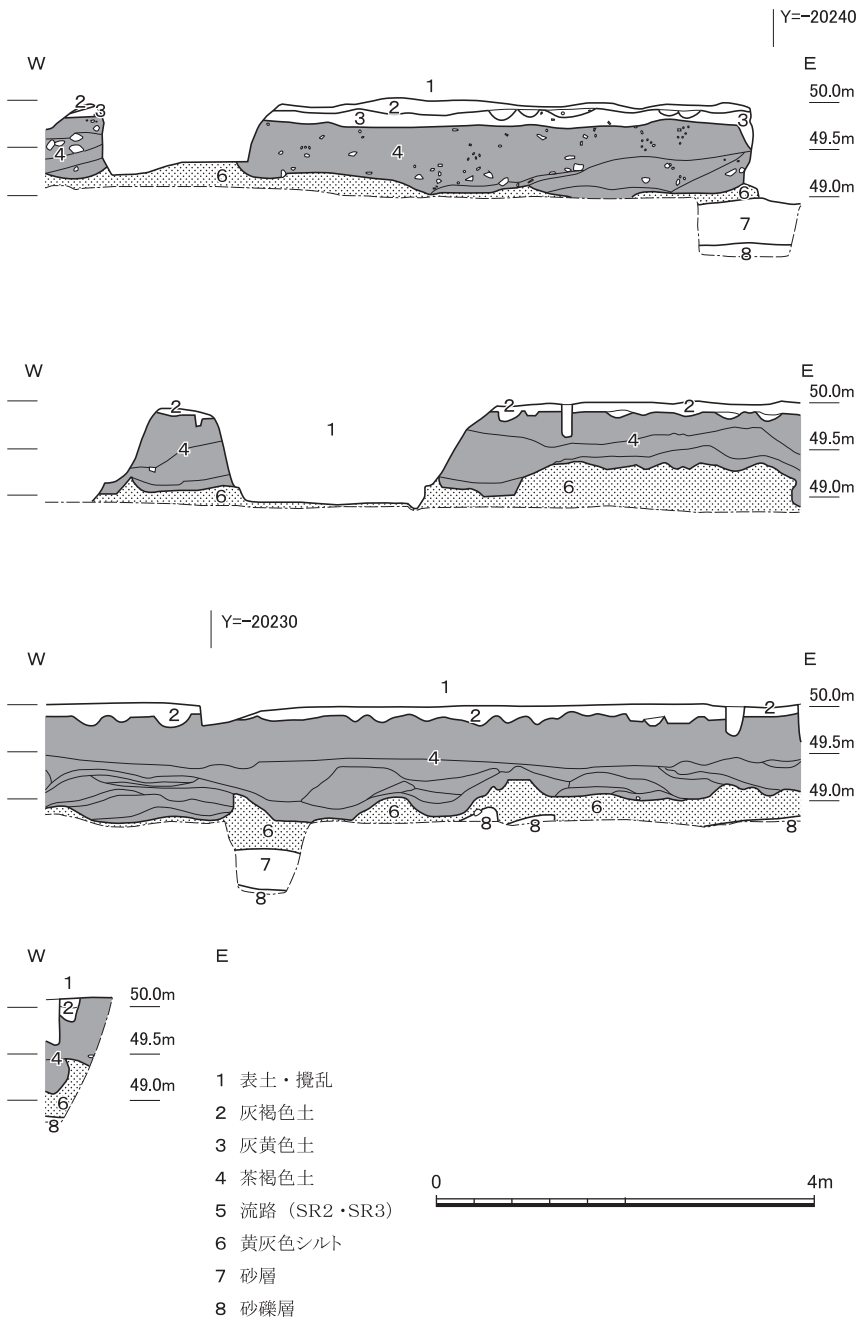


図4 東西畔南面の層位 (つづき) 縮尺1/80

けての遺物が出土した。同地に医学部解剖学教室が置かれるまでおこなわれた、耕作にかかわる土層と考えられる。なお、東西畔を設定した範囲からは外れるが、調査区北半の北辺で茶褐色土の高まりが確認されており、その段差の上では表土・攪乱層の下で黒灰色土が広がる様子が確認された。遺物から復元される時期は灰褐色土と同様に、幕末頃から明治頃にかけてである。

東西畔のY = -20240付近より西方においては、第3層として、灰黄色土の遺物包含層を認めた。その厚みは約10cmである。江戸時代後期頃の堆積と思われる、次に説明する土取りがおこなわれた時期より後の堆積である。この灰黄色土の遺物包含層や遺構は平面的に検出することが不可能であったため、全体の掘削においては灰褐色土の包含層および遺構として扱った。

これらの層の下には、主に茶褐色土を埋土とする不定形の土坑が調査区全面に広がっていた。これらの不定形土坑の埋土を、第4層として示した。埋土は複雑に堆積していたため、それを層位図に反映した。これらの不定形土坑は、黄灰色シルトを目的とした土取りにより生じた穴であったと考えられる。不定形土坑には、18世紀頃の遺物を少量含むものがあり、その頃に掘削されたと考えられるものがある。一方で、近世の遺物を全く含まないものや、埋土の掘削の過程でSX2やSX3といった14世紀頃の土器溜が検出されるものがあったことから、少なくとも同地において14世紀以前には土取りが開始されていたことが分かる。14世紀以前のある時期から18世紀にかけて、長期にわたって土取りがおこなわれたものと思われる。

不定形土坑の下には、黄灰色のシルト層（第6層）が広がる。調査区全面で検出された不定形土坑は、このシルトの掘削を目的とした土取りの結果生じたものであったと考えられる。調査区北半の西部においては、このシルト層を削るようにして、流路SR2とSR3が認められた（第5層）。これらの流路の埋土には、縄文時代後期から中世にかけての土器が含まれていたが、その9割以上が縄文土器であった。なお、土取りはこれらの流路を避けておこなわれている。

シルト層の下には、砂層（第7層）があり、さらに、その下に礫層（第8層）が広がる。第6層のシルト層の下で第8層の礫層が確認される地点もあり、第7層の砂層は部分的に堆積したものようである。

3 土取り以前の遺跡

(1) 遺構 (図版3・5・6, 図5)

今回の調査区においては、中世から近世にかけておこなわれた土取りの結果形成されたと思われる不定形土坑が全面に広がっている様子が確認された。一方で、それらの土取りの影響から免れた、つまり、不定形土坑によって完全には破壊されなかった土取り以前の時期の遺構が、わずかながら残存する(図5)。

SR2・SR3 調査区の西部において、北西から南東に走る白色粗砂による自然流路SR2が見つかった。黄灰色シルト層を削る。その上面は茶褐色土を掘削する過程で現れ、また、流路の一部は茶褐色土を埋土とする不定形土坑に削られていた。なお、後述するように、近隣の不定形土坑を掘削する過程で、14世紀の土師器溜であるSX2やSX3が検出されており、これら、SR2周辺で掘られた不定形土坑は中世の14世紀以前のもと考えられる。流路は14世紀以前のある時期に流れていたものということになる。

出土遺物の9割以上が、縄文土器であった。それ以外に、少量ながら、古代のものと思われる土師器、中世の土師器・須恵器各1点が含まれていた。縄文土器の中には後期初頭から晩期のもが含まれていたが、その中でもとくに、北白川上層2式、つまり、縄文時代後期前葉頃の縄文土器が割合として多い。よって、この流路は縄文時代後期に形成された可能性が高い。流路内で見つかったものの、中世の土師器や東播系須恵器甕の破片は、土取り時に混入したものと考えておきたい。なお、縄文時代後期前葉頃の縄文土器が集中して出土する状況は、病院構内の各地で確認されている〔千葉・富井・井上2007等〕。

調査区の西北部では、SR2から分岐したと思われる流路SR3が見つかった。SR2と同じ時期のもと考えられる。

SX4 SX4は、調査区の西北部において不定形土坑の埋土を掘削する過程で検出された土師器溜である。土取り以前の遺構である。完形の土師器が並べられた状態で検出され、それらを取り上げると、その下からも次々に土師器が現れた。遺構を掘り下げる過程で、元々は直径2m、深さ1.5mほどの大きな円形の遺構であったことが分かった。この遺構から出土した遺物は中世の土師器である。C類の土師器が主体的に含まれ、D類の土師器もわずかながら混じる。C類土師器が用いられた12世紀頃の遺構であり、D類土師器が少し含まれることから、12世紀でも後半頃の様相を伝えるものと考えられる。

SX5 調査区の中央部において、土取り穴に削られた土師器溜が検出された。四

方を土取り穴で破壊されており、外形にかかわる情報は乏しいが、東西の長さは約1.7mあり、南北の長さは2m以上あったと考えられる。土師器が並べられた状態で検出され、その下からも完形の土師器が見つかった。遺構自体は浅く、深さは約30cmであった。出土した土師器の中ではD類のものが主体をなしており、C類も含まれる。13世紀を中心とする時期の遺構であることがわかる。S X 5の周りでは、やはり不定形土坑に一部を破壊された小穴S P 27・S P 28が見つかった。

S X 51 後述するように、不定形土坑の中には、埋土に集石を伴うものがある。それらのうち、S X 4のやや東で検出された集石S X 15を除去したところ、集石の下から土師器溜S X 51が見つかった。出土した土師器はC₄類を主体とする。完形の土師器は含まれないことから、後世の土取りに際して二次的に堆積したものである可能性が高いが、S X 4の周辺において、12世紀頃に人々の営みがおこなわれていたことの証左の1つとなると考えられるため、ここで触れておく。

S E 4 調査区の中央部において、不定形土坑を掘削する過程で、井戸が検出された。石組みの井戸であるが、その石組みはほとんど失われていた。やはり、土取りの影響を受けたものと思われる。東西幅は約2.3m、深さは約1.8mで、下部の約30cmのみ石組みが残存していた。下部では方形（一辺60cm）に復元される木枠の痕跡がわずかに認められた。井戸の掘削の過程で、D類の土師器のほかに、近世の磁器や陶器が見つかった。近世の遺物は後の土取りに伴うものである可能性が高い。井戸の裏込めや木枠内からは褐色の土師器小片が出土している。井戸自体は13世紀頃に作られたと考えておきたい。

S X 61 調査区の中央部北西寄りの地点で、埋土に炭化物や焼土片を多く含む遺構が検出された。東西幅は約2mで、遺構の南部が土取りによって壊されてしまっているため、南北幅は分からない。西部においては、平面形でU字形に遺構が展開しているように見受けられた。U字形の溝部分の幅は、約25cmであった。埋土の質から考えて、鑄造にかかわる遺構の一部であったかもしれない。出土した土師器の中にはE類のものや灰白色の凹み底の小椀が含まれていた。14世紀頃の遺構と考えられる。

S X 64 調査区の東部において、方形の浅い集石遺構が検出された。灰色の土を埋土とする。東西の長さは約80cmで、深さは約15cmである。北よりにおいては、円形の小穴が確認された。小穴の直径は約25cmで、深さは10cmに満たない程度であった。土師器が出土したが、D類のもののほか、灰白色の小椀が含まれていた。13世紀後半頃の遺構であったと考えられる。

土取り以前の遺跡

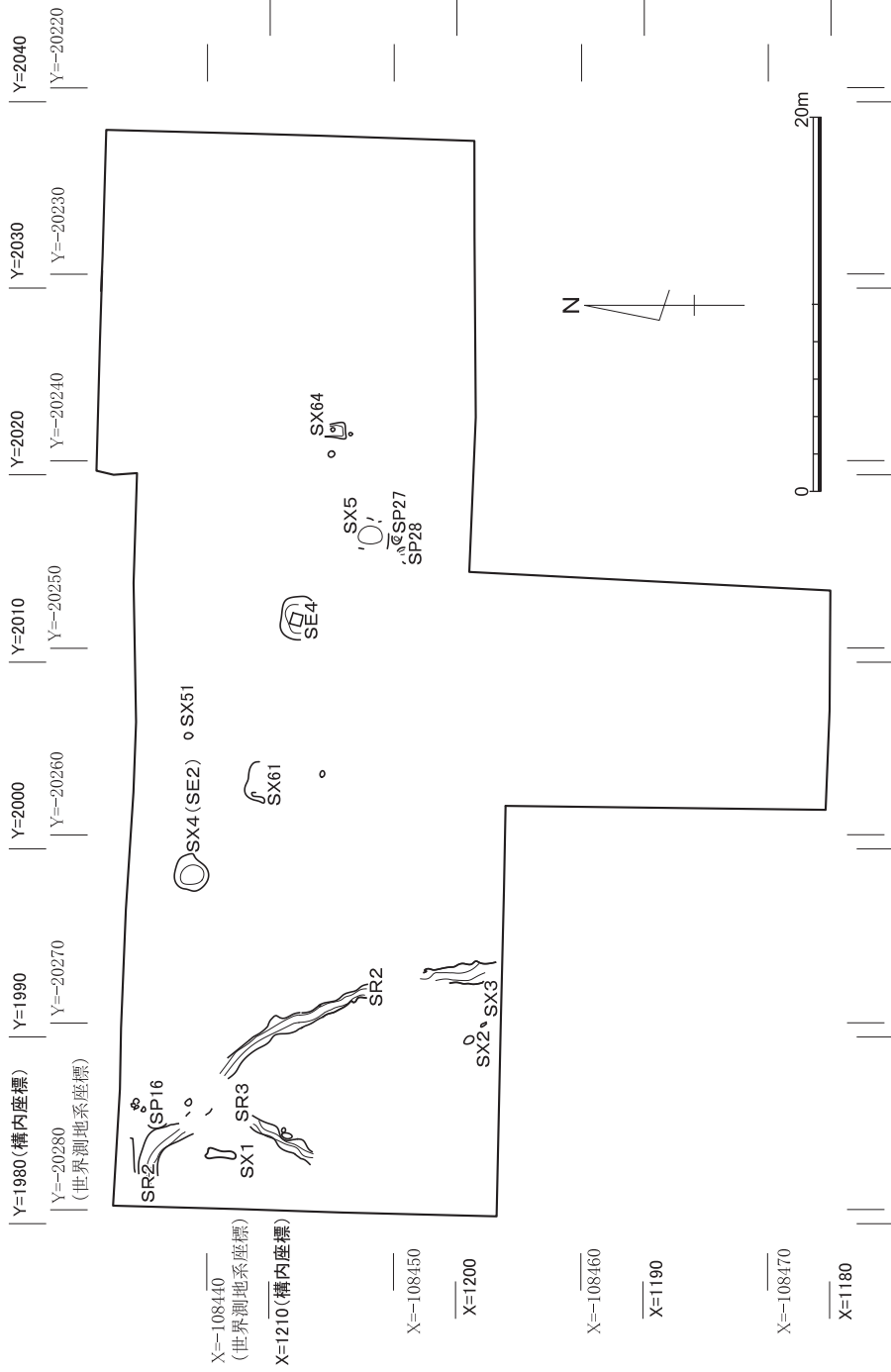


図5 土取り以前と土取り後の時期の遺構 縮尺1/400

京都大学医学部構内AM20区の発掘調査

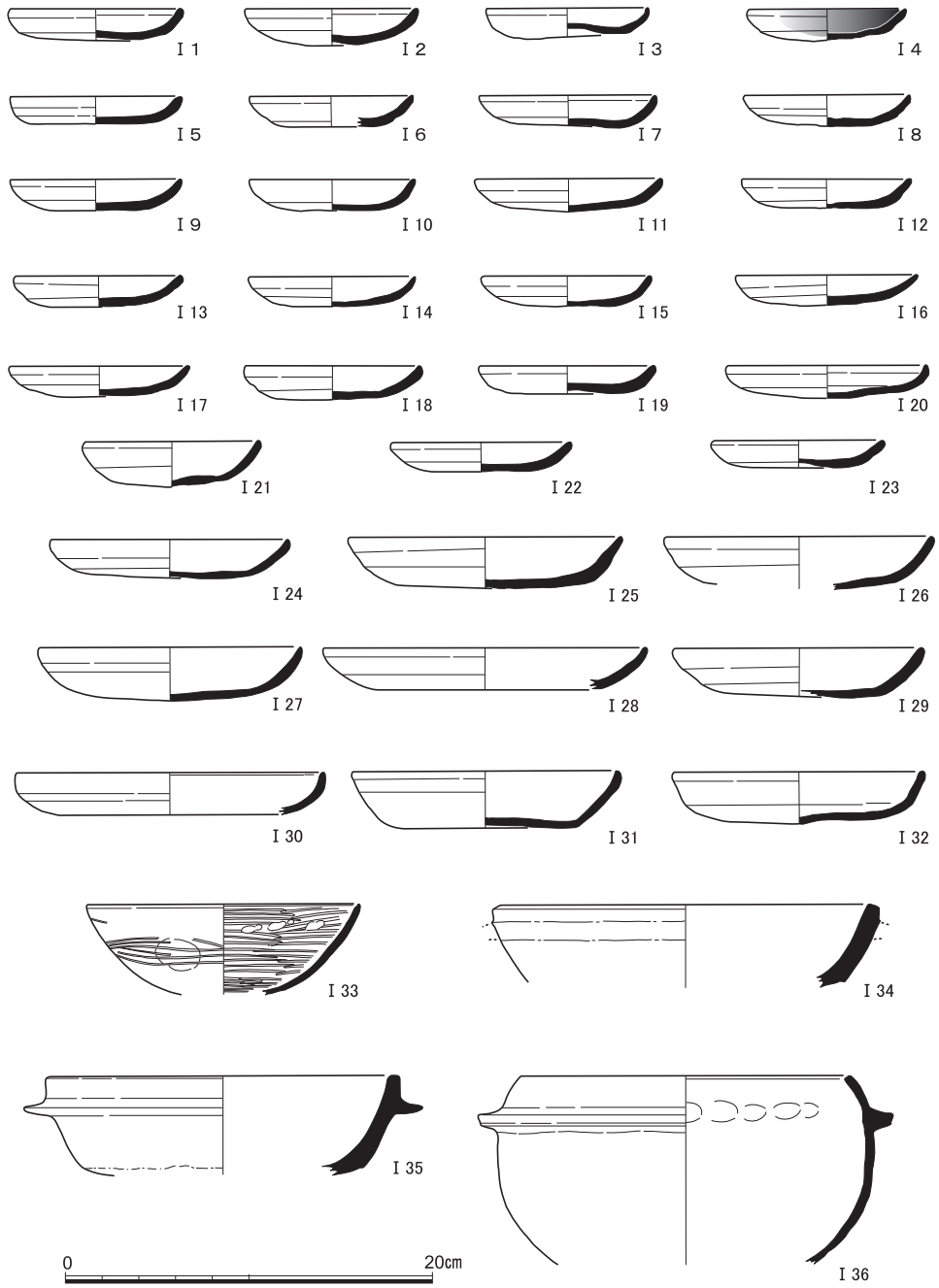


図6 SX 4 上部出土遺物(1) (I 1~32土師器, I 33~36瓦器)

土取り以前の遺跡

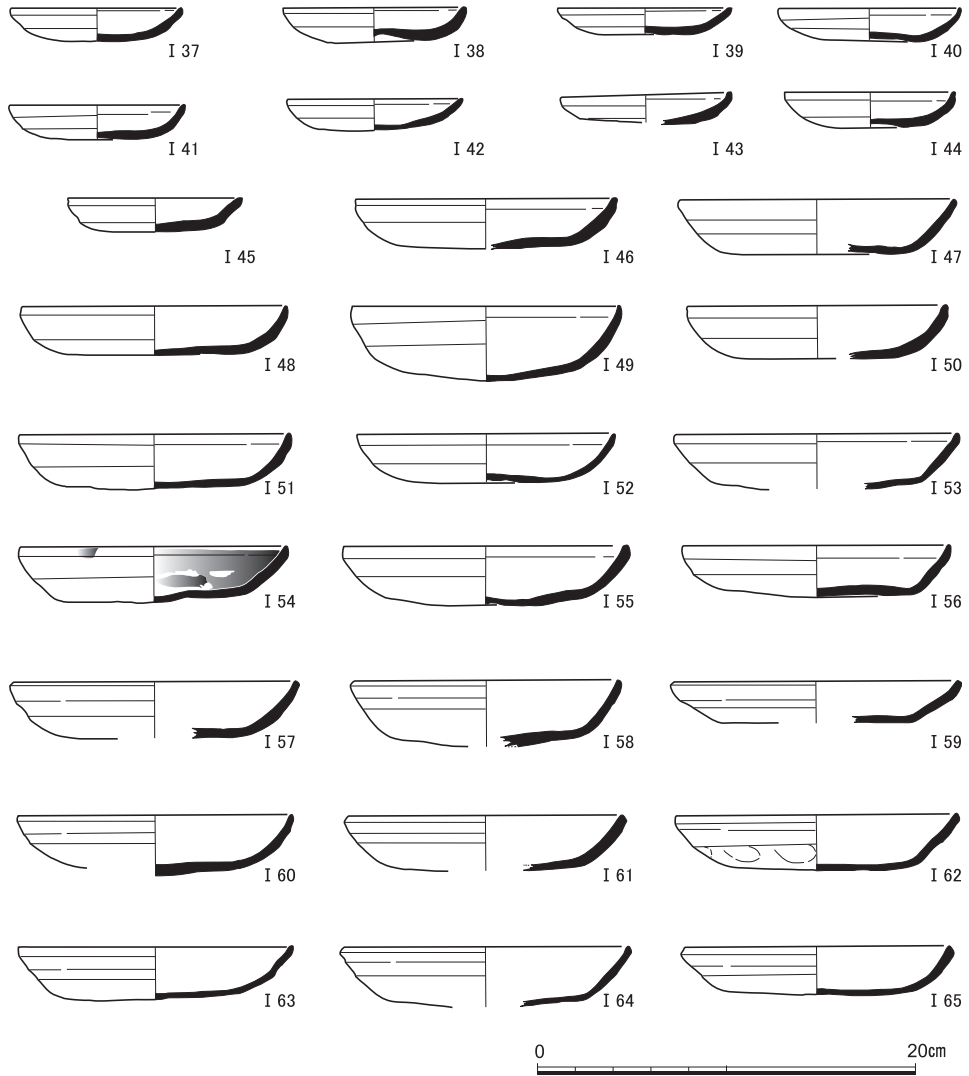


図7 SX 4 上部出土遺物(2) (I 37~ I 65土師器)

(2) 遺構出土の遺物 (図版7, 図6~13)

土取りがおこなわれる以前に形成された遺構から出土した遺物を示す。

SX 4 出土遺物 (I 1~ I 125) SX 4は深さのある遺構であるため、ここでは、SX 4 上部出土遺物 (I 1~ I 65), SX 4 下部出土遺物 (I 66~ I 105), SX 4 底部出土遺物 (I 106~ I 125) の順に報告する。煤付着箇所をトーンで示す (以下同)。

京都大学医学部構内AM20区の発掘調査

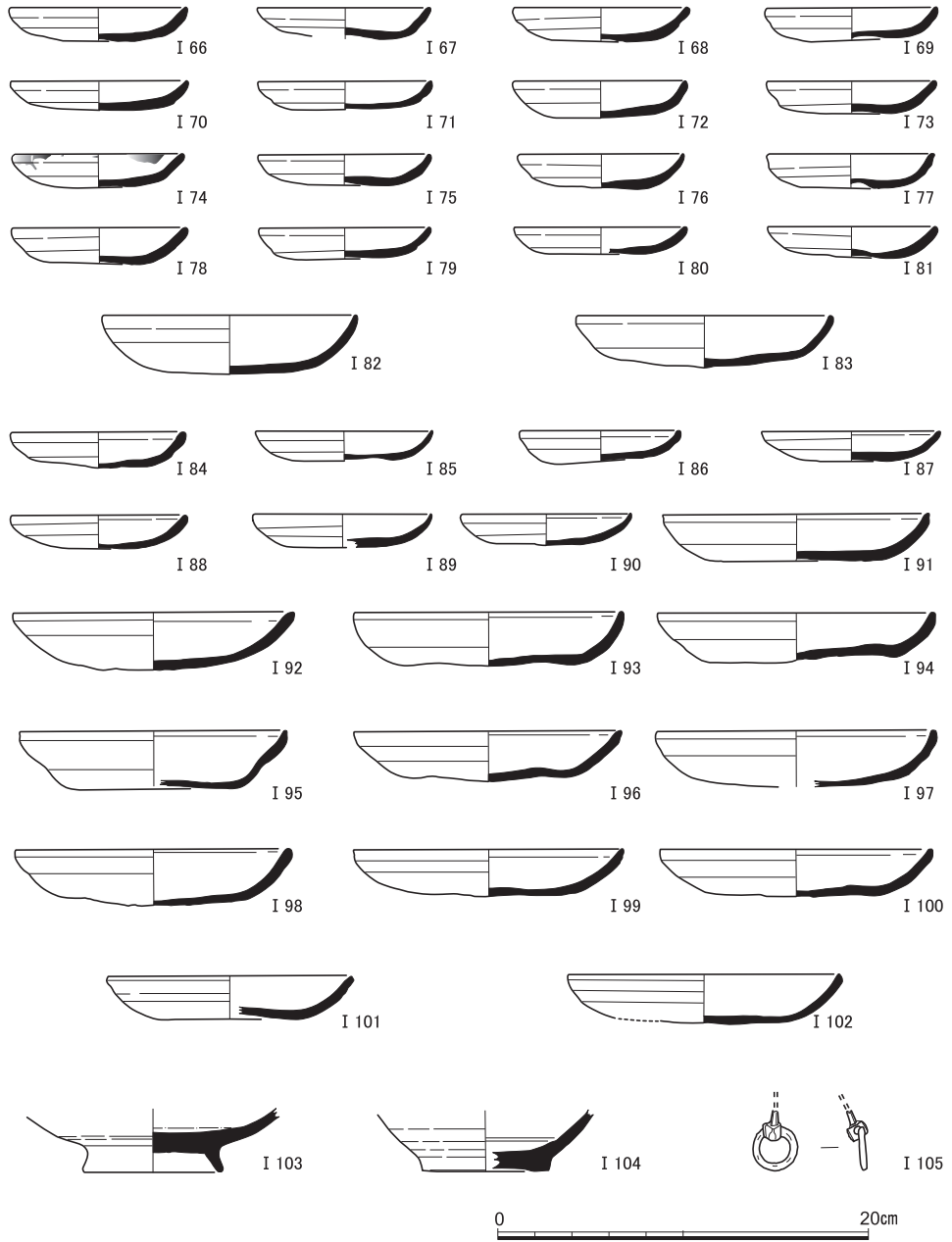


図8 S X 4 下部出土遺物 (I 66~I 102土師器, I 103灰釉系陶器, I 104白磁, I 105青銅製品)

土取り以前の遺跡

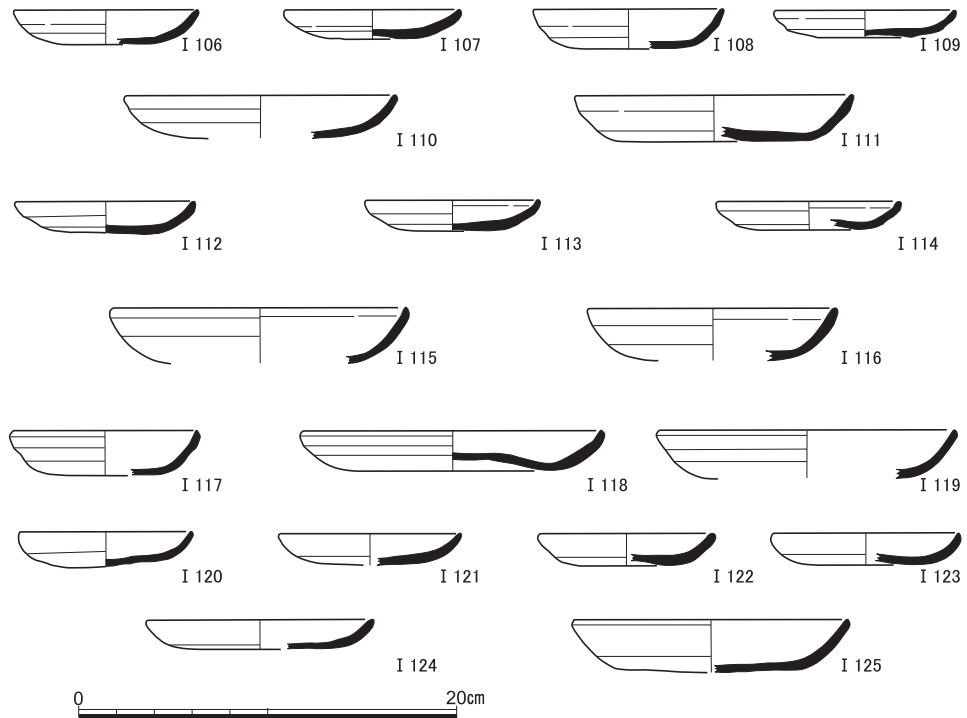


図9 SX 4 底部出土遺物 (I 106～I 125土師器)

SX 4 上部から出土した遺物のうち、I 1～I 32・I 37～65は土師器の皿である。I 1～I 32はC₃類、I 37～I 56はC₄類、I 57～I 65はC₅類である。I 33～I 36は瓦器である。I 33は椀、I 34～I 36は羽釜である。I 34においては、鏝が欠損する。

SX 4 下部から出土した遺物のうち、I 66～I 102は土師器の皿である。I 66～I 83はC₃類、I 84～I 100はC₄類、I 101・I 102はC₅類である。I 103は灰釉系陶器椀の底部である。I 104は白磁の底部である。I 105は青銅製品である。把手部分であり、装飾金具の一部と考えられる。

SX 4 底部から出土した遺物はすべて土師器である。I 106～I 111はC₃類、I 112～I 116はC₄類、I 117～I 119はC₅類、I 120～I 124はD₃類、I 125はD₄類である。

以上のように、SX 4 から出土した遺物の中では、C類に分類されるものが圧倒的多数を占める。底部においてD類の土師器も混ざることから、12世紀のうちでも後半にかかる時期の一括資料と考えることができる。

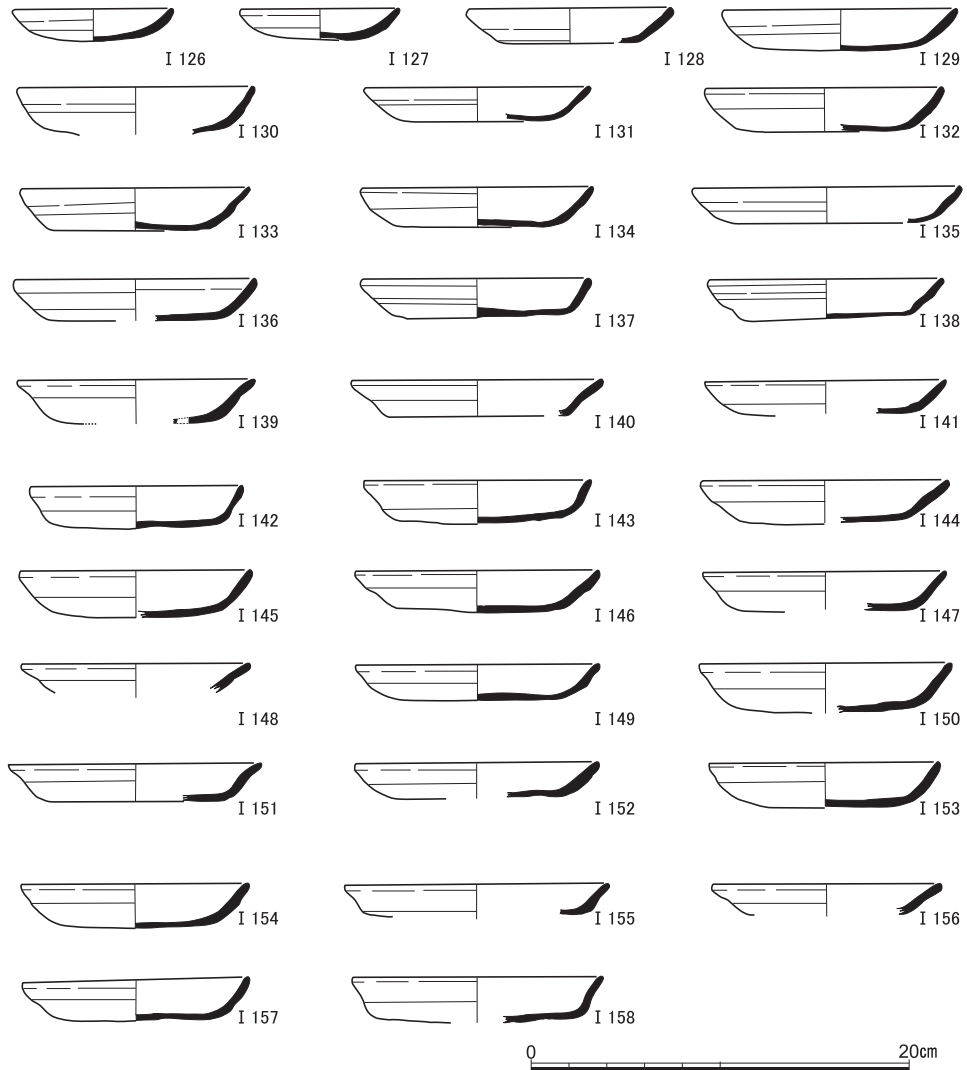


図10 S X 5 出土遺物(1) (I 126~ I 158土師器)

S X 5 出土遺物 (I 126~ I 201) I 126~ I 194は土師器である。I 126~ I 135はC₃類, I 136はC₄類, I 137・I 138はC₅類, I 139~ I 158はD₂類, I 159~ I 183はD₄類, I 184~ I 190はD₅類, I 191・I 192はE₂類, I 193・I 194は灰白色の土師器である。I 195・I 196は瓦器で, I 195は羽釜, I 196は鍋である。I 197~ I 199は須恵器で, いずれも播鉢の破片である。I 200は灰釉系陶器の鉢で, I 201は白磁碗の底部である。

土取り以前の遺跡

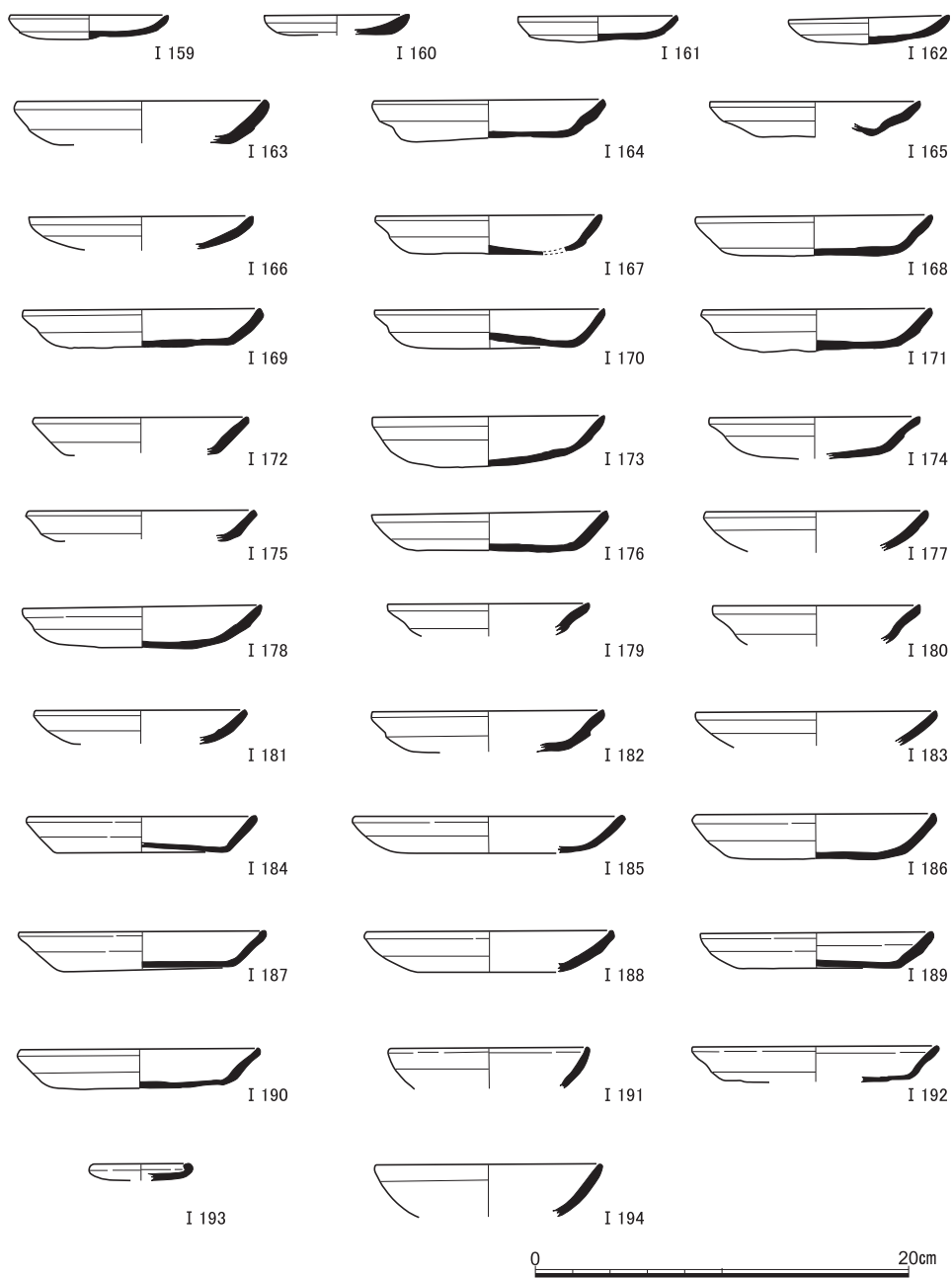


図11 S X 5 出土遺物(2) (I 159~ I 194土師器)

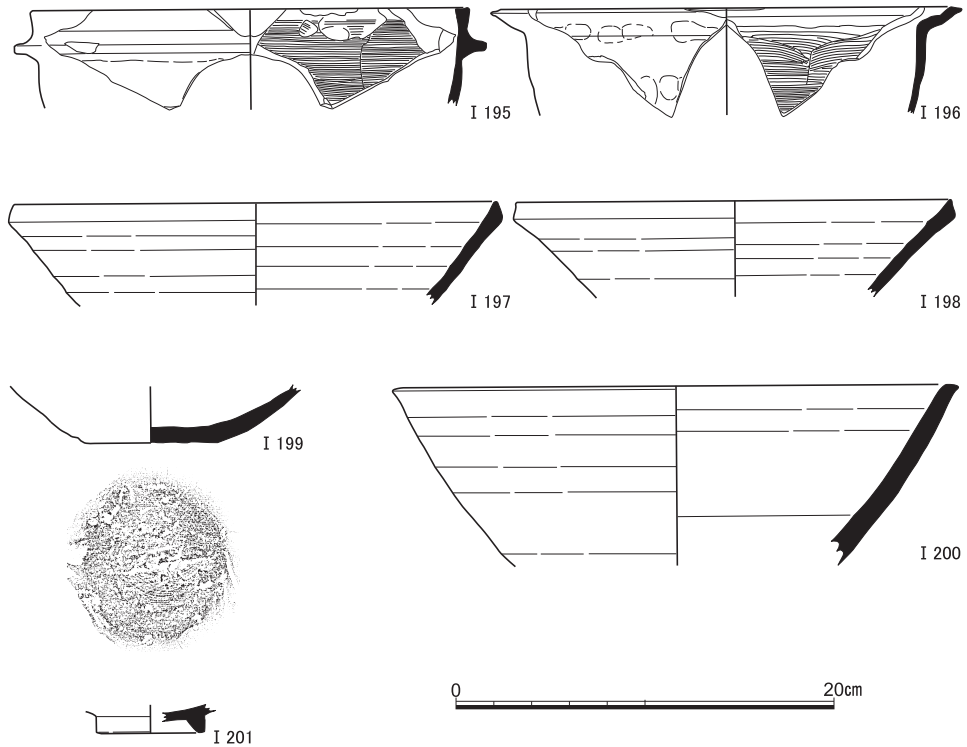


図12 S X 5 出土遺物(3) (I 195・I 196瓦器, I 197～I 199須恵器, I 200灰釉系陶器, I 201白磁)

S E 4 出土遺物 (I 202～ I 206) ここでは実測することが可能であった S E 4 上部出土遺物を報告する。I 202～ I 204は土師器で、I 202・I 203はD₃類、I 204はD₄類である。I 205は磁器染付小椀、I 206は陶器の底部である。外面底には「福次」の刻印がある。S E 4の上面も周辺も、不定形土坑によって破壊されていた。これら遺構の上部から出土した近世の遺物は、不定形土坑の掘削に伴うものであった可能性が残される。井戸の形成や使用の時期にかかわる遺物として、井戸の裏込めや木枠内から褐色系の土師器の小片が出土した。上部出土遺物の中にD類の土師器が含まれていたことから考えて、これらの低位から出土した土師器片はD類のものであった可能性がある。井戸はD類の盛行時期、すなわち13世紀頃に作られたものであったと考えておきたい。

S X 61 出土遺物 (I 207～ I 210) I 207～ I 209は土師器である。I 207は灰白色の凹み皿、I 208は褐色の受け皿、I 209はE₁類の大皿である。I 210は瓦器の小椀である。E類の土師器が出土していることから、S X 61は14世紀頃の遺構と考えられる。

土取り以前の遺跡

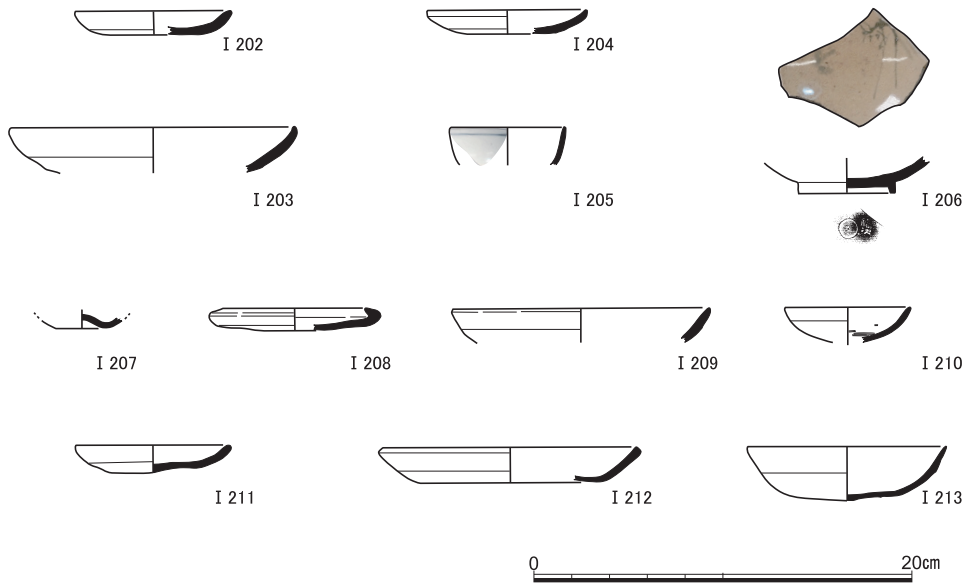


図13 S E 4 出土遺物 (I 202～ I 204土師器, I 205磁器, I 206陶器), S X 61出土遺物 (I 207～ I 209土師器, I 210瓦器), S X 64出土遺物 (I 211～ I 213土師器)

S X 64出土遺物 (I 211～ I 213) I 211～ I 213は土師器である。I 211は褐色系のD₃類の小皿。I 212は褐色系のD₅類の大皿, I 213は灰白色の大椀である。13世紀後半頃の様相を示していると考えられる。

(3) 鑄造関連遺物 (原色図版1, 図版8, 図14・15)

ここで、主に不定形土坑から出土したものであるが、土取り以前の土地の性格を知る上で重要と思われる遺物を取り上げておきたい。それは、鑄造にかかわる遺物である。すでに今回の調査区の南東に隣接する169地点での調査において、鑄造関連遺物として鑄型などの出土が報告されている〔浜崎1990〕。今回もまた、鑄型片やふいご羽口片が出土した。調査区全体において、鉄滓の出土が目立ったこともまた、同地の土地利用の歴史を考える上で示唆に富む。

鑄型とふいご (I 214～ I 222) I 214～ I 217は鑄型片である。I 214は169地点〔浜崎1990〕で見つかったII 48～50と共通し、密教法具の六器の口縁部の外型である。^{すき}を混ぜた胎土の粗い粘土(斜線部分)の内側に、粒子の細かな^{まね}真土(梨地部分)が貼り付けられる。小片であるため、六器の口径は復元できなかったが、169地点出土のものと同様の

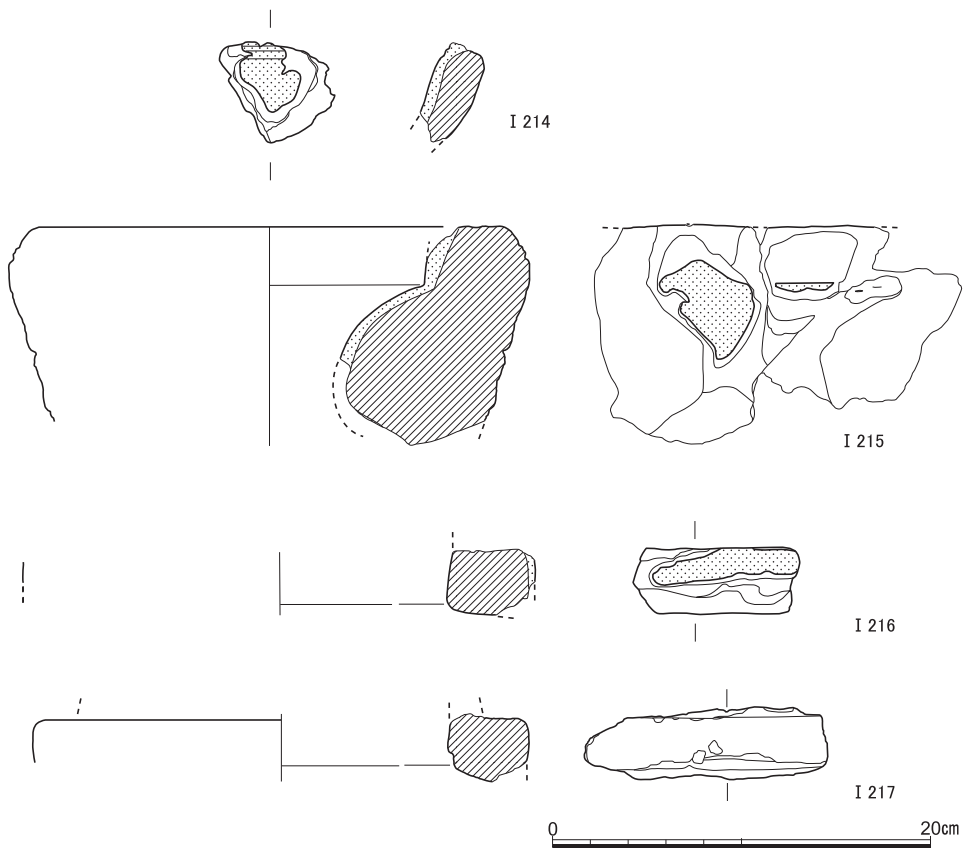


図14 鋳型

口径、つまり約11cmの口径を持つものと考えられる。I 215は華瓶の口縁部の外型と思われる。内側に弧を描くように真土が貼り付く。真土は一部しか残っていないが、頸部から肩部が鋳型片に沿って続いていた可能性がある。I 216・I 217は、華瓶などの脚の底部の内型と考えられる。これら2点は同一個体である可能性がある。I 216には外側に真土が残るが、I 217では剥離し、失われている。真土の残るI 216によれば、口径は27.2cmである。I 218～I 222はふいごの羽口の破片である。これら以外にも鋳型やふいご羽口の小片が出土している。

鉄 滓 今回の調査区における掘削において、各地点で鉄滓が目立って出土した。これらは、鋳造の過程で廃棄されたものと考えられる。総計で60,455gの鉄滓が出土した。地区ごとに見るならば、AM19a 3区で13,614gと最も多く、続いて、その南隣のAL19

土取り以前の遺跡

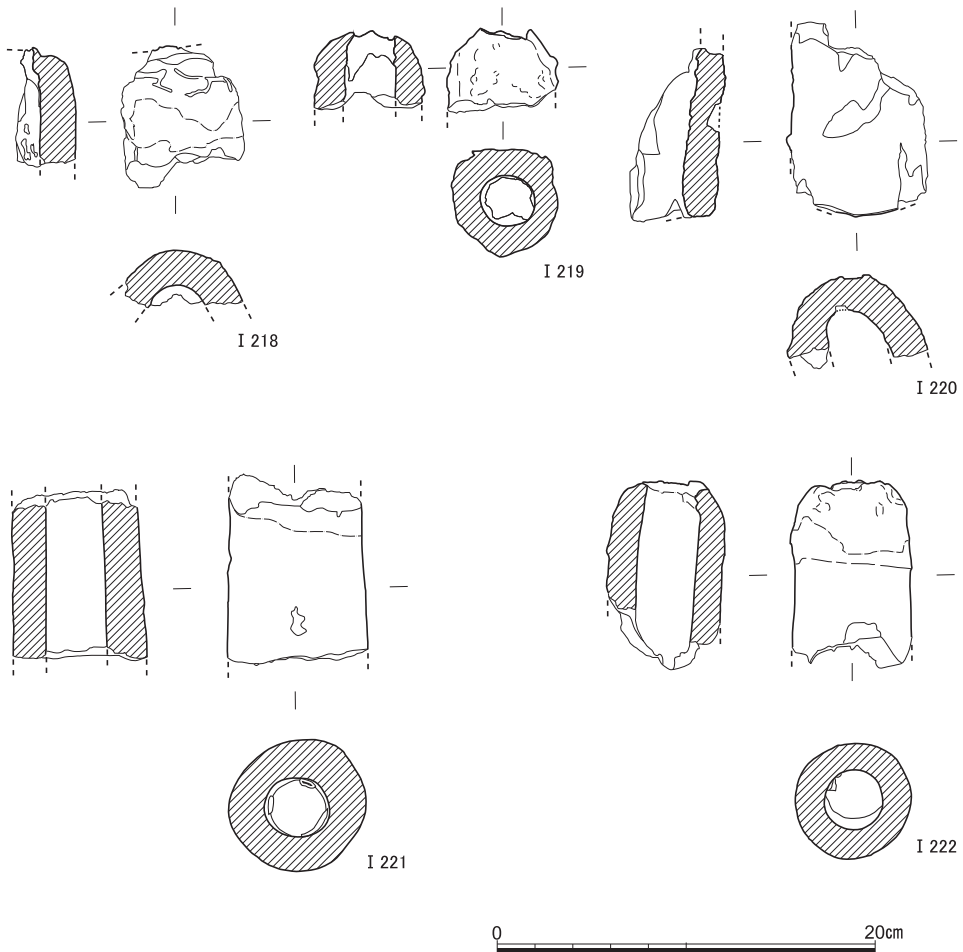


図15 ふいご

e 3区で12,239 g，東隣のAM19 a 4区で9,225 gとなる（図2）。他には，AM19 b 4区で5,561 g，AM19 a 5区で5,054 gの出土が確認され，他の地区では3,000 g未満である。調査区西端の南寄りにおいて，集中的に鉄滓が出土した状況を読み取ることができる。

焼土塊 今回の調査において，焼土塊も大量に出土しており，その内容は同じく医学部構内の270地点（図1）でおこなわれた調査で出土したものと共通する〔伊藤2003 a：II 558～572〕。建物の壁土などが熱を受けて崩落したものと考えられるが，鑄造関連遺物が見つかる場所の近辺で，このような焼土塊が多数出土している点は特筆される。

鉄製品 今回の調査区において，170点以上の鉄製品が見つかった。そのほとんど

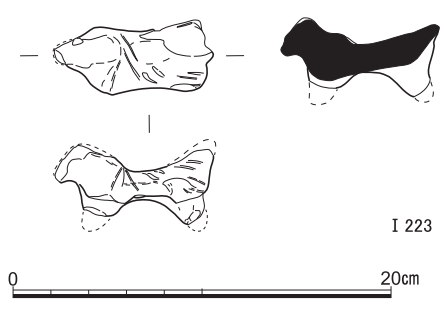


図16 土馬

が釘であった。これらの鉄製品の中には、この調査区で制作されたものも含まれているかもしれない。

(4) その他の遺物 (図版9, 図16)

不定形土坑の中から見つかった、土取り以前の時期の遺物として、縄文土器、弥生土器、古代土師器・須恵器・緑釉陶器・白色土器・瓦などがあつた。頭部の失われた土馬の破片

(I 223) が出土したほか、8世紀頃のものと考えられる製塩土器片なども一定数出土している。これらの出土遺物は、土取り以前において同地に弥生時代や平安時代の遺構が存在したことを示唆している。各時代において同地が重要な役割を担っていた可能性が高いことが分かる。

4 中・近世における土取りとその後

(1) 土取りに伴う不定形土坑 (図版3, 図17・18)

今回の調査区の全面において、不定形の土坑が認められた (図17)。それらが複雑な堆積状況を示すことは、図3・4の層位図で示した通りである。ここでは、土取り穴の埋土である茶褐色土の下半分から底にかけての遺物を参考に、各地区 (図2) における不定形土坑の掘削時期を考察する。

まず、 $Y = -20250$ 以東においては、基本的に不定形土坑の下半からの出土遺物の中にも近世の遺物が混じる。中には伏見人形や「つぼつぼ」と呼ばれる伏見産の玩具も含まれている。「つぼつぼ」は18世紀第3四半期頃まで確認される遺物であり [京都市埋文研編2004 C548B-1-19; F1432-1-40~45等], また、伏見人形は18世紀以降幕末までの遺構に認められるものであるから [京都市埋文研編2004 H166-1-37等; B687-2-19~24], 土取りが少なくとも18世紀頃まではおこなわれていたことになる。

$Y = -20250$ 以西では、近世の遺物はほとんど認められない。例外的に、AM19a 4やAM19b 4, AM19b 5, AL19e 5の北辺で近世の遺物が確認されており、これらの遺物の存在から、 $Y = -20250$ 以西においても近世に土取りがおこなわれたことが分かる。

一方、上記の例外的な箇所以外の $Y = -20250$ 以西の地点においては、基本的にF類の土師器以前の土器が見つかった。ただし、AL19d 5地点においては、E類以前の土師器

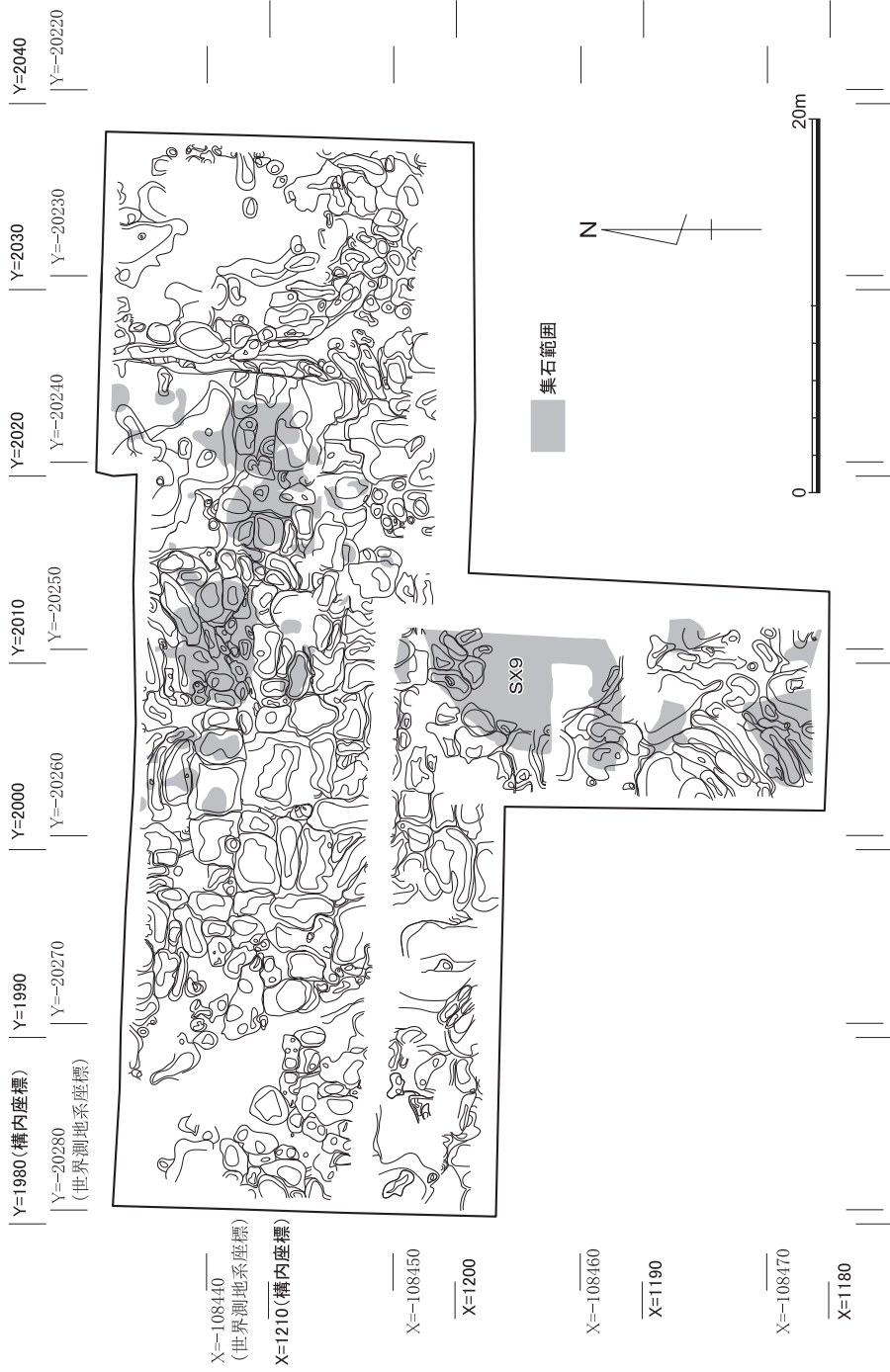


図17 不定形土坑と集石 縮尺1/400

しか認められなかった。AL19d5における土取りは、今回の調査区の中でも古い段階におこなわれたものである可能性がある。

AL19e4区においては、土取り穴の埋土中に土師器溜（SX2およびSX3）が含まれていた。後に詳述するように、これらから出土した土師器はE類を主体とする。よって、この地区内において、E類の時期以前に土取りがおこなわれたことが分かる。

以上から、今回の調査地点においては、土取りが、中世の14世紀以前のある時期から、18世紀頃までの長期にわたっておこなわれていたことが分かる。

(2) 不定形土坑に含まれる集石（図版3・4，図17・18）

不定形土坑の中には、その埋土の中に多数の拳大から人頭大の石を含むものがあつた。それら、集石の範囲を図17に示した。集石が集中して認められた調査区南部（SX9）においては、測量図を作成した（図18）。断面図に示したように、基本的にこれらの集石は、黄灰色シルトを目的とした土取り穴の埋土の中に含まれるため、これらが二次的な堆積によるものと判断せざるを得なかった。少し気になる点は、調査区南部における集石の分布が、南南西から北北東へ延びる点と、それと直交するようにして、調査区北部における分布が東南東から西北西へ延びる点である。土取り以前において、大量の石を用いる何らかの施設が同地に存在し、土取り後の埋土に現れた集石が、その名残をとどめるものである可能性があることを、ここで指摘しておきたい。

(3) 土取り後の遺構（図版6，図5）

不定形土坑の埋土の掘削の過程で、埋土中からいくつかの遺構を検出した。これらは、土取り後のある時期に、土取り穴の埋土を掘り込むように形成されたものである（図5）。

土師器溜SX2・SX3 調査区の西南部（AL19e3）において土取り穴と思われる不定形土坑の埋土を掘削する過程で、埋土の中から土器溜SX2・SX3が現れた。SX2は45cm×60cmで、SX3は15cm×35cmである。埋土はいずれもやや黒色を帯びる。完形の土師器が多く含まれ、その天地が東西を向く点が注目される。土器のわずかな傾きから、穴の東方から西壁へ向かって放り投げられるようにして廃棄されたものと思われる。

SX2とSX3いずれにおいても、主体となる土師器はE類で、凹み底の小椀を含む灰白色の土師器も一定量含まれていた。なお、SX3からはF類らしきものも1点出土している。いずれの土師器溜も14世紀頃のものと考えられる。今回の調査区における土取りが、14世紀以前にすでにおこなわれていたことの1つの証左として、これらの遺構の存在を挙げるができる。

中・近世における土取りとその後



図18 南部集石 (SX9) の平面図 (縮尺1/200) と断面図 (縮尺1/100)

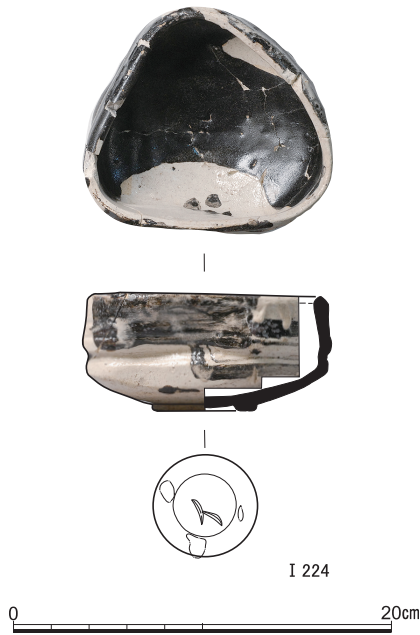


図19 不定形土坑出土黒織部 (I 224)

花紋も描かれる。柴垣勇夫氏によれば、これは黒織部梅鉢文沓茶碗で、17世紀初頭的美濃窯産である。土岐市元屋敷窯(連房式登窯)の製品と思われる。高台内のへら記号(矢印)は、土岐市久尻採集とされるものの中に認められる〔愛知県陶磁資料館編2009、箱28-14〕。このようなへら記号は、作者ではなく発注者の区別を示すとする説が有力である。

S X 2 出土遺物 (I 225~I 254) S X 2 から出土した遺物はすべて土師器皿である。I 225~I 227はE₁類、I 228~I 234はE₂類、I 235~I 237はE₃類、I 238~I 254は灰白色の土師器である。凹み底の小皿が多数含まれる。E類が主体的に含まれており、14世紀の土師器溜であることが分かる。

S X 3 出土遺物 (I 255~I 269) I 255~I 268は土師器皿である。I 255~I 259はE₂類、I 260はE₄類、I 261はF₃類、I 262~I 268は灰白色の土師器である。S X 2と同様に、凹み底の小皿が多数含まれる。I 269は瓦器のミニチュアの羽釜である。F類らしき土師器が混ざるものの、主体をなすのはE類であり、やはりS X 2と同時期の14世紀頃の土師器溜と考えられる。

S X 1 調査区の西北部で見つかった、茶褐色土に掘り込む南北方向の溝状の遺構で、その中には木材が据えられていた。遺構の大きさは南北170cm、東西40cm、検出した面からの深さは13cmである。木材は、中央やや西よりに南北方向に向けて据えられる。木材の大きさは長さ130cm、東西幅10cm、天地の高さ8.5cmである。中程に22cm×8.5cmのえぐりがある。出土遺物には近世の陶磁器が含まれる。

(4) 遺物 (原色図版2、図版9、図19・20)

不定形土坑出土黒織部 (I 224) 不定形土坑から出土した近世の陶器として、完形に近い黒織部があった。器は全体的にゆがむが、平面形は三角形を呈する。器の内面には

中・近世における土取りとその後

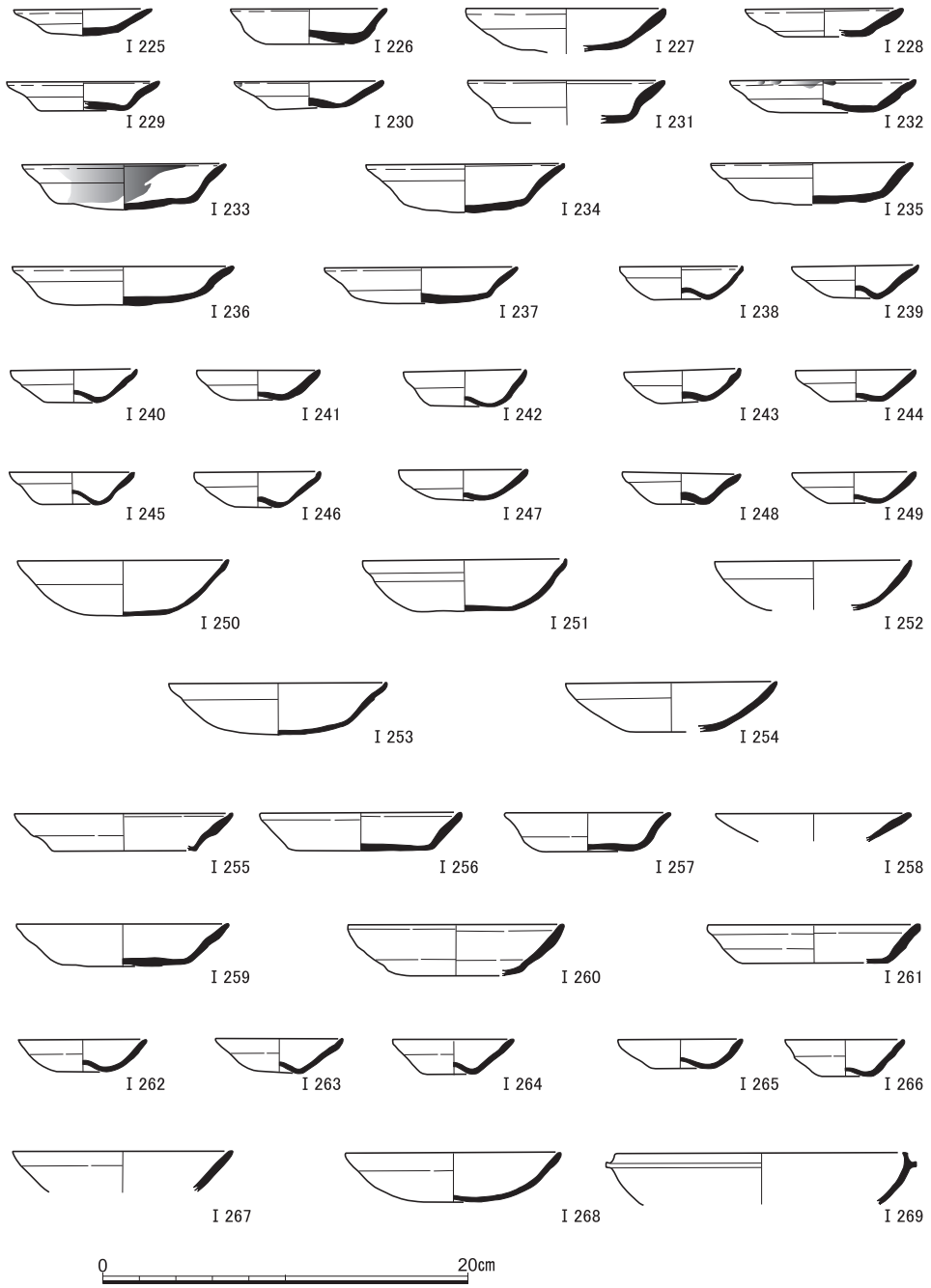


図20 S X 2 出土遺物 (I 225~I 254土師器), S X 3 出土遺物 (I 255~268土師器, I 269瓦器)

5 近世後半・近代の遺跡

重機によって表土や攪乱をとり除くと、黒灰色土と第2層の灰褐色土がみうけられた。黒灰色土は、おおよそX=1212以北、Y=2014以西のところで、灰褐色土は、それ以外のところで認められた。黒灰色土の下は、第4層の茶褐色土である。そして、灰褐色土の下は、第3層の灰黄色土、その下が茶褐色土である。ただし、本調査区の北東部では、灰黄色土が存在せず、灰褐色土の下が茶褐色土であった。灰黄色土・灰褐色土・黒灰色土は、近世後半から近代にかけての遺物包含層であると考えられる。

ちなみに、灰黄色土が広がっているところに関しては、発掘調査の期間が限られている都合上、灰褐色土とともに人力で掘削し、茶褐色土の上面で遺構の検出をおこなった。

(1) 遺 構 (図版2, 図21)

本調査区からは、複数の浅い溝(SD)とたくさんの小穴が見つかった。小穴のなかには、掘形が四角のものが多く含まれている。それらは、近世後半から近代にかけての耕作関連の遺構であると想定される。なお、第3層の灰黄色土と第2層の灰褐色土が存在しているところでは、検出された遺構の大半が灰褐色土を埋土とするものであった。

本調査区北西隅のSE1は、表土を掘削する過程で確認された井戸である。それには、漆喰製の井筒が使われていた。同じくSK1は、黒灰色土を掘りあげた後にみつかった土坑である。その覆土には、陶器や磁器の破片といった多量の遺物が混じっており、ゴミ捨て穴とみなしうる。SE1とSK1は、近代の遺構に相当する。

ちなみに、黒灰色土が広がっているおおむねX=1212以北、Y=2014以西の南側と東側は、20cmばかり低くなっており、段差がみうけられた。くわえて、東へと下がる段差は、X=1205とY=2013の交点付近からも検出されるにいたっている(段差については、図21の赤線を参照)。それらは、土地の区画を示しており、その利用の違いが土層の違いをもたらした大きな原因の1つであったと推量される。

(2) 遺 物 (図22~29)

SD22出土遺物(I270・I271) I270・I271は陶器。I270は底部外面に煤が付着する。

SK1出土遺物(I272~I302) I272~I287は陶器。I272~I275は灯明皿と灯明受皿。I274の外面半分には煤がまばらに付着する。I276は軟質施釉の小皿。内面に透明釉がかけられる。I283は皿ないしは鉢。高台には3か所の切り込みが入る。I286は乗

近世後半・近代の遺跡



図21 近世後半・近代の遺構 縮尺1/400

燭。底部外面に回転糸切り痕が認められる。I 287は花瓶か。畳付に「五九」の墨書が存する。I 288～I 301は磁器の皿・椀・段重など。I 292の口縁部内面には「通」、I 296の底部外面には「耕山」がみうけられる。I 302は先の曲がった青銅製品。

小穴出土遺物（I 303～I 318） I 303～I 311は陶器。I 303・I 304は灯明皿。前者の外面には煤が付着する。I 309は把手のある鍋。口縁部内面を露胎とする。I 312・I 313は磁器。I 314は土製の火鉢。頂部の平端面に煤が付着する。I 315は黒灰色を呈する砥石。I 316は蓮月焼。I 317は青銅製品。つり下げて用いる装飾具であろう。I 318は土製品の泥面子の芥子面。

灰褐色土出土遺物（I 319～I 331） I 319～I 325は陶器。I 319は灯明受皿。I 321は軟質施釉のミニチュアの椀。内面から体部外面の上半にかけて透明釉がかけられる。I 323は蓋。外面には灰釉が施され、また、底部には回転糸切り痕が認められる。I 326は磁器染付の皿。I 327は黄褐色を呈する砥石。I 328～I 330は土製品で、I 328が鳩笛、I 329が泥面子の芥子面、I 330が泥面子の大型の面打。I 331は寛永通宝。

黒灰色土出土遺物（I 332～I 339） I 332～I 334は陶器。I 332とI 333は灯明受皿と灯明皿。後者の外面には墨書が存する。「安」であろうか。I 334は脚部片で、底部外面に回転糸切り痕がみうけられる。I 335～I 337は磁器。I 338・I 339は土製品の泥面子の面打で、小型と中型のものである。

表土・攪乱出土遺物（I 340～I 392） I 340は土師質の植木鉢。底部の中央付近に穿孔する。底部外面には、小穴から円周にかけて一つの凹みが存する。また、体部の下端には、楕円で囲まれた「朝日園」の刻印が認められる。I 341～I 344は陶器。I 341は無釉の蓋で、五角形の底面には、四角で囲まれた「元々堂製」の刻印がみうけられる。I 343は丸善製のインク瓶。胴部下端に円で囲まれた刻印が存し、内側の円のなかに「M」、その周縁に「MARZEN'S INK」と「TOKYO」、それぞれの間に「☆」を配する。また、その下すぐの底部外面に、円で囲まれた「M」の刻印がみうけられる。I 344は甕。底部に円盤状のものを貼り付けており、その底面は露胎である。そして、そこには墨書が存するものの、それが何を表しているのか、定かにすることができない。

I 345～I 380は磁器。I 346・I 347は皿で、ともに体部外面に「解剖学教室」、底部外面に隅丸方形で囲まれた「道仙」が認められる。これらは、調査区北東隅のゴミ捨て穴からみつかったものである。重機で掘削したので、大量の遺物をすべてとりあげることができなかつたけれども、めぼしいものに関しては、できる限り拾いあげるよう努めた。なお、

近世後半・近代の遺跡



図22 S D 22出土遺物 (I 270・I 271陶器), S K 1 出土遺物(1) (I 272~ I 287陶器, I 288~ I 297磁器)

京都大学医学部構内AM20区の発掘調査

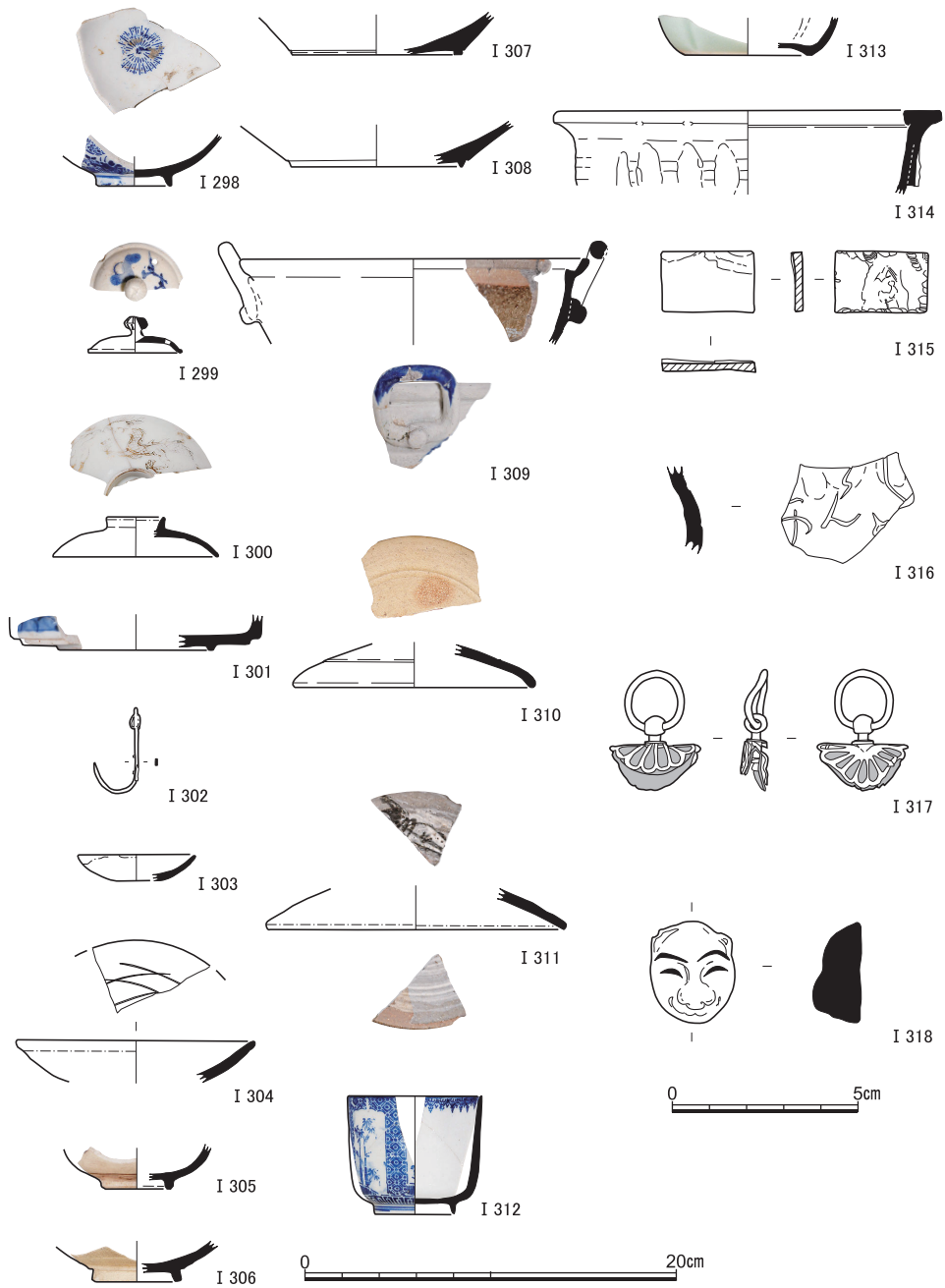


図23 SK1出土遺物(2) (I 298~ I 301磁器, I 302青銅製品), 小穴出土遺物 (I 303~ I 311陶器, I 312・I 313磁器, I 314火鉢, I 315砥石, I 316蓮月焼, I 317青銅製品, I 318土製品) I 316~ I 318は縮尺1/2

近世後半・近代の遺跡

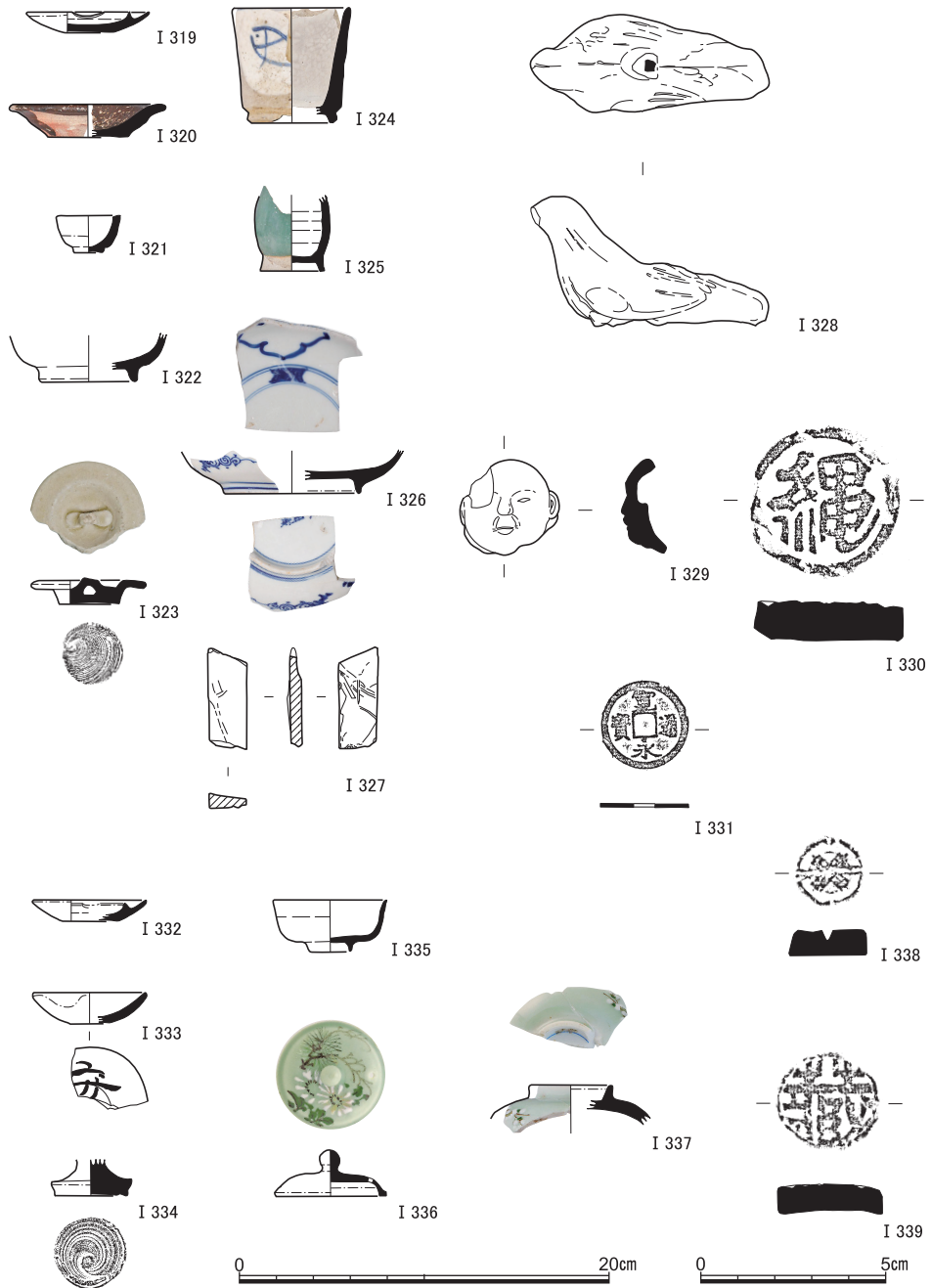


図24 灰褐色土出土遺物 (I 319~ I 325陶器, I 326磁器, I 327砥石, I 328~ I 330土製品, I 331寛永通宝), 黒灰色土出土遺物 (I 332~ I 334陶器, I 335~ I 337磁器, I 338・I 339土製品) I 328~ I 331・I 338・I 339は縮尺1/2

そこから出土した遺物は、I 340・I 342・I 343・I 345・I 348・I 357～I 360・I 362・I 363・I 367・I 368・I 370～I 372・I 374～I 376・I 380～I 383が該当する。I 348は皿。底部外面に「万珠堂」と書き込まれている。I 349は皿。底部外面に「Y m k i t o r i」とみえる。I 350は皿。口縁端部内面に2本の緑色の線がめぐる。また、体部外面に「医院」の円形意匠、底部外面の中央に「硬質磁器」・扇の絵・「MINO YOGYO LTD」がみうけられる。美濃窯業株式会社の製品である。

I 351は染付の小椀。体部外面に、謡曲「高砂」の一節である四海波^{しかいなみ}のはじめの部分が認められる。I 352は染付の小椀。内面には色絵が施されている。また、体部外面の下端には、「念清水三郎上^{【海カ】}□」がみうけられる。I 353は椀。底部外面に「九谷」とみえる。I 354は椀。見込みに「大学」の円形意匠が存するものの、絵具が剥がれてしまっている。I 355は椀。体部外面の上端に3本の緑色の線がめぐる。I 356は椀。口縁端部外面に2本の緑色の線がまわり、底部外面に「岐／391」の統制番号が認められる。I 357・I 358は染付の椀。どちらも体部外面に「富貴長命」の銭貨が描かれる。I 359・I 360は染付の椀。いずれも体部外面に「富貴長命」「福寿長命」の銭貨が存し、底部外面に「山花」がみうけられる。I 361は椀。底部外面に「晋泉」とみえる。I 363～I 365は染付の湯呑茶椀。底部外面にそれぞれ「□水」「平安春峰」「玉松園／柏山製」が認められる。I 369は輪花鉢。体部外面に「北支／出征」とあって、それらの間に食事をする兵士の姿が描かれる。I 370は染付の土瓶の蓋。I 371の染付の土瓶と組み合わせ可能性が高い。

I 372～I 380は、用途不明のものが含まれるけれども、その大半が医学・医療にかかわるものであると思われる。I 373には、底部外面に「瀬／210」の統制番号がみうけられる。I 375は口縁部の端のところを露胎とし、その外面には「SCP／JAPAN」とみえる。I 376は底部外面が露胎であって、体部外面には「京都□□」が認められる。I 377の底部外面の中央には、「昭和硬質陶磁器」などが存する。I 378は乳鉢、I 379は乳棒。前者は体部内面と底部内・外面、後者は先のところを露胎とする。I 380は口縁端部内面を露胎とし、肩部に「大医」の円形意匠を有する。

I 381～I 383はガラス製品。いずれも薬に関するものであろう。I 381は白色を呈し、底部外面に「EDEN／エデン」とみえる。I 382も白色であって、底部外面に「SANTANEY & CO」とみうけられる。また、胴部にはラベルの一部が残存する。I 383は薄い緑色を帯び、胴部に京都市の徽章と「京都帝国大学薬局」が認められる。

I 384は黄灰色を呈する打製石斧。「台湾」からはじまる注記が存する。I 385は灰赤色

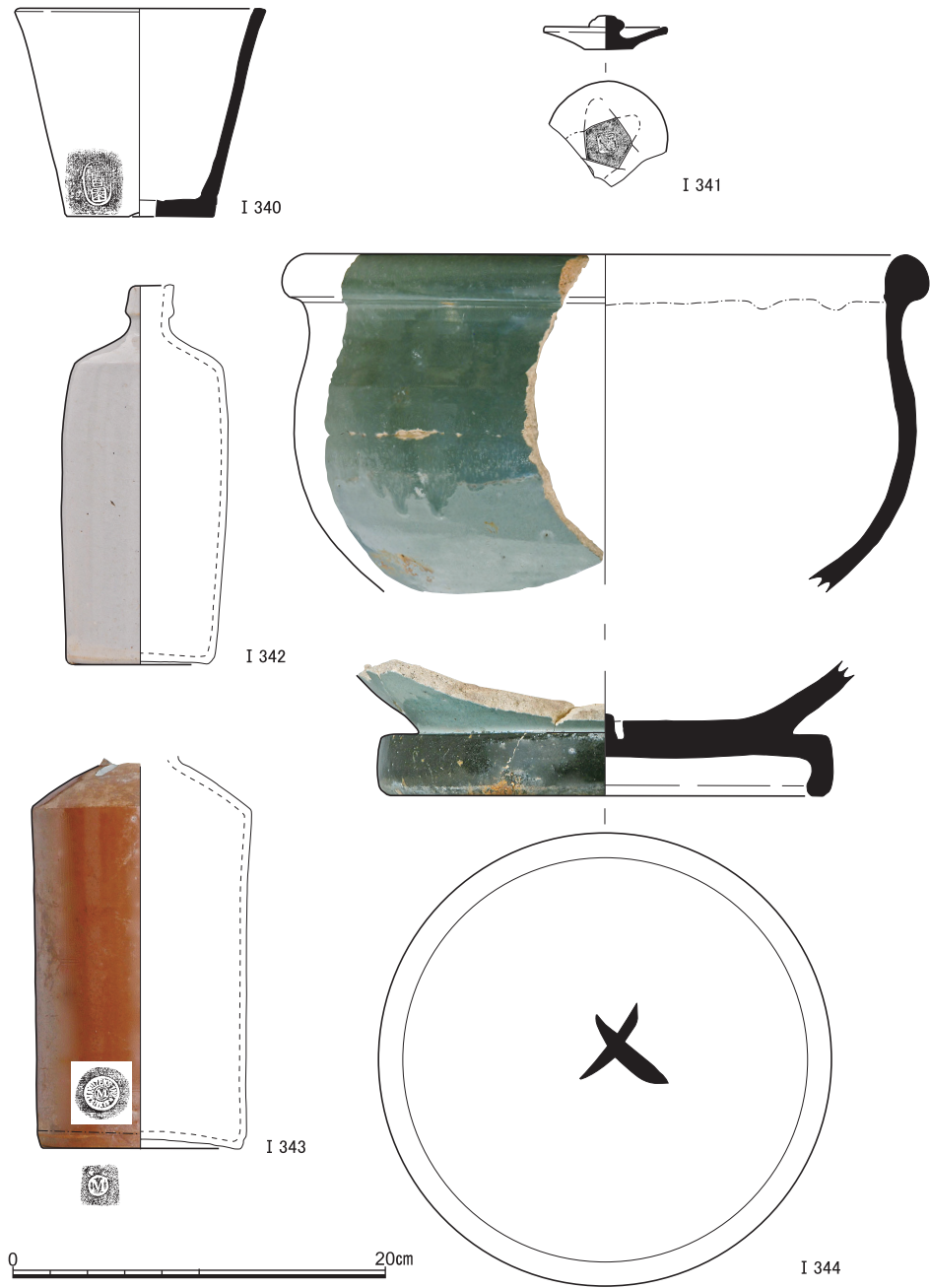


図25 表土・攪乱出土遺物(1) (I 340植木鉢, I 341~ I 344陶器)



図26 表土・攪乱出土遺物(2) (I 345~ I 350磁器)

近世後半・近代の遺跡



図27 表土・攪乱出土遺物(3) (I 351~ I 371磁器)

京都大学医学部構内AM20区の発掘調査

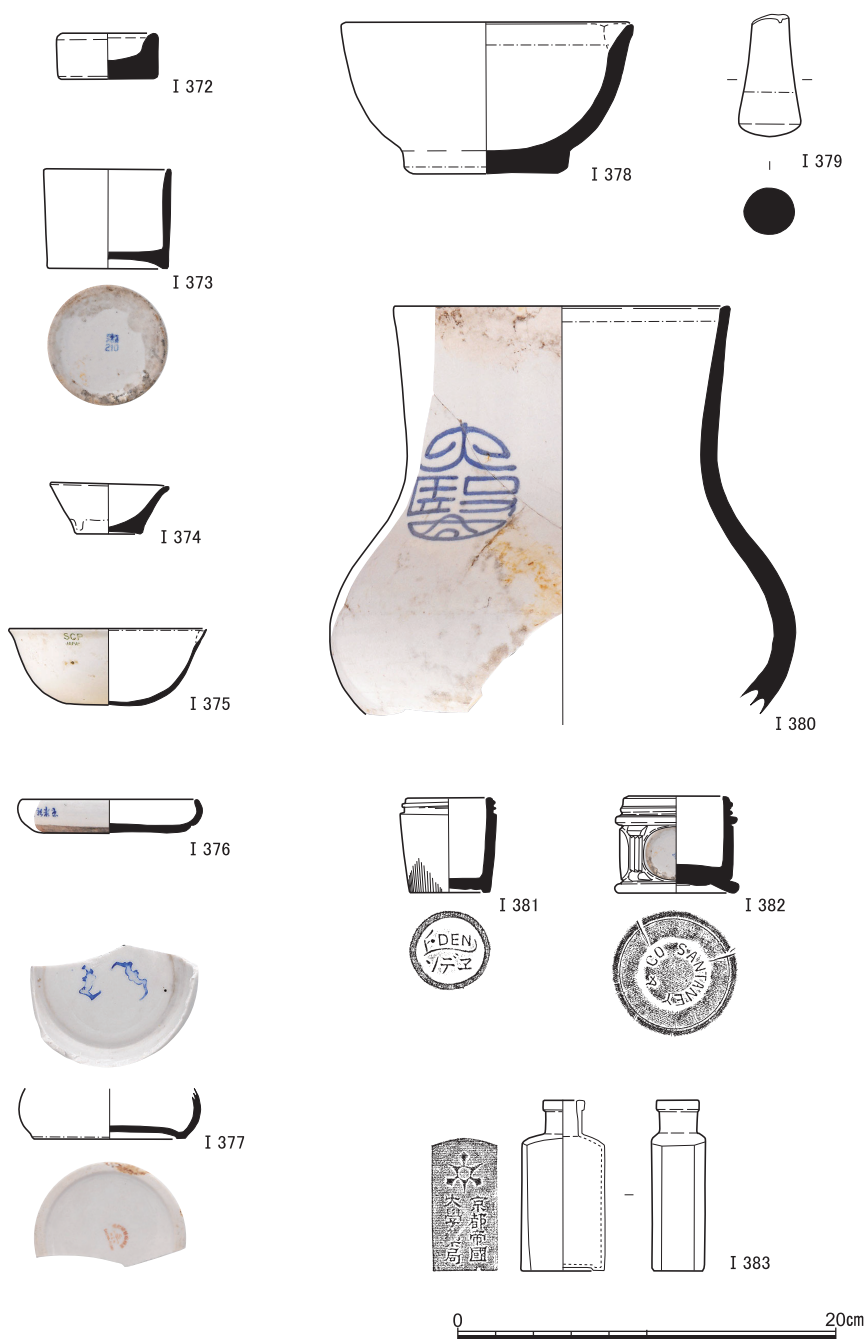


図28 表土・攪乱出土遺物(4) (I 372~ I 380磁器, I 381~ I 383ガラス製品)

近世後半・近代の遺跡

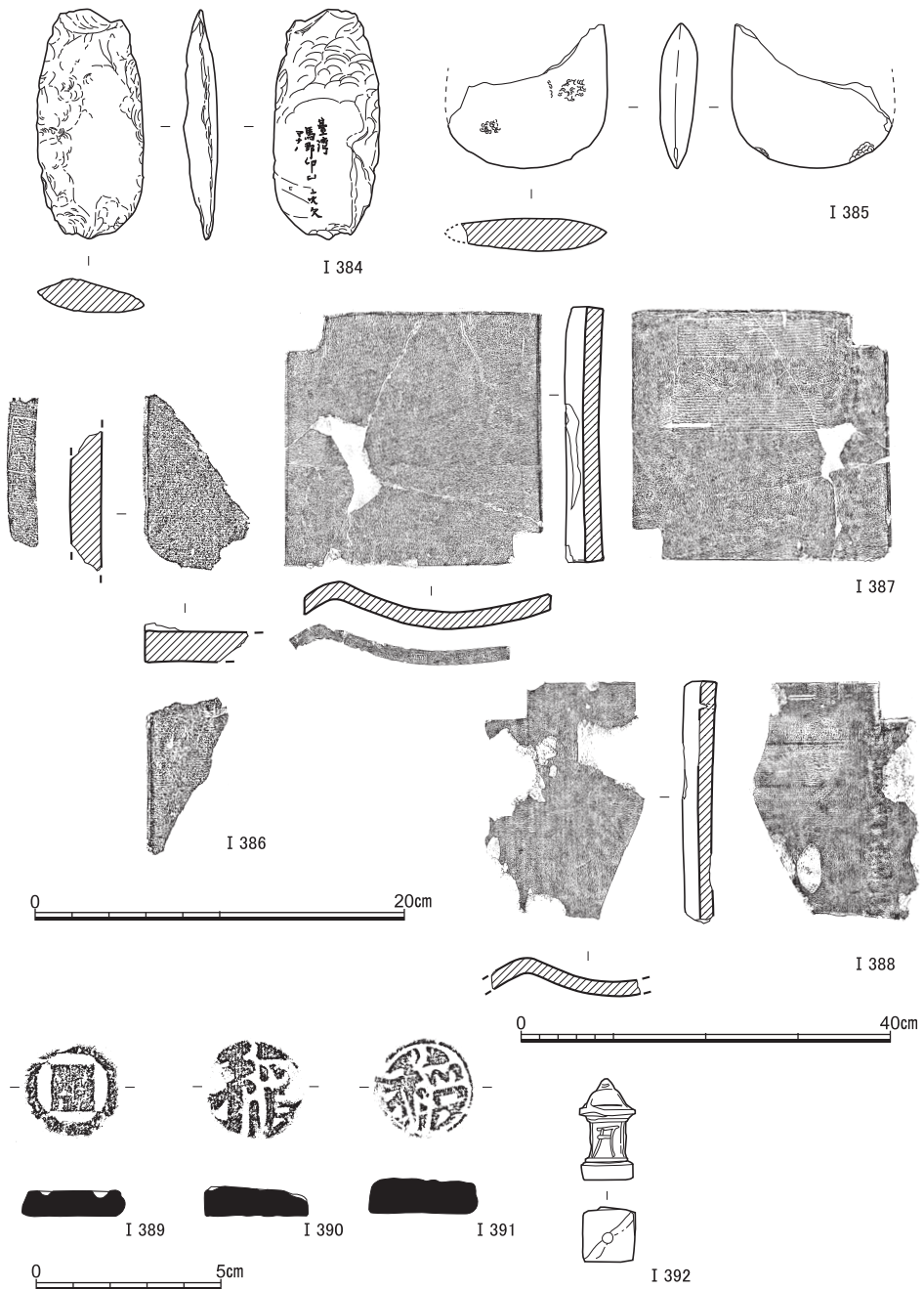


図29 表土・攪乱出土遺物(5) (I 384打製石斧, I 385磨製石斧, I 386~I 388瓦, I 389~I 392土製品) I 387・I 388は縮尺1/8, I 389~I 392は縮尺1/2

の磨製石斧。これらについては後述する。

I 386は燻瓦。側端面に、四角で囲まれた「請合／尾宗」の刻印がみうけられる。I 387・I 388は椀瓦。前者には頭部の側端面に四角で囲まれた「西川」、後者には凸面に枠囲いの「□七」の刻印が存する。

I 389～I 392は土製品。I 389～I 391は泥面子の中型の面打。I 392は箱庭道具。

6 小 結

(1) 同地における土取りの時期

今回の調査では、調査区の全面において、茶褐色土を埋土とする不定形土坑が広がっている状況を認めた。調査区全体に広がる黄灰色シルトの掘削を目的としたものであったと思われる。よって、同地における土地利用の変遷を判断するためには、まずは、同地において土取りがいつおこなわれたかを把握しなければならない。そのために、土坑の埋土の下半から出土した遺物、土取りによる破壊を免れた遺構、土取り後に形成された遺構、の三者の年代を確認した。

まず、土坑埋土下半から出土した遺物からは、地区ごとに遺物の年代が異なる。調査区の東半、およそY = -20250以東において18世紀に下る遺物を含む近世の遺物が一定量出土する一方で、西半においては近世の遺物はほとんど認められない。ただし、いくつかの地点で少量ながら近世のものと思われる遺物が出土したから、調査区の西半にも近世の土取りが及んでいたものと思われる。いずれにせよ、近世遺物の出土量は東半ほどではなく、東半の不定形土坑がより新しい時期におこなわれた土取りの痕跡であることが想定される。これらいくつかの地点を除くと、西半においては中世以前の遺物ばかりが出土した。基本的には出土遺物の中にF類の土師器が含まれていることから、F類の時期、つまり、15・16世紀頃の年代が与えられるが、AL19d 5区においては、最も新しい時期の土師器はE類のものであった。これは土取り穴の掘削が、E類の時期、すなわち14世紀にはすでに開始されていたことを示唆する。

次に、土取り以前に形成された遺構、すなわち不定形土坑による完全な破壊を免れた遺構を見ると、12世紀頃のSX4、13世紀頃のSX5・SX64、14世紀頃のSX61などの遺構が確認される。14世紀のある時点では同地がまだ土取りの対象とされていなかった可能性を示している。

そして、土取り後に形成された遺構、すなわち、不定形土坑の埋土を削るようして形

成された遺構の中には、S X 2・S X 3のような14世紀の土師器溜が含まれる。このような遺構の存在が示すのは、土取り穴の中には、14世紀以前に掘られたものが含まれていることである。

以上の三者の年代を踏まえるならば、同地における土取りは、14世紀のうちに開始され、18世紀に至るまでおこなわれたことになる。同地が長期にわたって土取りの対象とされていたことが分かる。

(2) 土取り以前の土地利用

既述のように、今回の調査区においては全面で土取りがおこなわれたため、土取り以前の遺構はほとんど残存していなかった。しかしながら、わずかに土取りによっては完全に破壊されなかった遺構も確認された。重要な遺構として、縄文時代後期頃に形成されたと考えられる自然流路S R 2・S R 3、12世紀の土師器が大量に出土したS X 4、13世紀の土師器がまとめて出土したS X 5、13世紀頃に形成されたものと思われる井戸S E 4、14世紀頃の鑄造にかかわる遺構である可能性のあるS X 61などがある。

同地が鑄造にかかわっていた可能性が高いことは、出土遺物からも説明することができる。なぜなら、不定形土坑の埋土などから、鑄造にかかわるものと考えられる遺物が多量に見つかっているためである。とく、今回の調査で計60kg以上の重量をなす鉄滓がまとめて出土している点は注目される。また、1点の鑄型片は、本調査区の南東に隣接する169地点で出土した六器の鑄型片と同様のものであったが、それとは異なる2種類の鑄型が出土したことも特筆される。一方は華瓶の外型と考えられるが、もう一方の内型については、そこから鑄造される器物が何か分からなかった。これら、鉄滓や鑄型の他にも、ふいご羽口片、焼土塊、鉄製品も多量に出土した。なお、土取り以前のものとして残存していた鑄造にかかわる可能性のある遺構は14世紀頃のものであるから、同地では14世紀時点において鑄造がおこなわれていた可能性が高い。

土取り以前の土地利用にかかわり、もう一点注目すべき点は、不定形土坑埋土の中から現れた大量の集石である。集石の分布は調査区南部から北北東へ延び、それが垂直に曲がって西北西へ続くように見受けられた(図版3-2, 図17)。これらの集石は、土取り穴の埋土の中に含まれており、二次的な堆積にすぎないが、このように石を大量に用いる施設が、集石が検出された地点の周辺に、土取り以前に存在した可能性がある。同地で12世紀後半にかかる土師器溜が見つかることも考え合わせ、これらの集石が未だに発見されるに至っていない福勝院とかかわる可能性は、やはり想定されるべきであろう。

(3) 近世後半以降の耕地について

まずは、土取りに関して、私見を簡単に述べると、その大半は、近世前半におこなわれたものであろう。第4層の茶褐色土上面では、土取りの対象であった第6層の黄灰色シルトが散見した。こうした点などを踏まえると、もともと茶褐色土上面の標高の辺りで、黄灰色シルトがかなり露わになっていたのが推量される。察するに、茶褐色土は、土取りが終わった後に、本調査区の近くから運ばれたものが多かったのではなかろうか。くわえて、集石の礫もまた、鴨川の河原などから移されたものが少なくなかったと臆測される。集石をめぐっては、農作の便宜を図ったが故のものであったかもしれない、よって、そうした点についての吟味が求められているといえよう。

茶褐色土などを用いて土地がだいたいならされて以降、近世後半には、本調査区は、耕地となった。それは、おそらく畑であろう。検出された段差を前提にすると、①おおよそX=1212以北・Y=2014以西の範囲、②後者とその延長ラインの東側の範囲、③延長ラインの西側の範囲に土地が区分しうると考えられる。

ここで、近世後期の様相を示す『山城国吉田村古図』（京都大学総合博物館所蔵）と照らし合わせると、①が「弥勒 拾四番 五畝 豊後」、②が「弥勒 拾番 五畝 豊後」、③が「弥勒 拾壹番／壱反／河内」に該当すると思われる。それらに共通する「弥勒」が小字名、1つ目のものがおおむね東西に、2つ目のものがおおむね南北に長い土地、3つ目のものがおおむね逆台形を呈する土地である。

以上のような耕地の区画は、土層に基づくと、明治時代になってもうけ継がれていたことが想定される。

(4) 打製石斧と磨製石斧について

I 384の打製石斧とI 385の磨製石斧は、重機による表土掘削の際に、本調査区の北西隅のところから見つかった。その辺りには、近代の遺物が多く認められ、それらは、打製石斧と磨製石斧を含めて、廃棄されたものであったと考えられる。

I 384の打製石斧には、「台湾」から書き出す注記がみうけられる。その次の行の1字目は、「馬」で間違いなく、また、終わりの2文字は、「大欠」とみなしてよいだろう。しかるに、にじんでしまっているところが存し、それゆえに、肉眼で読み解くことは、なかなか難しい。とはいえ、注記には、打製石斧が出土した場所が書き入れられている公算が大きく、したがって、それは、台湾の遺跡から見つかった遺物であるのは、まず誤りなからう。そして、I 385の磨製石斧には、割れてなくなった部分に注記があって、同様に国外

小 結

の遺跡から出土した遺物であった可能性も否定することができまい。

I 384の打製石斧とI 385の磨製石斧は、表土を除去する過程で、たまたま拾いあげられたものである。もとより、それらの他に、注記を有する国内や国外の貴重な遺物が混ざっていた場合も十分想定される。

今後は、I 384の打製石斧の注記の釈読に努めるとともに、それとI 385の磨製石斧の石材を吟味するなどして、これらの出土地点の絞り込みをおこなっていく必要が存する。くわえて、そのような大切な遺物がどのように入手され、どこで保管され、そして、どうして捨てられるにおよんだのか等、こうした点をめぐっても検討を深めていくことが不可欠になると考えられよう。

本章は、第1節～第4節・第6節(1)・(2)を内記が、第5節・第6節(3)・(4)を笹川が執筆した。発掘調査と整理作業にあたっては、長尾玲、西田陽子、磯谷敦子、高野紗奈江、河野葵の補佐を得た。また、集石の測量にあたっては、山口欧志氏（奈良文化財研究所）にご協力をいただいた。そして、不定形土坑から出土した黒織部の考察にあたっては、柴垣勇夫氏より助言をいただいた。記してお礼申し上げます。

参考文献

- 愛知県陶磁資料館学芸課編 2009年 『志野・黄瀬戸・織部のデザイン』
- 石田志朗・中村徹也・中村友博 1972年 『京都大学理学部構内遺跡発掘調査の概要』
- 泉 拓良 1977年 「京都大学植物園内遺跡」『仏教芸術』115号
- 五十川伸矢 1986年 「京都大学医学部構内A N20区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和58年度』
- 伊藤淳史 1999年 「北白川追分町弥生時代遺跡の展開—京都大学北部構内B A30区（追分地蔵地点）の出土資料—」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1995年度』
- 2003年 a 「京都大学医学部構内A O17区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1999年度』
- 2003年 b 「比叡山西南麓における縄文から弥生—京都大学構内遺跡出土資料の紹介と検討を通じて—」『立命館大学考古学論集』Ⅲ
- 2010年 「鴨東の古代—古墳—奈良時代の遺跡調査成果からみた集団動態—」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2007年度』
- 2018年 「京都大学構内遺跡出土の平安時代土馬—吉田南構内A O22区出土資料の紹介—」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2016年度』
- 伊藤淳史・富井眞・内記理 2016年 「京都大学吉田南構内A M21区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2014年度』
- 伊藤淳史・富井眞 2018年 「京都大学北部構内B C30区ほかの立合調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2016年度』
- 上田正昭・川上貢・濱崎一志 1986年 「昭和58年度京都大学構内遺跡調査の概要」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和58年度』
- 梅原末治 1923年 「京都帝国大学農学部敷地ノ石器時代遺跡」『京都府史蹟勝地調査會報告 第5冊』
- 1935年 「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告 第16冊』
- 1936年 「摂津阿武山古墓調査報告」『大阪府史蹟名勝天然紀念物調査報告 第7輯』
- 小野山節・都出比呂志 1973年 『高槻市安満遺跡の条里遺構』
- 小野山節・中村徹也 1976年 『京都大学教養部A号館増築予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要』
- 梶原義実 2003年 「13世紀における「中央官衙系」瓦工の編成と展開—京都大学医学部構内A O18区の資料から—」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1999年度』
- 京都市埋蔵文化財研究所編 2004年 『平安京左京北辺四坊』（京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊）
- 京都大学広報委員会 1977年 『京都大学建築八十年のあゆみ 京都大学歴史的建造物調査報告』
- 京大調査会(京都大学農学部構内遺跡調査会・京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所構内遺跡調査会)
1977年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和51年度』
- 京大埋文研(京都大学埋蔵文化財研究センター)
1978年 a 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』
1978年 b 『京都大学埋蔵文化財調査報告第1冊—京大農学部遺跡B G36区—』

参 考 文 献

- 1979年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度』
1980年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和54年度』
1981年 a 『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ—白河北殿北辺の調査—』
1981年 b 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』
1983年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』
1984年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』
1985年 『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ—北白川追分町縄文遺跡の調査—』
1986年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和58年度』
1987年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和59年度』
1988年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和60年度』
1989年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1986年度』
1990年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1987年度』
1991年 『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ—京都大学病院構内遺跡の調査—』
1992年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1988年度』
1993年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1989～1991年度』
1995年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1992年度』
1997年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1993年度』
1998年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1994年度』
1999年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1995年度』
2000年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1996年度』
2002年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1997・1998年度』
2003年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1999年度』
2005年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2000年度』
2006年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2001年度』
2007年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2002年度』
2008年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2003年度』
京大文総研（京都大学文化財総合研究センター）
2009年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2004～2006年度』
2010年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2007年度』
2011年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2008年度』
2012年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2009年度』
2013年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2010年度』
2014年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2011～2012年度』
2015年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2013年度』
2016年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2014年度』
2017年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2015年度』
2018年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2016年度』
2019年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2017年度』
京大文遺活（京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター京大文化遺産調査活用部門）
2020年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2018年度』

参 考 文 献

- 2021年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2019年度』
2022年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2020年度』
2022年 『都市近郊地域歴史像の再構築—京都・白川道の研究を基盤として—』平成31年～令和3年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書
- 笹川尚紀・金光桂子・千葉豊 2021年 「京都大学構内遺跡出土の和歌墨書土器」『史林』第104巻第4号
- 島田貞彦 1924年 「京都市北白川追分町発見の石器時代遺跡」『考古学雑誌』第14巻第5号
- 島田貞彦・水野清一・小川五郎・三宅宗悦 1929年 「摂津国高槻「摂津農場」石器時代遺跡調査報告」『人類学雑誌』第44巻第7号
- 千葉 豊 2013年 「京都大学北部構内採集の石棒」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2010年度』
2018年 「蓮月焼を模倣した陶器について—京都大学病院構内A E 19区 S K 15出土資料一」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2016年度』
- 千葉豊・富井眞・井上智弘 2007年 「京都大学病院構内A E 19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2002年度』
- 富井 眞 1998年 「北白川追分町遺跡出土の縄文土器—北白川C式の成立を考える—」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1994年度』
- 内記 理 2022年 「2020年度・2021年度京都大学本部構内の発掘調査」『都市近郊地域歴史像の再構築—京都・白川道の研究を基盤として—』平成31年～令和3年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書
- 中村徹也 1973年 『京都大学農学部総合館周辺埋蔵文化財発掘調査の概要』
1974年 a 『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要 I』
1974年 b 『京都大学理学部ノートバイオロン実験装置室新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要』
1975年 『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要 II』
- 浜崎一志 1990年 「京都大学医学部構内A L 20区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1987年度』
- 藤岡謙二郎 1973年 「北白川扇状地と教養部構内発見の遺物包含層並びにその先史地理学的意義」『人文』第19集（京都大学教養部）
- 横山浩一・佐原眞 1960年 『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第1部 日本先史時代

表1 京都大学構内遺跡のおもな調査

(地点は図版1を参照, 文献中「埋」は京大埋文研,
「調」は京大調査会, 「文」は京大文総研, 「遺」
は京大文遺活をさす。)

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
1923	農学部	1・2	濱田耕作	表採・試掘			縄文土器, 石器	梅原23, 島田24	
1924	農学部	不明	藤本理三郎				石棒	横山・佐原60	
1929	大阪府満		鳥田真彦 水野清一 ほか	発掘			弥生土器	鳥田・水野ほか29	
1934	大阪府阿武山古墳		梅原末治	発掘			乾漆棺, 玉飾枕	梅原36	
1935	北白川町小倉町		梅原末治				縄文土器, 石器	梅原35	
1956	農学部	3	羽館易	採集			縄文土器		
1971	農学部	4	石田志朗	採集			弥生土器	埋79	
1972	農学部	5		採集			石棒	千葉13	
1972	大阪府満		小野山節都 出比呂志	事前発掘	1500	条里の溝	弥生土器	小野山・都出73	建物をずらし条里の溝を保存
1972	追分地蔵	6	石田志朗 中村徹也	事前発掘	600		弥生土器	石田ほか72, 伊藤99	
1972	教養部	7	藤岡謙二郎	工事中採集・実測			縄文土器	藤岡73	
1973	農学部	8	中村徹也	事前発掘	13	瓦溜	縄文土器, 瓦(平安)	埋78 b	瓦溜埋戻し
1973	農学部	9	中村徹也	事前発掘	600		縄文土器, 土師器	中村73, 伊藤・富井18	
1973	植物園	11	中村徹也	事前発掘	400	縄文後期甕棺・配石遺構	縄文土器	中村74 b, 泉77	甕棺・配石遺構の移築を決定
1974	農学部	12	中村徹也	事前発掘	800		縄文土器	中村74 a	
1974	農学部	13	中村徹也	事前発掘	800		縄文土器	中村75	
1975	教養部	14	小野山節 中村徹也	事前発掘	750		土師器, 瓦, 陶磁器	小野山・中村76	
1976	農学部 B E 33区	16	泉拓良	事前発掘	900	縄文晩期土壇墓	縄文土器, 土師器, 瓦	調77	
1976	病院 A E 15区	19	岡田保良	事前発掘	2200	古代・中世溝, 池, 土器溜	土師器, 瓦, 陶磁器	調77, 埋81 a	
1976	植物園 B D 35区	29	吉野治雄	保存				調77	甕棺・配石の移築復元
1976	病院 A H 17区	34	泉拓良	事前発掘	200	近世溝, 井戸, 集石	土師器, 瓦	埋78 a	
1976	教養部 A S 23区	35	吉野治雄	試掘	10	溝	縄文土器, 須恵器	調77	
1976	北一部 B J 33区	36	宇野隆夫	試掘	10		縄文土器	調77	
1976	和歌山県瀬戸		丹羽佑一	事前発掘	300	縄文時代土壇墓	縄文土器, 人骨	埋78 a	
1977	病院 A F 14区	39	岡田保良 宇野隆夫	事前発掘	800	古代護岸, 溝, 井戸	土師器, 瓦, 陶磁器	埋78 a, 埋81 a	
1977	医学部 A O 18区	41	泉拓良 吉野治雄	事前発掘	1200	中世溝, 土器溜, 井戸	土師器, 瓦, 陶磁器	埋79, 梶原03	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
1977	北電気管	43	吉野 治雄 宇野 隆夫	立合		溝, 土坑	須恵器, 土師器	埋78a	
1977	教養部 AQ23区 AN23区	48	宇野 隆夫	試掘	80	溝	弥生土器, 土師器, 瓦	埋79	
1977	白河北殿 比定地 AA18区	49	岡田 保良	試掘	40	溝	土師器, 瓦, 陶磁器	埋79	AA17区
1978	理学部 BE29区	54	岡田 保良 宇野 隆夫 吉野 治雄	事前発掘	500	弥生中期方形周溝墓, 中世火葬塚	弥生土器, 土師器, 瓦	埋79	火葬塚と方形周溝墓を現地保存
1978	農学部 BG32区	55	泉 拓良 宇野 隆夫	事前発掘	100	縄文土坑, 古代溝, 土坑	縄文土器, 土師器	埋79	
1978	北 部 BG31区	56	泉 拓良 宇野 隆夫	事前発掘	650	縄文晩期埋没林	縄文土器	埋80, 埋85	
1978	本 部 AW28区	57	岡田 保良 吉野 治雄	事前発掘	500	近世白川道	陶磁器, 土師器, 銭貨	埋80	
1978	本 部 AY22区	60	泉 拓良	立合		高野川旧河道		埋79	
1978	医学部 AN19区	64	吉野 治雄	立合		井戸, 溝	弥生土器	埋79, 埋80	
1979	北 部 BH37区	66	吉野 治雄	試掘	46	土坑	土師器, 須恵器	埋80	
1979	教養部 AM24区	69	岡田 保良 清水 芳裕	試掘	8		弥生土器, 土師器	埋80	
1979	本 部 AZ30区	71	西川 幸治 浜崎 一志	試掘	30	中世溝	土師器, 瓦, 瓦器	埋80	
1979	医学部 AP19区	74	清水 芳裕 五十川 伸矢 吉野 治雄	事前発掘	2776	中世溝, 井戸, 土器溜	土師器, 瓦, 陶磁器, 旧石器	埋81 b	
1979	本 部 AT27区	75	五十川 伸矢	事前発掘	400	奈良後期堅穴住居, 中世土壙墓, 近世道路	土師器, 須恵器, 白磁	埋81 b	堅穴住居跡を現地保存
1979	北 部 BD32区	79	泉 拓良	立合			瓦(平安)	埋80	
1980	本 部 AT27区	89	泉 拓良	事前発掘	115	近世道路, 堀	土師器, 近世陶磁器	埋81 b	
1980	本 部 AX28区	90	泉 拓良 五十川 伸矢 浜崎 一志	事前発掘	1120	近世白川道, 中世土器溜, 井戸, 建物	土師器, 瓦, 陶磁器, 銅鏃(弥生), 磨製石鏃	埋83	
1980	京 都 府 美 月		泉 拓良 清水 芳裕 五十川 伸矢 浜崎 一志 吉野 治雄	事前発掘	1468	弥生中期・後期水路, 土坑, 中世土器溜	弥生土器, 打製石斧, 瓦器, 陶磁器	埋83	立合調査中に遺跡を発見, 工事を中断し発掘調査
1980	教養部 AO21区	91	吉野 治雄	事前発掘	112	中世井戸, 土壙墓	土師器, 瓦器, 陶磁器	埋83	
1980	教養部 AM22区	93	吉野 治雄	立合		火葬墓, 石列	瓦器, 陶器	埋81 b	
1980	本 部 実験排水	98	清水 芳裕	立合		流路, 中世土器溜	土師器, 丸瓦	埋83	遺構実測
1981	理学部 BD30区	109	泉 拓良 浜崎 一志	事前発掘	272	古代建物, 近世瓦溜	土師器, 瓦, 陶磁器	埋83	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
1981	和歌山県瀬戸		泉拓良 清水芳裕 五十川伸矢 浜崎一志	事前発掘	1500	弥生土坑、弥生配石、古墳時代土坑	縄文土器、硬玉管玉、弥生土器、製塩土器	埋84	
1981	本部 AX28区	110	泉拓良 清水芳裕 五十川伸矢 飛野博文	事前発掘	34	中世土器溜	土師器、瓦、陶磁器、硯	埋83	
1981	教養部 AP22区	111	五十川伸矢 飛野博文	事前発掘	1716	古墳、古代梵鐘鑄造遺構、中世門・溝・墓	縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、鑄型、溶解炉	埋84	梵鐘鑄造遺構を現地保存
1981	京都市山本			分布調査			縄文土器、緑釉陶器、灰釉陶器	埋83	
1982	京都府道中海道		泉拓良	試掘	20	中世土器溜	縄文土器、土師器	埋84	
1982	病院 AF15区	122	清水芳裕 浜崎一志	事前発掘	1028	中世井戸、溝	白磁	埋84	
1982	農学部 BF33区	123	清水芳裕 浜崎一志	事前発掘	787	縄文住居跡、中世土坑	縄文土器、土師器	埋84	縄文住居跡を現地保存
1982	和歌山県瀬戸		泉拓良	事前発掘	297	古代製塩炉	縄文土器、弥生土器、製塩土器	埋84	古代製塩炉を移築保存
1982	本部 AT29区	124	泉拓良 飛野博文	事前発掘	890	中世濠、建物	土師器、瓦器、陶磁器	埋86	
1982	農学部 BE33区	125	泉拓良 飛野博文	事前発掘	803	中世・近世水田、溝	土師器、瓦器、陶磁器	埋86	
1983	医学部 AN20区	134	泉拓良 五十川伸矢	事前発掘	863	中世井戸、土取り穴	須恵器、瓦器、土師器	埋86	
1983	北部 BF31区	135	清水芳裕 五十川伸矢	事前発掘	737	縄文埋没林、古代・中世溝	縄文土器、土師器、緑釉陶器	埋87、富井98	
1983	医学部 AM19区	139	泉拓良 浜崎一志	立合		中世土取り穴	土師器、瓦器、石鍋	埋86	
1984	病院 AF19区	141	清水芳裕 宮本一夫	事前発掘	863	近世池、井戸、野壺	縄文土器、蓮月焼	埋87	
1984	病院 AJ19区	142	清水芳裕 浜崎一志	事前発掘	260	中世土坑、近世土取り穴	土師器、近世陶磁器	埋87	
1984	医学部 AN18区	143	五十川伸矢 宮本一夫	事前発掘	1920	中世井戸、土取り穴、中世梵鐘鑄造遺構	土師器、瓦器、鑄型	埋88	
1985	北部 BJ31区	153	清水芳裕 宮本一夫	事前発掘	624	古代溝、建物跡、土坑、近世溝	弥生土器、土師器、須恵器	埋88	
1985	病院 AJ18区	154	清水芳裕 浜崎一志 菱田哲郎	事前発掘	4295	中世井戸、近世土取り穴	土師器、近世陶磁器	埋89	
1985	病院 AJ19区	155	五十川伸矢 宮本一夫	事前発掘	3000	中世井戸、近世土取り穴	土師器、近世陶磁器、鑄型	埋89	
1986	教養部 AP25区	167	清水芳裕 宮本一夫 難波洋三	事前発掘	599	中世・近世溝	土師器、近世陶磁器	埋89	
1986	本部 AX30区	168	清水芳裕 難波洋三	事前発掘	330	古代土坑、中世道	土師器、陶磁器	埋89	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
1986	医学部 AL20区	169	浜崎一志 難波洋三	事前発掘	331	近世土取り 穴	土師器, 陶磁 器	埋90	
1986	教養部 AL23区	170	清水芳裕 五十川伸矢 浜崎一志	試掘	24	中世溝	土師器, 瓦器, 陶器	埋89	
1987	北部 BD33区	180	浜崎一志 千葉豊	事前発掘	618	土坑, 河川	縄文土器, 土 師器, 須恵器	埋90	
1987	本部 AW27区	181	五十川伸矢 千葉豊	事前発掘	1604	中世土坑, 近世道路	縄文土器, 土 師器, 陶磁器	埋92	
1987	北部 BH35区	182	清水芳裕	試掘	16	包含層	土師器, 須恵 器	埋90	
1987	北部 BD28区	183	清水芳裕	試掘	12	包含層	土師器, 須恵 器	埋92	
1987	本部 AT25区	188	清水芳裕	立合		近世尾張藩 邸堀		埋90	
1988	牛ノ宮町 AR19区	190	清水芳裕 森下章司	事前発掘	216	中世土坑, 近世道路	土師器, 瓦, 陶 磁器	埋92	
1988	病院 AH19区	191	浜崎一志 千葉豊 森下章司	事前発掘	2495	中世土坑, 溝	土師器, 瓦, 陶 磁器	埋93	
1988	病院 AE12区	192	千葉豊 森下章司 宮原恵美子	事前発掘	599	近世道路・ 溝・野壺・井 戸	土師器, 瓦, 陶 磁器	埋93	
1989	病院 AE13区	198	千葉豊 森下章司 宮原恵美子	事前発掘	805	近世井戸・ 野壺・柵列	土師器, 陶磁 器, 瓦	埋93	
1991	病院 AG14区	200	千葉豊 森下章司	事前発掘	394	近世井戸, 道路	土師器, 陶磁 器	埋95	
1991	教養部 AR21区	202	五十川伸矢 浜崎一志 森下章司	立合		中世土坑	土師器	埋93	
1992	医学部 AM17区	207	五十川伸矢 森下章司	事前発掘	1950	中世井戸, 土器溜	土師器, 陶磁 器	埋95	
1992	北部 BA28区	208	浜崎一志 千葉豊	事前発掘	1242	噴砂, 古代 埋納遺構, 近世堀	縄文土器, 土 師器, 陶磁器, 棧瓦	埋95	
1992	和歌山県 瀬戸	213	浜崎一志 伊藤淳史	立合		縄文包含層	縄文土器, 石 器	埋95	
1992	本部 AV30区	214	千葉豊 伊藤淳史	事前発掘	1480	中世砂取り 穴, 近世野 壺	土師器, 陶磁 器	埋97	
1993	北部 BB28区	217	清水芳裕 古賀秀策	事前発掘	1323	古代溝, 中 世土坑	土師器, 陶磁 器	埋97	
1993	本部 AW25区	218	千葉豊 吉井秀夫	事前発掘	929	中世井戸, 濠, 溝, 土坑	縄文土器, 石 器, 土師器, 陶 磁器	埋97	
1993	本部 AU30区	219	伊藤淳史 古賀秀策	事前発掘	1074	弥生流路, 古代溝, 中 世土器溜	弥生土器, 土 師器, 陶磁器	埋97	
1993	総合人間 学部 AO22区	220	五十川伸矢 伊藤淳史	事前発掘	4080	弥生水田, 古代梵鐘鑄 造遺構, 中 世井戸・溝	縄文土器, 弥 生土器, 土師 器, 陶磁器	埋99, 伊藤03 b・10・18	梵鐘鑄造遺 構を現地保 存
1993	北部 BF34区	221	千葉豊 吉田広	事前発掘	1228	古代土器溜 ・土坑, 中世 ・近世道路	土師器, 陶磁 器	埋98	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
1993	病院 A F 12区	222	伊藤 淳史	試掘	113	近世道路	土師器, 陶磁器	埋97	
1994	北 部 B F 30区	229	千葉 豊 古賀 策 吉田 広	事前発掘	530	縄文貯蔵穴, 弥生方形周溝墓, 平安土壇墓	縄文土器, 弥生土器, 土師器	埋98	
1994	本 部 A X 25区	230	古賀 秀策 吉田 広	事前発掘	1314	古代溝, 土器溜	土師器, 陶磁器	埋99	
1995	総合人間学 部 A R 25区	238	伊藤 淳史 古賀 秀策	事前発掘	2092	弥生土器棺墓, 古代溝, 土坑, 中世溝	弥生土器, 土師器, 陶磁器, 瓦	埋00	
1995	病院 A G 20区	239	千葉 豊 吉田 広	事前発掘	2260	縄文流路, 弥生流路, 中世井戸, 近世大溝	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 蓮月焼	埋00	
1995	病院 A F 20区	240	千葉 豊 吉田 広	事前発掘	280	近世池, 土坑	土師器, 陶磁器	埋00	
1995	本 部 A X 26区	241	古賀 秀策 吉田 広	事前発掘	627	中世大溝, 近世柵列	土師器, 陶磁器	埋99	
1996	医学部 A N 20区	248	五十川 伸 古賀 秀策	事前発掘	510	縄文流路, 中世土取り穴, 近世井戸	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 陶磁器	埋00	
1996	総合人間学 部 A R 24区	249	伊藤 淳史 富井 眞	事前発掘	330	中世掘立柱建物, 土坑, 溝	弥生土器, 土師器, 陶磁器, 銭貨	埋02	
1997	総合人間学 部 A R 23区	254	伊藤 淳史	立 合		中世瓦溜	弥生土器, 土師器, 陶磁器, 瓦	埋02	弥生~中世包含層
1998	総合人間学 部 A N 22区	261	千葉 豊 古賀 策 阪口 英毅	事前発掘	1800	縄文流路, 弥生方形周溝墓, 中世溝・土坑・土器溜・石室	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 陶磁器, 瓦	埋05	
1998	本 部 A U 28区	262	伊藤 淳史 富井 眞	事前発掘	543	中世土坑, 近世柱穴	土師器, 陶磁器, 瓦	埋02	
1998	総合人間学 部 A L 24区	264	古賀 秀策 千葉 豊	立 合			弥生土器, 土師器, 陶磁器	埋02	弥生~近世包含層
1999	病院 A F 20区	269	千葉 豊 阪口 英毅	事前発掘	49	中世井戸, 土坑	縄文土器, 土師器, 陶磁器	埋03	
1999	医学部 A O 17区	270	伊藤 淳史 富井 眞	事前発掘	2028	中世井戸, 集石, 土器溜	土師器, 瓦, 陶磁器	埋03	
1999	本 部 A W 26区	271	千葉 豊 阪口 英毅	事前発掘	1913	古墳時代溝, 中世井戸・瓦溜・溝, 近世溝	縄文土器, 須恵器, 土師器, 瓦, 陶磁器	埋03	
1999	本 部 A X 22区	272	富井 眞	立 合		時期不明溝, 高野川系流路攻撃面		埋03	
2000	北 部 B C 28区	276	伊藤 淳史 富井 眞	事前発掘	2158	弥生水田, 中世溝, 近世井戸	縄文土器, 弥生土器, 石器, 陶磁器	埋05	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
2000	本 部 A T 21区	277	千葉 豊 阪口 英毅	事前発掘	2654	終末期古墳 周濠, 中近 世白川道, 尾張藩邸水 路・堀	縄文土器, 土 師器, 陶磁器, 鉄鍋, 馬具, 銭 貨	埋06	
2000	病 院 A E 19区	278	千葉 豊 富井 眞	事前発掘	8000	縄文流路, 古代土坑, 中世井戸, 近世井戸・ 土坑・池	縄文土器, 土 師器, 近世陶 磁器, 瓦	埋07, 千葉18, 笹川ほか21	
2000	病 院 A E 18区	279	阪口 英毅	試 掘	320	近世土坑	土師器, 陶磁 器	埋05	近世包含層
2001	吉 田 南 A R 24区	288	伊藤 淳史 梶原 義実	事前発掘	2375	奈良時代掘 立柱建物, 平安時代経 塚, 古代・中 世溝, 柵	縄文土器, 弥 生土器, 石器, 土師器, 陶磁 器, 青銅製経 筒, ガラス玉, 瓦	埋06	
2001	病 院 A F 12区	290	清水 芳裕 千葉 豊	立 合		近世柱穴	土師器	埋06	
2001	病 院 A F 13区	291	清水 芳裕 千葉 豊	立 合		近世柱穴	土師器, 陶磁 器	埋06	
2001	本 部 A T 25区	293	清水 芳裕 千葉 豊	立 合		近世尾張藩 邸堀		埋06	
2002	本 部 A U 25区	296	伊藤 淳史 梶原 義実	事前発掘	1070	古代埋甕, 中世白川道・ 井戸, 近世 集石	縄文土器, 土 師器, 近世陶 磁器・瓦	埋07	
2002	北 部 B D 28区	297	富井 眞 吉江 崇	事前発掘	1925	縄文堅果集 積・埋没林, 古代道路, 近世野壺	縄文土器, 弥 生土器, 石器, 陶磁器	埋07	
2002	医 学 部 A R 19区	298	千葉 豊 梶原 義実	事前発掘	1200	縄文流路, 中 世道路・井 戸, 近世土取 り穴・野壺	縄文土器, 土 師器, 陶磁器, 近世陶磁器	埋08	
2002	北 部 B F 32区	299	富井 眞 吉江 崇	事前発掘	1900	縄文建物跡・ 焼土・土坑, 中世砂取り 穴, 近世溝 石	縄文土器, 石 器, 土師器, 陶 磁器, 近世墓 石	埋08	
2002	吉 田 南 A R 25区	302	千葉 豊	立 合		古代・中世・ 近世溝	土師器, 陶磁 器, 中世瓦, 磁 器, 将棋駒	埋07	
2003	医 学 部 A P 18区	308	伊藤 淳史 吉江 崇	事前発掘	2125	中世道路・井 戸・溝・集石・ 土器溜・野壺 群, 近世井 戸・溝	土師器, 瓦器, 陶磁器, 瓦, 石 鍋, 近世陶磁 器	埋08	
2003	北 部 B D 33区	311	富井 眞	立 合		砂取り穴, 野壺		文09	中・近世包 含層
2004	北 部 B C 30区	320	千葉 豊	事前発掘	85.5	古代土坑・ 溝, 中世土 坑	縄文土器, 弥 生土器, 土師 器, 陶磁器, 須 恵器, 瓦器	文09	
2005	本 部 B A 22区	321	富井 眞 吉江 崇	事前発掘	98	近世溝・瓦 溜	縄文土器, 石 器, 磁器, 近世 陶磁器・瓦	文09	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
2005	吉田南 A P 21区	322	伊藤 淳史	事前発掘	48	古墳周溝, 古代土坑・ 溝, 中世土 坑・集石	縄文土器, 土 師器, 陶磁器, 須恵器, 瓦器, 鞆羽口	文09	
2004	美 山	323	清水 芳裕 伊藤 淳史	立 合				文09	
2004	北 部 B C 35区	325	吉江 崇	立 合		古代道路?		文09	297地点の 古代道路と つながるか
2005	本 部 A W 24区	329	伊藤 淳史	立 合		近世白川道, 近世遺物溜, 煉瓦積水路	近世陶磁器	文09	縄文包含層
2005	北 部 B D 30区	330	富井 眞	立 合			縄文土器	文09	中・近世包 含層
2005	本 部 A T 22区	331	千葉 豊	立 合		近世白川道	近世陶器	文09	中世包含層
2006	本 部 A T 26区	335	伊藤 淳史	立 合		近世尾張藩 邸堀	近世陶器	文09	
2006	本 部 A V 24区	336	伊藤 淳史	立 合		中世白川道, 近世遺物溜	土師器, 近世 陶磁器・瓦	文09	
2001 ~ 2004	桂	337	千葉 豊	分布 立合		石垣	埴, 瓦	文09	
2007	病 院 A G 16区	338	富井 眞 笹川 尚紀	事前発掘	3700	中世井戸, 近世井戸・集 石・石垣	縄文土器, 土 師器, 陶磁器, 瓦	文10	
2007	病 院 A F 14区	339	千葉 豊	事前発掘	713	中世道路・ 井戸・集石	縄文土器, 土 師器, 陶磁器	文10	
2007	和歌山県 瀬 戸	346	佐藤 純一	立 合		古代土坑	土師器	文10	古代包含層
2008	西 部 A W 20区	348	伊藤 淳史 笹川 尚紀	事前発掘	2081	中世建物, 玉石集積, 井戸, 瓦溜, 土器溜, 流路	土師器, 陶磁 器, 瓦, 玉石	文12	中世建物跡 を現地保存
2008	病 院 A G 13区	349	千葉 豊 富井 眞	事前発掘	2164	近世井戸・ 野壺・土坑・ 溝	近世陶磁器・ 土製品	文11	
2009	北 部 B H 31区	355	富井 眞 笹川 尚紀	事前発掘	800	縄文加工樹 幹, 弥生土 器片敷, 中 世砂取り穴・ 溝, 近世溝	縄文土器, 弥 生土器, 石器, 土師器, 陶磁 器	文12	
2009	本 部 A Z 23区	356	千葉 豊	事前発掘	710	縄文住居, 古墳周溝, 中世土坑	縄文土器, 石 器, 須恵器, 土 師器	文12	A Z 22区
2009	北 部 B G 34区	357	千葉 豊 笹川 尚紀	事前発掘	1152	古代土坑, 中世砂取り 穴・道路・溝・ 野壺, 近世 野壺	縄文土器, 石 器, 土師器, 黒 色土器, 須恵 器, 緑釉陶器, 灰釉陶器, 陶 磁器, 瓦, 銭貨	文13	
2009	医 学 部 A Q 18区	358	伊藤 淳史	事前発掘	824	中世井戸・ 道路・集石・ 土坑・溝・柱 穴, 近世集 石・野壺・溝	土師器, 瓦器, 陶磁器	文13	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の 種類	面積 (㎡)	遺構	遺物	文献	備考
2010	病院 AJ16区	366	網東 伸也 洋一	事前発掘	1085	中世土坑・溝、近世畔野壺・柵・土坑・溝	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦、陶磁器	文13	
2010	吉田南 AL22区	367	笹川 尚紀	立合		中世溝		文13	中世包含層
2010	本部 AT25区	377	伊藤 淳史	立合		尾張藩邸堀	須恵器、陶器	文13	先史～近世包含層
2011	吉田南 AN21区	378	富井 眞 笹川 尚紀	事前発掘	1650	縄文土器破片集中部、弥生方形周溝墓、方形墳、中世溝・井戸・土坑・土器溜・陶器溜・埋甕・集石	縄文土器、弥生土器、古墳時代埴輪・須恵器・土師器・鉄器、中世土師器、瓦器、須恵器、陶磁器、銭貨、瓦、近世陶磁器	文15	
2011	病院 AH12区	379	千葉 豊	事前発掘	1700	近世道路水路・井戸・溝	近世陶磁器・土師器・土製品	文14	
2011	本部 AV27区	383	伊藤 淳史	立合		白川道・尾張藩邸堀		文14	
2012	病院 AH15区	384	伊藤 淳史	事前発掘	583	近世道路水路・井戸	近世陶磁器・土師器、近代病院食器	文14	
2012	病院 AF17区	385	富井 眞	事前発掘	4100	近世段差溝・井戸・小穴	近世陶磁器・瓦	文15	
2012	北部 BH38区	391	笹川 尚紀	立合		溝ないしは土坑		文14	先史～中世包含層
2012	本部 AT23区	395	千葉 豊	立合		尾張藩邸堀	近世陶磁器	文14	
2013	本部 AZ30区	397	笹川 尚紀	事前発掘	43	中世集石・溝	縄文土器、弥生土器、土師器、瓦器、須恵器、陶磁器	文15	
2013	病院 AH13区	398	千葉 豊	事前発掘	960	近世水路・道路・溝・小穴	近世陶磁器・土師器	文15	
2013	吉田南 AM21区	399	伊藤 淳史 富井 眞 内記 理	事前発掘	923	弥生流路、平安溝、中世大溝・土器溜・瓦溜、近世野壺・溝・土取り穴・瓦溜	縄文土器、弥生土器、埴輪・古墳須恵器、古代土師器・須恵器、中世土師器・陶磁器・瓦・銭貨、近世土師器・陶磁器・瓦・西洋陶器	文16	
2013	医学部 AO20区	400	伊藤 淳史	事前発掘	173	縄文流路、中世溝・井戸・集石・土器溜	縄文土器、中世土師器・陶器	文15	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の種類	面積 (㎡)	遺構	遺物	文献	備考
2013	吉田南 AM21区	401	伊藤 淳史 富井 内記	事前発掘	945	縄文流路, 弥生流路, 古代溝・井戸, 中世建物・溝・土取り穴・土溜・集石, 近世野壺・溝・土坑・土取り穴・集石	縄文土器, 弥生土器, 古墳須恵器, 古代土師器・須恵器, 中世土師器・陶磁器・瓦・銭貨, 近世土師器・陶磁器・西洋陶器	文16	
2013	北 部 BF32区	402	千葉 豊	事前発掘	90	縄文土坑, 古代土坑	縄文土器・石器, 古代土師器・須恵器・緑釉陶器	文16	
2013	本 部 AT22区	403	笹川 尚紀	事前発掘	62	中世道路・井戸, 近世道路・溝	中世土師器・陶磁器・瓦・埴, 近世陶磁器・土師器	文16	A T 21区
2013	本 部 AU27区	404	千葉 豊 笹川 尚紀	事前発掘	815	中世溝・道路・土坑・砂取り穴, 近世野壺・溝・集石	古代土師器・須恵器・緑釉陶器, 中世土師器・陶器・瓦・埴, 近世土師器・陶磁器・瓦	文16	
2013	北 部 BA28区	405	千葉 豊	事前発掘	51	自然流路, 集石	近世陶磁器・土師器	文15	
2013	医 学 部 AL17区	412	伊藤 淳史	立 合				文15	中近世包含層
2013	病 院 AI12区	415	千葉 豊	立 合				文15	398地点の近世道路・溝
2013	吉田南 AP21区	416	伊藤 淳史	立 合		中世溝	中世土師器・陶器	文15	先史～中世包含層
2013	病 院 AG11区	419	伊藤 淳史	立 合				文15	近世包含層
2014	病 院 AI15区	427	富井 内記	事前発掘	2191	中世溝, 近世石垣・溝・土坑・井戸・集石・柱穴列	先史石器, 中近世土師器・瓦器・陶磁器・瓦, 近代陶磁器	文17	
2014	吉田南 AP23区	428	伊藤 淳史 笹川 尚紀	事前発掘	1470	弥生水田・流路, 古代土器溜・土取り穴, 中世溝・井戸・土器溜・砂取り穴, 近世路面・野壺	縄文土器, 弥生土器, 石器, 古代須恵器・土師器, 中世鉄鋤, 中近世土師器・陶磁器, 瓦	文17	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考	
2015	熊野ZZ18区	435	富井内記	眞理	事前発掘	1876	中世集石・瓦溜・土坑・井戸・土器溜・柱穴・溝, 近世溝・井戸・野壺・集石・瓦溜・路面・瓦積み・埋納遺構・土坑	縄文土器, 古代土師器・須恵器・瓦, 中世土師器・陶器・須恵器・瓦器・瓦・石製品, 近世土師器・陶磁器・瓦・石製品	文19	
2015	病院AH18区	436	千葉笹川	豊尚紀	事前発掘	480	中世土取り穴, 近世土坑・土取り穴・溝, 近代土坑・井戸	縄文土器, 古代土師器・黒色土器・須恵器, 中世土師器・瓦器・陶磁器・瓦, 近世土師器・陶磁器・土製品・石製品・瓦, 近代陶磁器・瓦	文18	AH17区
2015	北部分BJ37区	440	千葉豊	立合			土師器・須恵器	文17	古代・中世包含層	
2015	吉田南AM22区	446	伊藤淳史	立合				文17	中世包含層	
2015	和歌山県瀬戸	447	佐藤純一	試掘	4	時期不詳堆積	土師器微小片	文17	遺跡東限か	
2016	北部分BC30区	450	伊藤富井	淳史眞	立合		古墳時代埴輪溜・集石・落ち込み, 古代溝	縄文土器, 古墳時代埴輪・須恵器, 古代土師器・須恵器・瓦	文18	古墳存在の可能性あり
2017	関田町BB18区	454	千葉笹川内記	豊尚紀理	試掘	5		文19	中世包含層	
2017	関田町BB18区	455	笹川内記	豊尚紀理	事前発掘	920	中世溝・盛土, 近世流路・井戸・野壺, 近代野壺・溝	中世土師器・陶磁器・石仏, 近世土師器・陶磁器・瓦, 近代陶磁器	遺20	
2017	西部分AZ20区	456	千葉豊	試掘	10			文19		
2017	岡崎ZS23区	457	伊藤富井	淳史眞	試掘	6		古代～中世の瓦・土師器	文19	古代～近世包含層
2017	北部分BG36区	458	伊藤淳史	立合			古代以前流路, 中世溝ないし段差, 近世野壺	中世土師器	文19	
2017	本部分AY29区	459	千葉豊	立合			古代以前の流路		文19	
2018	岡崎ZS23区	463	伊藤富井	淳史眞	事前発掘		弥生～古墳流路, 古代石敷土坑・瓦溜・井戸, 近世大溝・井戸	弥生土器, 土師器, 古代～中世の瓦・土師器・木製品	遺20, 21	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
2018	西A Z20区	465	千葉 豊	立合				遺20	456地点(試掘)周辺
2018	熊野 Z Z16区	468	富井内記 眞理	立合				遺20	
2020	和歌山県瀬戸	487	伊藤淳史 千葉富井内記 眞理	発掘	160		縄文土器, 弥生土器, 土師器, 須恵器, 塩土器, 黒色土器, 石器	遺21	
2020	本A X26区	488	千葉伊藤富井内記 眞理 尚紀	試掘	20	幕末尾張藩邸濠	陶磁器, 土師器	遺21, 内記22	科学研究費補助金による学術調査
2020	本A X30区	489	千葉伊藤富井内記 眞理 尚紀	試掘	7	中世路面	土師器	遺21, 内記22	科学研究費補助金による学術調査
2020	本A X29区	490	千葉 豊	立合		中世・近世路面, 近世水路		遺21	
2020	本A W23区	491	千葉 豊	立合		煉瓦積水路		遺21	
2020	吉田南A S23区	495	千葉富井内記 眞理 尚紀	立合				遺21	中・近世包含層
2020	医学部A P18区	496	富井内記 眞理 尚紀	立合				遺21	中・近世包含層
2020	西A Z20区	500	伊藤淳史	立合				遺21	近世包含層
2020	本A Z22区	501	千葉 豊	立合				遺21	黄色砂
2021	医学部A M20区	505	内記富井内記 眞理 尚紀	発掘	1396	縄文流路, 中世井戸・土器溜・土取り穴・集石, 近世土取り穴・溝, 近代井戸・溝・土坑	縄文土器, 弥生土器, 古代土師器・須恵器, 中世土師器・須恵器・陶器・瓦器・瓦・銭貨, 近世陶磁器, 近代陶磁器・瓦	第2章	
2021	北B G29区	506	千葉 豊	立合				第1章	中・近世包含層
2021	本A T30区	507	伊藤淳史	立合			土師器	第1章	古代包含層
2021	本A T26区	508	千葉 豊	立合		黄色砂を切る落ち込み		第1章	
2021	病院A K17区	509	千葉 豊	立合				第1章	
2021	北B G34区	510	千葉 豊	立合				第1章	
2021	宇治グラウンド	511	千葉 豊	立合				第1章	

報 告 書 抄 録

ふりがな	きょうとだいがくこうないいせきちょうさけんきゅうねんぼう2021・2022ねんど							
書名	京都大学構内遺跡調査研究年報2021・2022年度							
編著者名	千葉豊, 伊藤淳史, 富井眞, 笹川尚紀, 内記理							
編集機関	京都大学大学院文学研究科附属 文化遺産学・人文知連携センター 京大文化遺産調査活用部門							
所在地	〒606-8501 京都府京都市左京区吉田本町 TEL 075-753-7691							
発行年月日	2023年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査 期間	調査 面積m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
い がく ぶ こん ない 医学部構内 AM20区	きょうとふきょうとしききょうく 京都府京都市左京区 よしだたちばなちやう 吉田橋町	26100	-	35° 01' 19"	135° 46' 41"	20211213) 20220506	1396	がん免疫総合研究センター 新営
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
医学部構内 AM20区	散布地	縄文時代	自然流路		縄文土器			
	散布地	中世	井戸・土器溜・土取り 穴		土師器・瓦器・須恵器 ・陶器・白磁			
	散布地	近世前半	土取り穴・集石		古代土師器・須恵器, 中世土師器・須恵器・ 陶器・青磁・白磁・瓦 ・鋳型・ふいご羽口		土取り穴のなかから鋳造 にかかわる遺物が多数出 土。	
	耕作地	近世後半 ・近代	溝多数・井戸1・土坑 1		陶磁器・瓦・土製品		土地の区画を示す段差を 検出。	

緯度・経度は世界測地系にもとづく

第Ⅱ部 京都大学文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター
京大文化遺産調査活用部門紀要Ⅳ

「塩壺」と俗称されている鉢形製品の検討（上）

伊藤淳史

「塩壺」と俗称されている鉢形製品の検討（上）

伊藤淳史

1 はじめに－問題の所在と本稿の目的－

京都市内の平安時代後期～鎌倉時代を中心とする時期の遺跡からは、製作に用いた粘土帯の積み上げ痕跡を顕著にとどめる独特な鉢形土師器が出土する。発掘に関係する人達の間では、いつの頃からか俗に「塩壺（しおつぼ）」と呼ばれてきた製品である。大量に出土するものではなく、土師器碗皿類に混じってせいぜい1～数点見かけることがある、といった程度の頻度の、目立たない存在であった。

鴨東に位置する京都大学吉田キャンパス構内からも、この俗称「塩壺」は出土している。筆者（伊藤）は、長らく構内遺跡の調査にかかわるなかで、本部構内を横切る古道の白川道（志賀越え道）に沿う地点で、これら俗称「塩壺」が多数出土する状況に遭遇し、他の遺跡と異なる量の多さが気がかりであり続けてきた。のちに詳しくとりあげるが、例えば、コンテナ約400箱が出土したA X 28区の大規模廃棄土坑S K 51の資料を再整理する中では、「厚手鉢形土器」と仮称して19点を報告した〔伊藤・長尾2022 p.113〕。これでもすべてを報告できていない。また、その200m西南に位置するA U 25区の井戸S E 2からは、最低でも11点の出土をみている〔伊藤・梶原2007 pp.138-140〕。

しかしながら、こうした状況を評価しようにも、まずもってこの特異な製品群について、遺物として参照すべき検討がなされた履歴がほとんど見当たらないのである。平安京・中世都市京都においては、土師器皿類の編年研究を中心に著しい進捗をみせてきたが、その過程で、普遍に存在はするが主体を占めることのないこの一群が俎上に載ることはなかった。このたび改訂刊行された『新版 概説 中世の土器・陶磁器』〔日本中世土器研究会編2022〕でも、全く取り上げられてはいない。

したがって、まずはこの俗称「塩壺」と呼ばれてきた一群について、あらためて出土遺跡と報告資料の所在を把握して特徴を整理・明確化し、先行事例のない研究の礎を据える基礎作業を果たしておくことを、最大の目的としたい。平安京・中世都市京都を象徴する土師器皿類とともに有ったとみられる特異品の動静把握は、それら土師器が濃厚に及んだ空間たる鴨東地域の都市化の実態や特質の一端を明らかにする一助ともなろう。

2 対象資料の特徴

それではまず、対象となる資料の特徴を明示し、ここで取り扱う範囲をはっきりさせておきたい。京大構内出土の仮称厚手鉢形土器の一群を例示して、包括的な定義付けをしておく（図30）。以下に箇条書きする。なお、形態のばらつきなど細部の異同や例外などについては後の検討で言及する。

- a：土師器の鉢形器形で、口径>底径である
- b：器壁は厚手で5mm～1cm強をはかる（同時期の皿類はおおむね5mm程度以下）
- c：各粘土帯の継ぎ目（積み上げ）痕が、外面を中心に顕著に残される

さしあたり以上の特徴を備えたもので、かつ平安京・中世京都とその周辺域という時空間でもっぱら出土が知られてきたもの、ということになる。とりわけ特徴cは独特であり、若狭湾岸の船岡式をはじめ、古代の製塩土器にも顕著に認められるものであって、外見的に非常に類似している。「塩壺」というような俗称が、誰によっていつ示されたのかを、現状で具体的には明らかにできていないが、こうした製塩資料との外見的類似性が由来となっていることは想像に難くない。次節でその過程を追跡していくことにしよう。



図30 京大構内出土の厚手鉢形土器集合（A X 28区 S K 51およびA U 25区 S E 2 出土品）

3 資料認識の過程と問題の所在

京都市域の中世土師器資料は、1970年代に本格化した埋蔵文化財調査により急激に報告例が増加した。さきに、「塩壺」なる俗称の由来は不明としたが、その頃にこの特異な鉢形土器の存在は認識され、関係者間で俗称が広まったと推測できよう。参照すべき検討履歴も見当たらない、とも述べたが、ここでは当該資料の報告文献を遡及してそれらが認識される過程を検証し、そこから研究上の問題把握へと至ることにしたい。

報告の初見 管見によるところでは、さきに示した特徴をもつ資料が報告された最初は、名称はともかく、1975年に刊行された左京四條一坊の報告書と把握している〔平安京調査会1975 図版66-E526〕。ただしこの例は、外面に粘土紐積み上げ痕をとどめた鉢ではありながら、脚付というイレギュラーな製品である⁽¹⁾。観察表に特徴の記述はあるが、ほかに格段の言及はない。また、出土した遺構（SK12）は16世紀半ばに位置づけられているが、この資料の年代観としては疑問に思われるものと言える。いずれにしるこれらの問題はあらためてとりあげたい。

典型的な資料の初出としては、京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会発行の『烏丸線内遺跡調査抄報』Vol.14（1976年10月26日）という青焼きの速報がある（図31）。同書図-15の18、No47地点（烏丸綾小路遺跡）土坑32出土の土師質土器である。図示のみで本文中に記述はない。なお、当該の資料は後年に報告されず、No55地点土坑12出土の別個体が「製塩土器に近い様相をもつ土師器の鉢」「烏丸線内の出土遺物のうちでは類例の少ないもの」として報告されている〔京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会1981 p.106図-52〕。



図31 資料が報告された『烏丸線内遺跡調査抄報』の表紙と挿図

機能の推測と言及 1976年には、右京区の常磐東ノ町古墳において中世土壙墓群が発掘調査され、翌年刊行の報告書で、中世土師器の中の1点として提示された〔(財)京都市埋蔵文化財研究所1977 Fig.13-11〕。同書の観察表中には「いわゆる製塩土器といわれるもの」と記述が認められる〔前掲書 p.45〕。よってその頃には、前述したような、外見の類似に由来する機能の推測と呼称が共有されつつあった状況がうかがえよう。

そのような、機能を直接的に示すような「塩壺」の名称が、報告書の器種名として確認されるのは、1978年3月に刊行された吉田近衛町遺跡の報告に際してである〔京都府教育委員会1978 pp.163-211〕⁽²⁾。同書中の「4 吉田近衛町遺跡発掘調査概要」では、土師質土器の器種として「塩壺」が設定され、土坑SK01出土3点、SK04出土1点が示された〔前掲書 第64図23-25, 第71図193〕。そして、本文中では、出土土器群の所属年代を推測する文脈において、「一条大路大土壙で顕著な終末期の瓦器椀が今回の調査では極く少量しか認められていないことや新たに塩壺が加わること等は、後出的な様相であるが、塩壺は近世以降に一般的な型作りのものを含まない。」と言及している〔前掲書 p.181〕。この部分を読む限りでは、近世の焼塩壺と同種の機能をもつ製品としてこれらを見做していたことがわからう。

しかし、器種名として「塩壺」を明示する報告は、上記が最初にしてほぼ唯一となる。同じ頃にまとまった中世土師器資料が報告された同志社キャンパスの常盤井殿町遺跡報告においては、該当する類型は土師質の「鉢」として報告され〔同志社大学校地学術調査委員会1978 図版7-87, 図版8-29〕、以後、他の遺跡でも同様な取り扱いが主流となっていく。ちなみに、京大構内においては、1976年~77年にかけて、病院構内南端の白河北殿北辺想定地が発掘調査され、報告に際して体系的な中世土師器皿の分類と編年が提示されることとなるが〔京都大学埋蔵文化財研究センター 1981〕、この類の鉢の報告はみられない。構内における初出は、さきに例示した一群が出土したAX28区の大規模廃棄土坑SK51の報告であり、鉢としながら、「一般に塩壺といわれているものである」と追記された〔五十川1983 p.12〕。

製塩土器か焼塩壺か、それ以外か いずれにしろ、1980年代を迎えるころには、古代末~中世前半を中心とする時期に組成するこの類型の一群を指すものとして、「塩壺」という俗称があまねく普及していたことは確かと思われる。ただし、残念ながらその本来的な役割について、資料から検証する方向性は生まれず、あくまで外見の類似から塩関連資料と推断される状況が継続していった。

資料の集成と検討(1)

例えば、古代～中世土器の遺構出土点数が詳細に計量された左京八条三坊の報告書においては、「鉢には、この他に製塩土器に似た組成の一群（494～497）がある。京都で製塩を行っていたと考えるよりは、現時点では大消費地である京都の中から出土していることから塩の容器と類推する方が妥当であると考えている。」との記載が見られる〔(財)京都市埋蔵文化財研究所1982 p.44〕。また、古代学協会や京都文化財団では、これらの一群を「製塩土器」として扱い、9世紀ごろの本来の製塩土器ととり混ぜて報告されていることもある〔(財)古代学協会1983 p.74, (財)京都文化財団1989 p.23・57・67〕。

こうした状況のなか、山城地域における古代の製塩土器を集成検討した秋山浩三は、「なお、平安京出土品でしばしば製塩土器として報告されることが多い、古代末～中世（主体は一三世紀）の製塩土器に類似した製品は、その性格等は未解決であるが、古代の製塩土器との直接的な系譜はみられず、また胎土も土師器に共通したものであるため本稿では除外する」として、製塩土器と評価しなかった〔秋山1994 p.527〕。また、梅川光隆は、平安時代の史料から二重構造の置き炉の存在を論証しながら、炉に仕掛ける火容製品のうち小型の形態に相当するのがこの鉢形製品であり、曲物内に仕掛けて火桶に用いたとする想定を提出している〔梅川2001 p.122〕。この梅川の想定は、塩関連とする類推以外で唯一の興味深い指摘であるが、残念ながら資料からの検証は深められず今に至っている。

以上、研究史と呼べるものを欠くなか、報告の際の取り扱われ方を中心に瞥見した。頻繁に出土するひとつの類型でありながら、全体像が把握されないまま、類推による機能への言及が散見される状況が続いていると言って良い。以下には、まずは実物資料を集成して出土の実態を時空間的に確認する作業から、はじめていくこととしたい。

4. 資料の集成と検討(1)－鴨東地域北半－

検討対象の資料 「塩壺」などと俗称され、さきの特徴a～cを示したような土師器鉢形土器について、2011年度末までに報告された事例を、可能な限り抽出集成した。まずはこれらのうち、吉田から岡崎にかけての鴨東地域北半の資料、すなわち、京大吉田キャンパス構内（岡崎地区を含む）出土のすべて実見して確認し得た67点を中心に、他調査機関（京都府教育委員会・京都市埋蔵文化財研究所・京都市文化市民局・京都文化財団・民間調査団体等）の調査報告から把握できた34点を補った101点で検討をおこない、結果をもとにその後他地域の検討へと進むこととしたい。対象資料は末尾の表に一覧としてまとめ（表2）、報告される地点の位置と点数は（図32）に示した。

「塩壺」と俗称されている鉢形製品の検討（上）

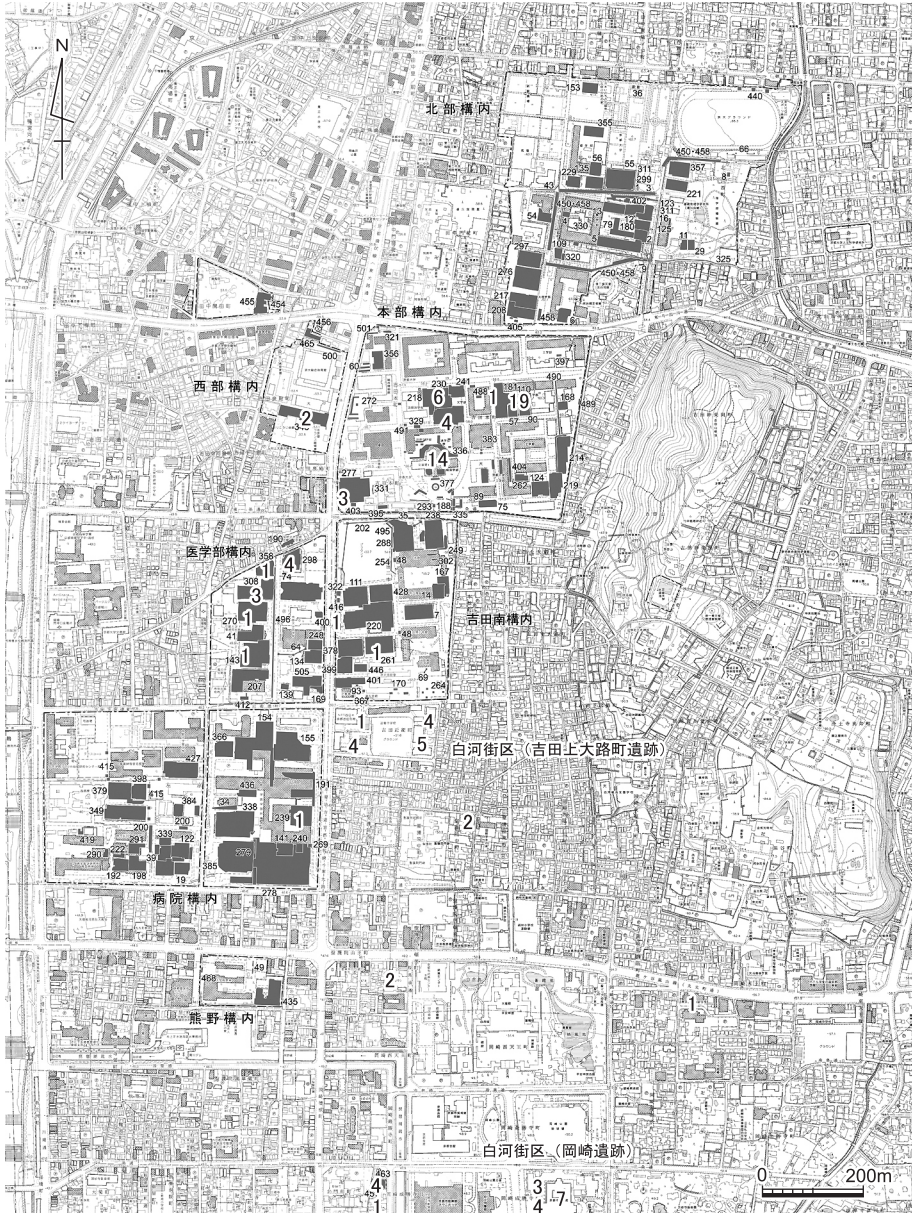


図32 鴨東地域北半の対象資料報告地点と点数 縮尺1/1.5万

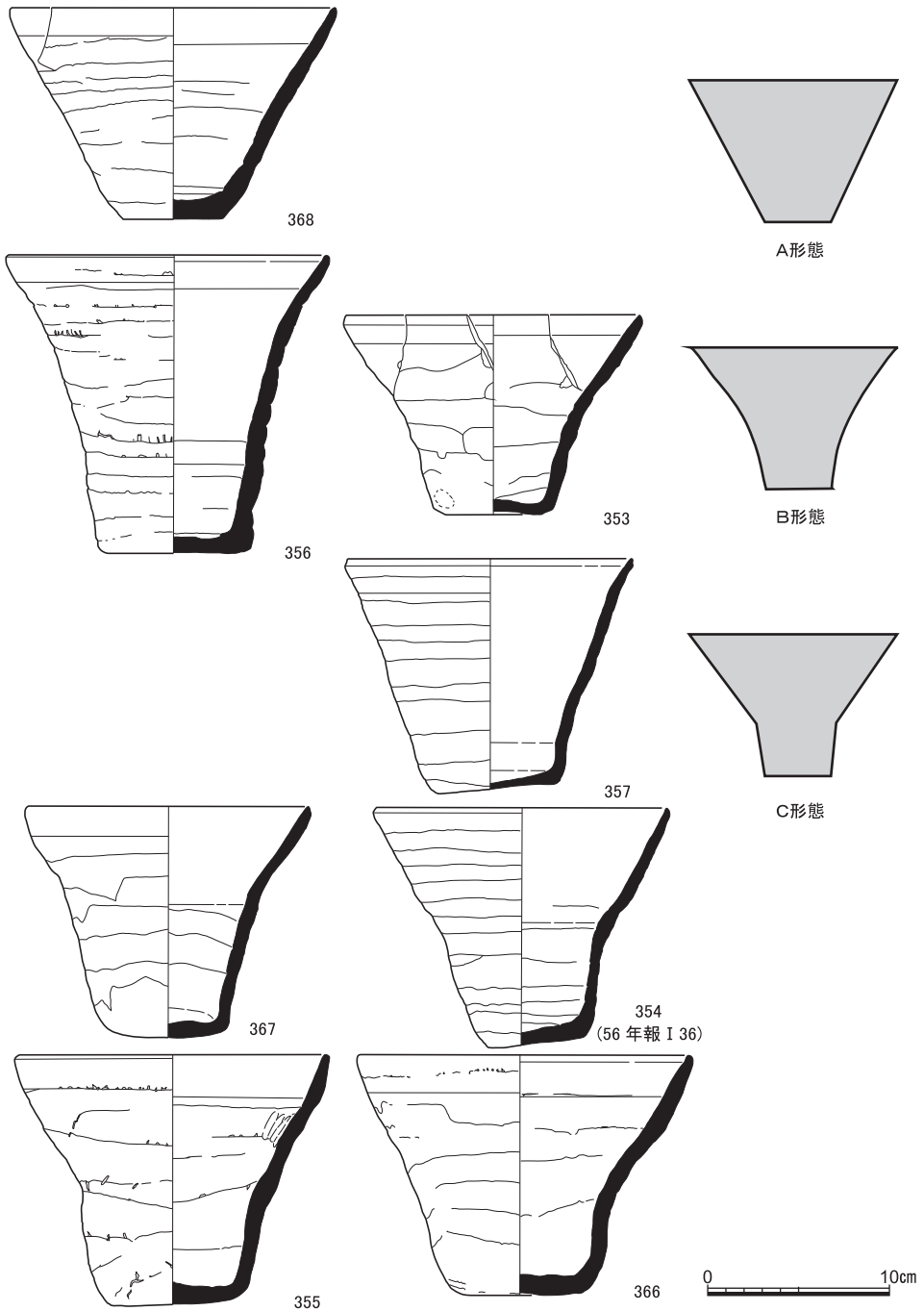


図33 形態の典型模式図と A X28区 S K51出土品 (実測図は縮尺1/4・番号は報告時のもの)

「塩壺」と俗称されている鉢形製品の検討（上）

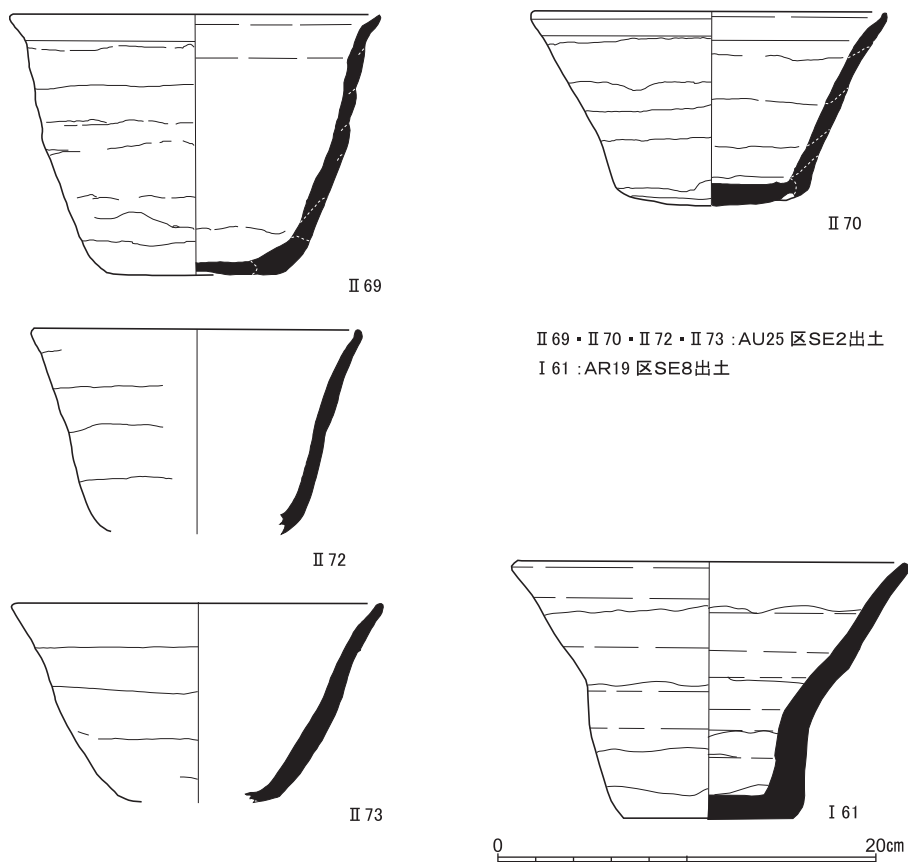


図34 AU25区SE2およびAR19区SE8出土品 縮尺1/4（番号は報告時のもの）

なお、以後の本稿は、土師器皿の編年と暦年代観については〔平尾2019〕を用いる。

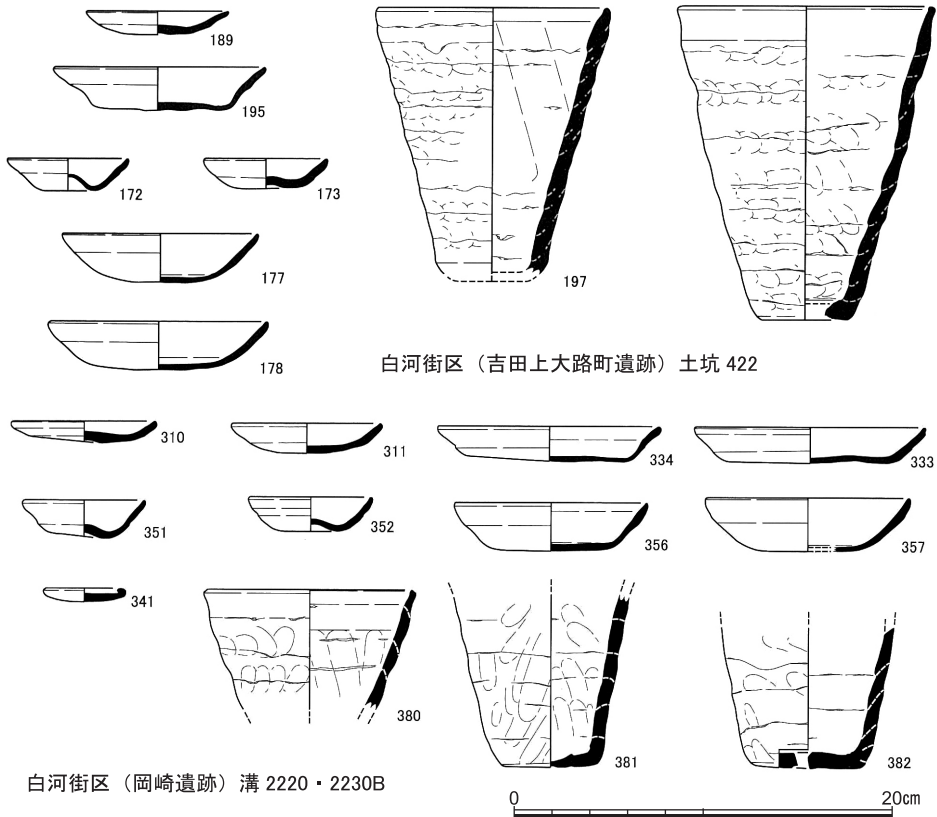
形態の分類 まずは、京大本部構内のまとまった遺構出土の資料群で、同時期に存在した全形のバリエティを確認する。

さきに「厚手鉢形土器」と仮称して未報告資料を19点紹介した本部構内AX28区の土器溜SK51は〔伊藤・長尾2022〕、土師器皿類は平尾による編年で6B期、おおむね13世紀前葉に比定できるまとまりである。このなかに鉢で全形のわかる資料が9点ある〔前掲書図11〕。これらのプロポーシヨンの変異は漸移的であり、また個体差の幅も大きなものであるが、以下のA～Cの3つで形態の典型を示すことができる（図33）。

A形態：底部から直線的に口縁へと至る逆台形の器形（368）

B形態：底部から全体がゆるやかに外反して口縁に至る器形（353・356）

資料の集成と検討(1)



白河街区（吉田上大路町遺跡）土坑 422

白河街区（岡崎遺跡）溝 2220・2230B

図35 14世紀代の遺構出土資料（吉田上大路町遺跡・岡崎遺跡）縮尺1/4（番号は報告時のもの）

C形態：底部から途中で屈曲点を有して外反し口縁へと至る器形（上記以外）

傾向としては、A形態と明言できる個体は少なく、B形態とC形態が主体となっている、と評価されよう。

一方、その西南に200m離れたA U25区井戸S E 2出土資料は、平尾の6 A期、12世紀後葉に比定できる〔伊藤・梶原2007〕⁽³⁾。報告した11点のうち、口縁～底部付近まで遺存してほぼ全形復元可能な個体は4点ある（図34）。これらは、S K51の一群と較べると相違の幅は小さく、底部からのたちあがり直線的となる傾向が強いように感じられるが、わずかながら外反傾向がうかがえるB形態（II 72・II 73）と、直線的なA形態（II 69・II 70）とに区分は可能である。ただし、A形態は底径が大きめで、とくにII 69のような口径との差が少なめであるバケツ状器形は、S K51の一群には認められないといえる。

なお、上記した4点以外の破片資料には、体部に屈曲点をもつC形態とするべきものが

「塩壺」と俗称されている鉢形製品の検討（上）

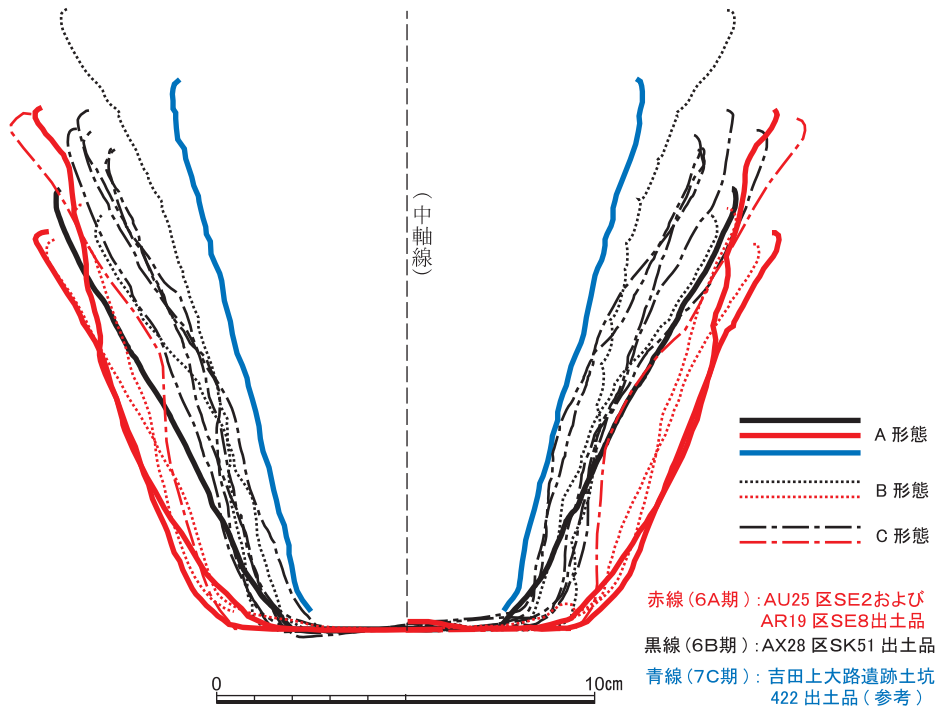


図36 2つの資料群の外形輪郭の比較 縮尺1/2

含まれており、同じ12世紀後葉に比定できる医学部構内AR19区井戸SE8出土資料中にも〔千葉2008 図7〕,全形の把握できるC形態が確認できる(図34-I 61)。したがって、6A期においてもA~Cの3形態のバラエティは同様に認められるとみて良い。暦年代で30~50年程度の時間差がある以上2つの資料群を比較した限りにおいては、A形態の顕在さや底径の大きさに若干の差はうかがわれたものの、形態のバラエティに顕著な違いを認めることはできないといえよう。

上記より時期の下る14世紀代の遺構出土資料について、京大構内では形態の把握できるような複数例のまとまった出土に乏しい。キャンパス外の白河街区(吉田上大路町遺跡・岡崎遺跡)での出土を参照する限りでは、体部が途中で大きく屈曲するものや口縁部の外反が顕著なものは見当たらず、直線的なA形態に収斂する傾向があるのかもしれない。変遷については後にあらためて述べるとして、ここでは吉田上大路町遺跡土坑422〔(公財)京都市埋蔵文化財研究所2020 図24〕,岡崎遺跡溝2220・2220B〔(公財)京都市埋蔵文化財研究所2017 図版34〕出土例を、相伴土師器皿の一部と例示しておく(図35)。

まとまっている。これらに対して、7A期（13世紀後葉）以降の資料（▲）は15点とやや少く、30cm超の極大品などいくつかばらつきはあるものの⁽⁴⁾、14cm台以下が11点を占めており、口径7～8cm台のミニチュア品と呼べるものも出現している。以上の状況から、例外的な事例はあるものの、時期を下るに従い小型化している傾向がある、と認定して良からう。

口縁部の特徴 口縁部は、横撫でによって仕上げられており、形態と手法は、基本的に土師器皿類に共通するものが採用されていると良い（図38）。

6B期であるSK51の一群でみると、断面が三角形を呈するように上方に突出する形状、すなわち、端部がつまみ上げられて外端面が形成される一段撫で面取り手法が主体となっている。強いつまみ上げで内傾する外端面が明瞭に形成されるものから（a1）、外端面がやや曖昧なもの（a2）まで、面の形成には強弱がある。つまみ上げもなく、そのまま端部が丸く収められるもの（b）も、存在する。

先行する6A期のSE2の資料も同様な様相を呈しているが、同時期の土師器皿にみられる二段撫で手法と呼び得るような、強い横撫でが重ねられる口縁部はみられない。12世紀中葉の5B期から後葉の6A期にかけて、土師器皿類の口縁形態の変化傾向として、二段撫でが消滅して口唇部に内傾する外端面が形成されていく様相が示されている〔平尾2019 図7〕。これを踏まえると、この厚手鉢形土器が一定程度定型化していく過程が、一段撫で面取り手法が完成していく時期に並行するものと理解されるとともに、この一群の製作者達が、皿類と密接に関連する系譜に連なるものであったことを示していよう。

底部の形態と輪状圧痕 底部は、逆台形の鉢形を接地させて支える部位であるにもかかわらず、堅牢や安定を配慮しないづくりが目立つ。体部の全体が厚手の器壁であるせいか、底部も体部とほぼ同じ厚みで造られている。形態を分類すると（図39）、底面をきちんと平坦に仕上げているもの（a1）は少数であり、多くは粗雑に撫でつけられるのみで外縁部は丸みを帯び、平坦面の割合は乏しい（a2）。底面が弱くふくらみを帯びて「半丸底」と呼べるようなもの（b）、完全に丸底化しているものも存在する（c）。なお、S

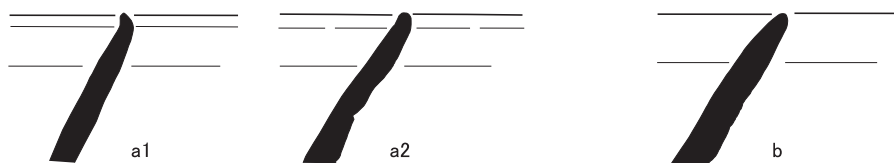


図38 口縁部形態模式図

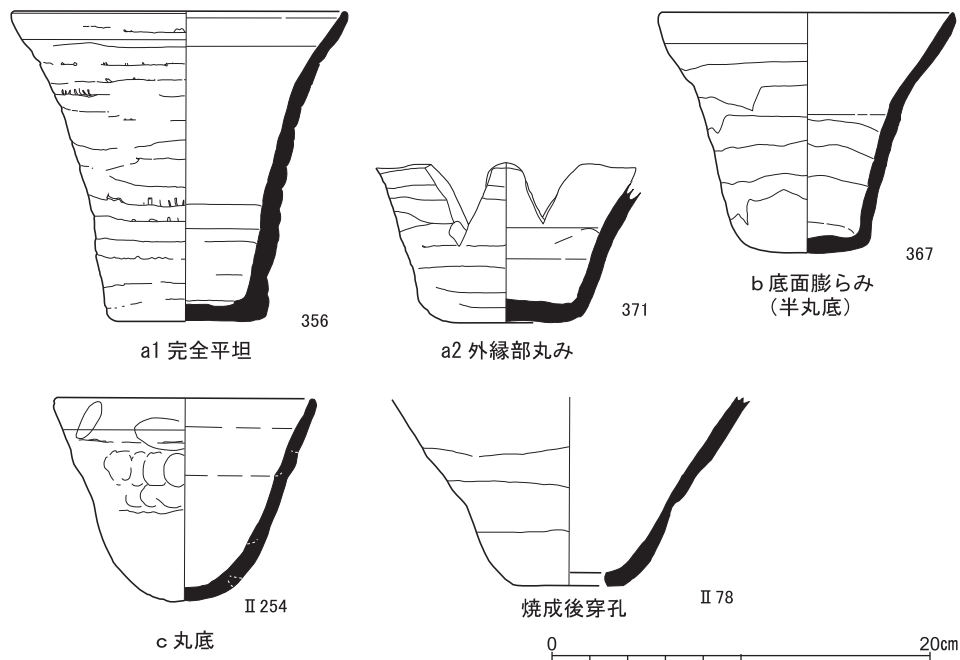


図39 底部の諸形態 縮尺1/4 (番号は報告時のもの)
 (356・367・371A X28区S K51, II78A U25区S E 2, II254A U25区S D14出土)

E 2の資料中には底面に大きな焼成後穿孔を施すものが複数認められる (II78)。機能の問題ともかかわるため、この特徴は後にあらためて取り上げる。

以上のうち、多くの個体の底部に、輪状の圧痕が存在することも注意される (図40)。上述した底部形態のうち、きっちりと平坦に仕上げているものにはいずれも認められないが、それ以外の底部形態では、体部へと立ち上がる屈曲部付近をめぐるように観察される。いずれも直径8cm程度になる圧痕で、深浅や広狭の状態は多様であるが、大別すると、底面周縁に深めにしっかり押されているもの (a種)、浅めの線が底部の周縁をめぐるもの (b種) のほかに、丸底傾向の底部では体部との間が段状を呈しているもの (c種) も認められる。c種の場合、凹んだ型に粘土を押しつけて底部を成形した痕跡と見れなくもない。これらと類似の痕跡としては、時期は異なるが、8～9世紀代に都城周辺で特徴的に存在する人面墨書壺形土器底部の「外型作り成形技法」によるものが想起される [上村1992]。特に、深い圧痕は同種の型作りの採用を推測させるものだが、類似と思われる痕跡について異なる報告もある⁽⁵⁾。こうした明瞭な深い圧痕は少なく、深浅がまちまちの痕跡がとどめられていることも考慮すると、型作りに限定できず、大きさの目安となる枠

「塩壺」と俗称されている鉢形製品の検討（上）

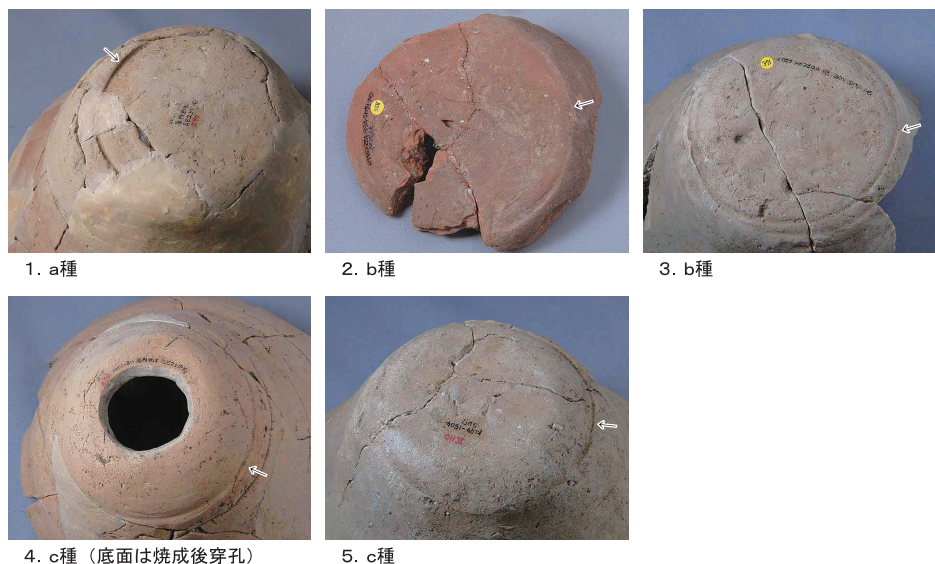


図40 底部の輪状圧痕諸例（→で示したもの）

（2・3：A X28区S K51，1・4：A U25区S E 2，5：A X25区S D 7出土）

のようなものも想定すべきかもしれない。いずれにせよ、この輪状痕跡は、製作技術の系譜を探究する上でも重要な情報といえよう。

体部の粘土帯積み上げ痕跡 この一群を最も特徴づけている、器面をめぐる粘土帯の積み上げ痕跡である（図41）。6 B期のS K51出土資料にみられるバラエティを示した。幅2 cm程度の広い粘土帯によるものから（1・3）幅1 cmに満たない紐状の粘土帯を用いて十数段積み上げているものまで（同5・7）、多様で漸移的なあり方を認める。6 A期のS E 2出土資料群には、紐状の細い粘土帯を多段に積み上げるものはみられず、幅のある粘土帯が主体となっている。幅の広いものから狭いものへ、ひらたく延ばした帯状のものから紐状のままのもの積み上げへ、という時間的な変化の傾向を想定したくなるが、6 B期以降の資料においても幅の広い粘土帯積み上げは継続して広く認められる。この種の鉢が定着していく過程において、技術的に多様化していったと考える方が自然かもしれない。

具体的な積み上げ方は、粘土帯を時計回りに輪状に巻いたものを、重ね部分の面が内側へと傾斜する内傾接合で積み重ねている。とぐろを巻くように長い粘土帯を多段に巻き上げる例は稀であり、巻き上げても2～3段分程度で、輪積みを併用している。そのため、器面には、水平方向にはしる積み上げ痕以外に、写真に矢印で示した位置にみられるよう

資料の集成と検討(1)

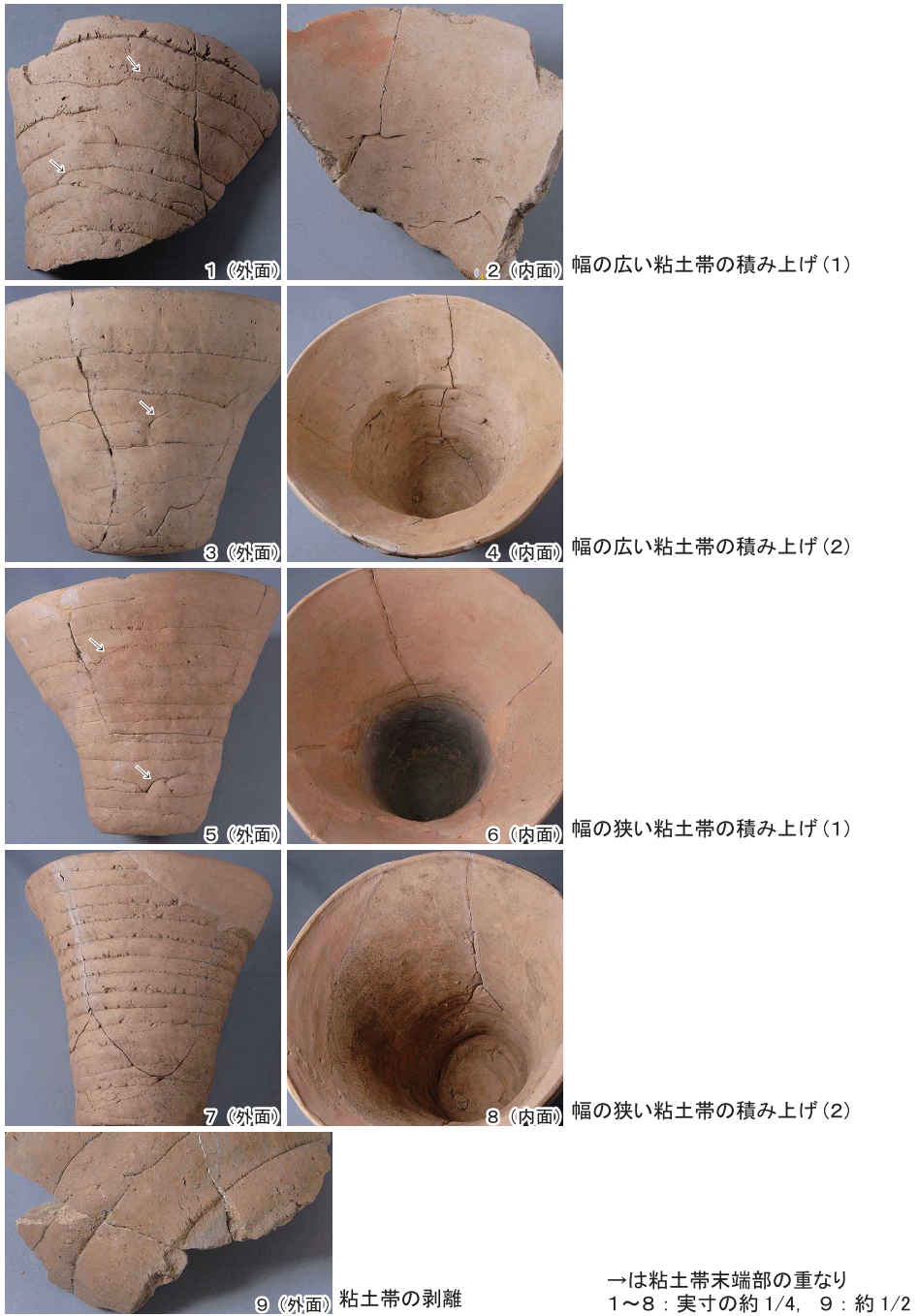


図41 粘土帯積み上げ痕 (いずれも A X28区 S K51出土)

な、粘土帯末端部を示す縦位方向の痕跡も頻繁に残されている。

また内面については、指が届く範囲の上半部のみを撫でにより丁寧に継ぎ目を消して平滑にし、下半部は積み上げが残されていることが通常である（2・4・6・8）。ただし、それらの仕上げ方にも精粗があって、積み上げ痕の残り方は一定していない。

なお、このように外面を中心に粘土帯積み上げ痕は非常に明瞭であるが、その積み上げ部位で剝離破損して、いわゆる「擬口縁」のような状況が確認出来るような事例は多くない（9）。このことは、粘土帯積み上げによる成形が、途中でさしたる休止を挟まずに一気に達成されていることを反映するのではないと思われる。

使用の痕跡 実際にどのような用途に供されていたのかについての重要な手がかりとなる使用の痕跡だが、それが確認できる資料は少ない。今回、実資料をつぶさに観察し得た京大構内出土の67点のうちで認められたものを紹介するが、最も多数がまとまって出土しているS K51出土資料中には、顕著な使用痕跡をとどめるものは見つからなかった。

事例として最も多いのは、内面に油煙や煤とみられる黒色物が付着するもので、6点を確認した（図42）。6 A期のまとまった資料S E 2出土品中には、先述したように、底部に大きな穿孔がほどこされるものが複数点存在するが、うち1点には底部に向かって「V」字状を呈するように黒色帯状の油煙痕が付着している（1）。また、底部穿孔の有無は定かでは無いが、帯状に同様な太い油煙痕跡がめぐるものも存在する（2）。これらは、下部に油入れの容器を据えて組み合わせ、灯火具としたものかもしれない。ただし、焼成後の穿孔であることに鑑みると、転用された状態であった可能性もあろう⁽⁶⁾。このほかは、上述の痕跡よりもやや淡い黒色物の付着がみられるもので、内面上半全面をまだらに覆うものや（3）、口縁部付近の両端に小さく付着するもの（4）、等がみられる。内部で火を扱った痕跡ではあるだろう。

なお、外面に厚く煤が付着しているものは4点確認した。うち3点は同一地点（医学部構内A R19区）の出土である（5）。被熱していることは明らかであるが、いずれの資料も内面にこれに対応するような焦げや黒変は確認されず、器表面の剥落が一部にみられるのみにとどまっている。

以上のように、表面的に観察できる痕跡から具体的な使用状況を推測できたものはごく一部であり、それも、本来意図された用途に即していたのかは、定かではない。ただ、被熱にともない激しく劣化したものはみられず、少なくとも製塩作業を行った容器ではない、と断言できるだろう。

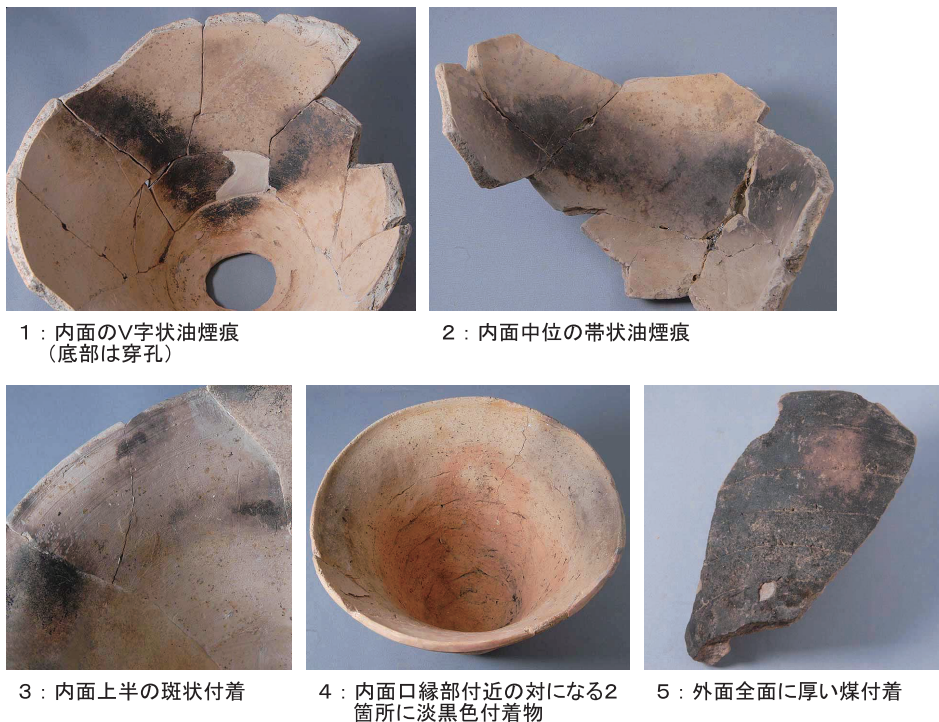


図42 器面にみられる付着物事例 (1・2 : AU25区SE 2, 3 : AG20区SE 14, 4 : AW26区SE 3, 5 : AR19区SE 8出土)

形態の変遷 ここまでの結果をふまえつつ、鴨東地域北部について、変遷を作成し提示する(図43)。以上の検討では言及してこなかった、特異例と言える大型品や高台・脚台付の資料についても含ませた(6・7・25・26)。大型品は、口縁が内折する形状のものが一定存在するようである。

総じて小型化している傾向や中世後半期のミニチュア品の出現、体部が直線的な形態へ収斂していくかのような傾向などはうかがえはしたものの、残念ながら、型式学的な組列を組むには至らなかった。あくまで相伴土師器皿の編年に依拠して配列したのみにとどまる。なかでも、12世紀後葉～13世紀前葉頃と14世紀代については、器形の判明する資料が一定量確保されるが、13世紀中～後葉に位置づけられる資料に乏しく、変化をスムーズに追えていない。

鴨東地域北部以外の資料についても、管見の範囲での所在確認は終えている。おおまかな変化の方向性は同じくしていると考えるが、時期がより遡るとみられるものやさらに下る資料、起源や系譜を考える上で重要な資料の存在を把握している。また、その空間的ひ

「塩壺」と俗称されている鉢形製品の検討（上）

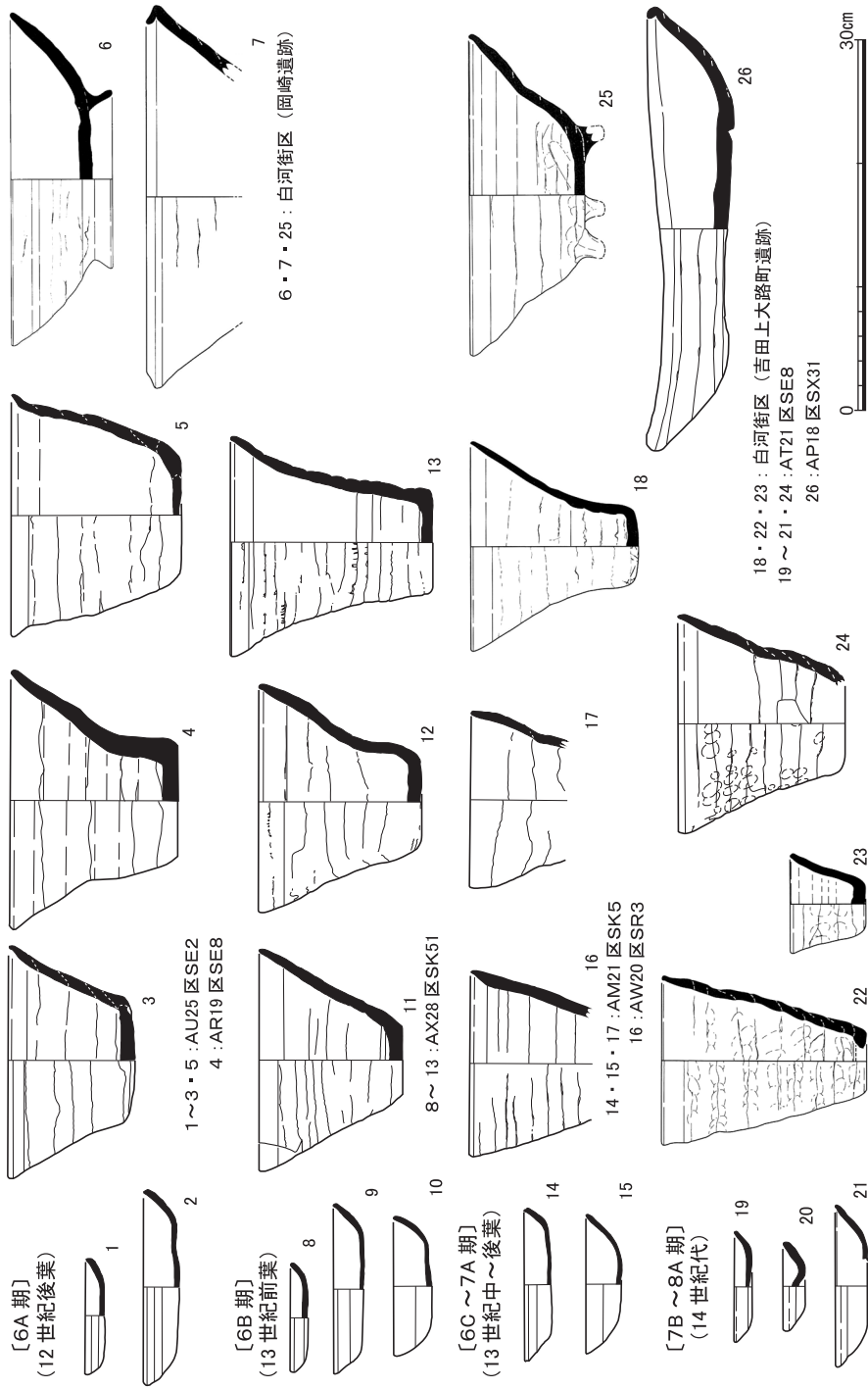


図43 鴨東地域北部における厚手鉢形土器の変遷 縮尺1/6

資料の集成と検討(1)

ろがりは、古代末～中世前半期における土師器生産と流通を考える上でも興味深いありようを示している。次節以下、対象地域を広げてそれらの検討を続けていきたい。

また、肝心の機能についても、結論に達していないが、底部穿孔のものや、油煙痕などの記載がみられる報告は、京大構内以外の出土品にも散見されている。焼塩壺と同種の容器であった可能性は皆無とは言えないけれども、口縁の開く逆台形の形態は、この種の容器としてふさわしいとは思われない。こうした問題の検証も、以下に委ねることとするが、さしあたり「塩壺」の俗称ではなく、学術的な報告においては「厚手鉢形土器」と呼称していくことを提案しておきたい。(未完・以下(下)に続く)

5 資料の集成と検討(2)-その他の地域-

平安京城 洛東 洛南 洛北 嵯峨野 宇治八幡 その他

6 製品の系譜と機能について

7 まとめと課題

[注]

- (1) 現況では、鳥羽離宮跡第88次調査〔吉崎伸・鈴木久男1985 p.61〕、岡崎遺跡〔(公財)京都市埋蔵文化財研究所2016 図版31-425〕(図43-25)に類例が知られる。
- (2) これに先だって、近世の焼塩壺が「塩壺」として報告されたことはある〔京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会1975 第31図I-14・I-15・I-16〕。
- (3) 報告時には13世紀前葉の一括資料としているが〔伊藤・梶原2007 p.137〕、白色を呈する皿Sとされる類型が出現しておらず、二段撫で手法が一定量含まれる口縁部の法量が9-10cmと14-16cmを主とする内容から、6A期すなわち12世紀後葉と見做すべきと修正する。
- (4) 口径30cm超の極大品は、京大医学部構内A P18区S X31出土品〔伊藤2008 図103-Ⅲ622〕。特徴については後にあらためて触れるが、包含層内で単独出土に近い状態で検出された資料であり、時期は遡る可能性がある。
- (5) 東山区の六波羅政庁跡遺跡の報告において、12世紀中葉の遺構堀100から出土しているこの種の鉢底部に同様な輪状圧痕があり、「土師器皿Nの小型皿の形をそのまま残す」とされている〔(株)文化財サービス2019 図32-65, p.36〕。報告者は、型ではなく別造りの可能性を考えているのであろうか。
- (6) 図35-382に示した岡崎遺跡出土品には、底部に焼成前の穿孔が認められる。ただし使用痕跡については定かでは無い。なお、注(1)で言及した同じ岡崎遺跡の三脚付の製品(図43-25)については、内面に帯状の油煙痕が付着していると報告されている。

[引用・参考文献]

秋山浩三 1994 「8京都市府(丹波・山城)」近藤義郎編『日本土器製塩研究』青木書店

「塩壺」と俗称されている鉢形製品の検討（上）

- 梅川光隆 2001 『平安京の器 その様式と色彩の文化史』
- 上村和直 1992 「人面土器製作技術の検討」『長岡京古文化論叢Ⅱ』
- 五十川伸矢 1983 「京都大学本部構内A X28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』
- 伊藤淳史 2008 「京都大学医学部構内A P18区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報2003年度』
- 伊藤淳史・梶原義実 2007 「京都大学本部構内A U25区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報2002年度』
- 伊藤淳史・長尾玲 2022 「白川道沿いの大規模廃棄土坑－本部構内A X28区S K51の出土資料－」
『都市近郊地域歴史像の再構築－京都・白川道の研究を基盤として－』（平成31年度～令和3年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書）
- 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1975 『平安京関係遺跡発掘調査概報－京都市高速鉄道烏丸線内遺跡発掘調査－』
- 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1976 『烏丸線内遺跡調査抄報』Vol.14
- 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1981 『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅱ 本文編』
- （財）京都市埋蔵文化財研究所 1977 『常磐東ノ町古墳群』（京都市埋蔵文化財研究所調査報告第1冊）
- （財）京都市埋蔵文化財研究所 1982 『平安京左京八条三坊』（京都市埋蔵文化財研究所調査報告第6冊）
- （公財）京都市埋蔵文化財研究所 2016 『円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015－17）』
- （公財）京都市埋蔵文化財研究所 2017 『円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016－17）』
- （公財）京都市埋蔵文化財研究所 2020 『白河街区跡・吉田上大路町遺跡（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2019－12）』
- 京都大学埋蔵文化財研究センター 1981 『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ－白河北殿北辺の調査－』
- 京都府教育委員会 1978 『埋蔵文化財発掘調査概報』
- （財）京都文化財団 1989 『吉田近衛町遺跡』（京都文化博物館調査研究報告第4集）
- （財）古代学協会 1983 『平安京左京八条三坊二町』（平安京跡研究調査報告第6輯）
- 千葉 豊 2008 「京都大学医学部構内A R19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報2003年度』
- 同志社大学校地学術調査委員会 1978 『常盤井殿町遺跡発掘調査概報』
- 日本中世土器研究会編 2022 『新版 概説中世の土器・陶磁器』
- 平尾政幸 2019 「土師器再考」『洛史』第12号（（公財）京都市埋蔵文化財研究所研究紀要）
- （株）文化財サービス 2019 『六波羅政庁跡、音羽・五条坂窯跡発掘調査報告書』
- 平安京調査会 1975 『平安京跡発掘調査報告－左京四条一坊－』
- 吉崎伸・鈴木久男 1985 「23第88次調査」（財）京都市埋蔵文化財研究所『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』

* 本稿は、2022年度科学研究費補助金基盤研究(C)課題番号22K00985（「都市化」とは何か－歴史都市京都近郊における長期的検証－）にかかる研究成果の一部である。

表2 鴨東地域北半における厚手鉢形土器報告資料一覧

京都大学構内(岡崎含む) (本：本部構内, 吉：吉田南構内, 西：西部構内, 医：医学部構内, 病：病院構内)

	調査区	地点	遺構・層位	報告番号	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	時期	文献	備考
1	本AX28	90・110	SK51	353	17.2	5.4	11	6B	1,2	
2	本AX28	90・110	SK51	354	15.9	5.4	13.2	6B	1,2	56年報 I 36/図12-5
3	本AX28	90・110	SK51	355	16.7	6.9	13.8	6B	1,2	
4	本AX28	90・110	SK51	356	17.5	7.8	16.4	6B	1,2	図41-7・43-13
5	本AX28	90・110	SK51	357	15.4	6.7	12.9	6B	1,2	
6	本AX28	90・110	SK51	358	16.2	6.5	15+	6B	1,2	図40-2
7	本AX28	90・110	SK51	359	16.2			6B	1,2	
8	本AX28	90・110	SK51	360	18.8			6B	1,2	
9	本AX28	90・110	SK51	361	18			6B	1,2	
10	本AX28	90・110	SK51	362	18.4			6B	1,2	図41-1
11	本AX28	90・110	SK51	363	18.8			6B	1,2	
12	本AX28	90・110	SK51	364	15.6			6B	1,2	
13	本AX28	90・110	SK51	365	15			6B	1,2	
14	本AX28	90・110	SK51	366	17.9	6.8	13.2	6B	1,2	図43-12
15	本AX28	90・110	SK51	367	15.3	6	13.7	6B	1,2	図41-3
16	本AX28	90・110	SK51	368	17.8	5.6	11.8	6B	1,2	図43-11
17	本AX28	90・110	SK51	369	19.4			6B	1,2	
18	本AX28	90・110	SK51	370		6		6B	1,2	
19	本AX28	90・110	SK51	371		7.6		6B	1,2	図40-3
20	本AW27	181	SK7	I 37	18	6.8	14	6B	3	
21	本AX25	230・241	SD7	II 105	18.4	6	12.4	6B	4	
22	本AX25	230・242	SD7	II 106	17.2	5.2	10.4	6B	4	
23	本AX25	230・243	SD7	II 107	17.2	6	12.4	6B	4	
24	本AX25	230・244	SD7	II 108	14.8	6	11.2	6B	4	
25	本AX25	230・245	SD7	II 109	15.2	6.4	12	6B	4	
26	本AX25	230・246	SD7	II 110	16.4	6.4	8.4	6B	4	図40-5
27	本AW26	271	SE3	III 131	12.4			6B	5	
28	本AW26	271	SE3	III 132		5.2		6B	5	
29	本AW26	271	SE3	III 133	17.6	6.4	10.4	6B	5	内面黒色付着/図42-4
30	本AW26	271	SK10	III 168	17.6		8+	6B	5	
31	本AT21	277	SK44	I 455	15.6			6B	6	
32	本AT21	277	SE8	I 536	17.6	6.8	13.2	7B	6	図43-24
33	本AT21	277	SX12	I 562		4.5		7B	6	
34	本AU25	296	SE2	II 69	19.6	9.2	14	6A	7	図43-5
35	本AU25	296	SE2	II 70	18.8	9.2	10	6A	7	図40-1・43-3
36	本AU25	296	SE2	II 71	23.2			6A	7	
37	本AU25	296	SE2	II 72	15.6		13+	6A	7	
38	本AU25	296	SE2	II 73	19.6	8	10.4	6A	7	内面黒色付着
39	本AU25	296	SE2	II 74	20.4			6A	7	
40	本AU25	296	SE2	II 75	14.4			6A	7	
41	本AU25	296	SE2	II 76	16.8			6A	7	
42	本AU25	296	SE2	II 77		10		6A	7	内面带状油煙痕/図42-2
43	本AU25	296	SE2	II 78		6	10+	6A	7	図40-4・42-1/内面V字油煙痕/底部焼成後穿孔
44	本AU25	296	SE2	II 79		9.6		6A	7	底部焼成後穿孔

「塩壺」と俗称されている鉢形製品の検討（上）

	調査区	地点	遺構・層位	報告番号	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	時期	文献	備考
45	本AU25	296	SD14	II 254	13.6	2	10.4	6B	7	丸底
46	本AU25	296	SD14	II 255	16.8	5.6	10+	6B	7	
47	本AU25	296	SD14	II 256	15.6			6B	7	
48	吉AN22	261	SD12	I 324	22			6B	8	
49	吉AP21	322	SK2	III 94	12.4			6C	9	
50	吉AM21	399・401	SK5	I 394	14			7A	10	図43-17
51	吉AM21	399・402	SX64	I 604	8			7B	10	
52	西AW20	348	SR3東肩 茶褐	I 651	14.8			7A	11	図43-16
53	西AW20	348	暗灰色土	I 746		6.4		6A	11	
54	医AN18	143	SD11	I 40	20			6C	12	
55	医AO17	270	SX8	II 412	12.8		8+	7C	13	
56	医AR19	298	SK21	I 46	21.2			6A	14	
57	医AR19	298	SE8	I 60	20.8			6A	14	図42-5/外面全体煤
58	医AR19	298	SE8	I 61	20.8	8.8	13.6	6A	14	図43-4/外面剥落
59	医AR19	298	SE5	I 175	17		6.8+	6B	14	外面下半煤
60	医AP18	308	SK25	III 335	15.6			6B	15	
61	医AP18	308	SK25	III 336	15.6			6B	15	
62	医AP18	308	SX31	III 622	36	20	5.6	7B?	15	図43-26/口縁内折大形
63	医AQ18	358	SE22	II 413	12.8			8A	15	
64	病AG20・ AF20	239・240	SE14	II 89	19.2	6	16.2	6A	16	図42-3/ 内面上半黒色付着
65	岡崎ZS23	463	SX10	I 385	19.6			6A	17	
66	岡崎ZS23	463	SX22	I 546		5.6		6A	17	
67	岡崎ZS23	463	SP2	I 655	22.4			6A	17	口縁内折

白河街区跡（吉田上大路町・吉田近衛町）

	遺跡名	遺構層位	挿図	報告番号	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	時期	文献	特徴備考
68	吉田近衛町	SK01	64	23		3.2	10+	7C	18	
69	吉田近衛町	SK01	64	24		4	10+	7C	18	
70	吉田近衛町	SK01	64	25		4.8	6+	7C	18	内面黒灰色
71	吉田近衛町	SK04	71	193		4.8	10+	7C	18	
72	吉田近衛町	S359	50	20	12.6	5.4	12.6	7B	19	
73	吉田近衛町	S359	50	21		6		7B	19	
74	吉田近衛町	S112	23	44				7A	19	
75	吉田近衛町	S538	64	45	14.1			7C	19	
76	吉田 上大路町	1区集石90	21	129	16.7	6	13.5	6C	20	図43-18
77	吉田 上大路町	土壙墓201	19	38	17.4			6A	21	
78	吉田 上大路町	土壙墓201	19	39	17.8			6A	21	
79	吉田 上大路町	土坑422	24	197	12		14+	7C	21	図35
80	吉田 上大路町	土坑422	24	198	13	4.6	16	7C	21	図35/図43-22
81	吉田 上大路町	井戸203	25	238	7.7	4	6.1	7C	21	図43-23

表 2

白河街区跡（聖護院・岡崎）

	地点名	遺構層位	挿図	報告番号	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	時期	文献	特徴備考
82	天王町	井戸75	53	224				8A	22	
83	聖護院中町	SX91下層	16	216				5B	23	
84	聖護院中町	SE80	18	254	18			6C	23	
85	聖護院 円頓美町	落ち込み 2290	39	64	22	9	12	6A	24	
86	聖護院 円頓美町	溝1050	40	90	26.9	16	8.2	5B	24	図43-6/高台付鉢
87	延勝寺跡	整地層2	18	46	24.8		6.1+	5B	25	外面煤
88	美術館2期	溝840	図版31	424	20.7		9.1+	8A	26	
89	美術館2期	溝840	図版31	425	25.6	10	10.4+	8A	26	図43-25/ 三脚付内面帯状油煙痕
90	美術館2期	溝900	図版27	246	27.5		7.5+	6A	26	
91	美術館3期	土坑2316	図版30	108		8	9.5+	6A	27	
92	美術館3期	溝2220・ 2230B	図版34	380	10.8		6.3+	7C	27	図35
93	美術館3期	溝2220・ 2230B	図版34	381		5.2	9.1+	7C	27	図35
94	美術館3期	溝2220・ 2230B	図版34	382		6	7.4+	7C	27	図35/底部焼成前穿孔
95	美術館4期	溝2092	図版52	39				6B	28	胴部墨書
96	美術館4期	溝2094	図版53	113		7.3	7.8+	5B	28	
97	美術館4期	溝2094	図版53	114	19.7			5B	28	
98	美術館4期	溝5140 東護岸	図版55	198	15.5			6A	28	
99	美術館4期	溝5140	図版55	231	26.6			6A	28	
100	美術館4期	溝5140	図版55	232	28			6A	28	図43-7/口径内折大型
101	美術館4期	溝5140	図版55	233			9	6A	28	

*口径・底径・器高は基本的に報告書の挿図より計測したが、観察表に記載のあるものはその数値を採用した。
+はそれ以上の数値が見込まれることを示す。

*時期は、出土遺構の共伴土器皿類等を〔平尾2019〕により比定した。

報告文献（番号は表2と対応）

- 五十川伸矢1983「京都大学本部構内A X28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報昭和53年度』
伊藤淳史・長尾玲2022「白川道沿いの大規模廃棄土坑－本部構内A X28区S K51の出土資料－」『都市近郊
地域歴史像の再構築－京都・白川道の研究を基盤として－』（平成31年度～令和3年度科学研究費補助金（基
盤研究（C））研究成果報告書）
- 五十川伸矢・千葉 豊・伊東隆夫1992「京都大学本部構内A W27区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究
年報1988年度』
- 古賀秀策1999「京都大学本部構内A X25・A X26区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報1995年度』
- 千葉 豊2003「京都大学本部構内A W26区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報1999年度』
- 千葉 豊・阪口英毅2006「京都大学本部構内A T21区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報2001年度』
- 伊藤淳史・梶原義実2007「京都大学本部構内A U25区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報2002年度』
- 千葉 豊・阪口英毅2005「京都大学吉田南構内A N22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報2000年度』
- 伊藤淳史2009「京都大学吉田南構内A P21区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報2004～2006年度』
- 伊藤淳史・富井眞・内記理2016「京都大学吉田南構内A M21区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報
2014年度』

「塩壺」と俗称されている鉢形製品の検討（上）

- 11 伊藤淳史・笹川尚紀2012「京都大学西部構内A W20区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報2009年度』
- 12 五十川伸矢・宮本一夫1988「京都大学本部構内A N18区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報昭和60年度』
- 13 伊藤淳史2003「京都大学医学部構内A O17区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報1999年度』
- 14 千葉 豊2008「京都大学医学部構内A R19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報2003年度』
- 15 伊藤淳史2008「京都大学医学部構内A P18区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報2003年度』
- 16 千葉 豊2000「京都大学病院構内A G20・A F20区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報1996年度』
- 17 伊藤淳史・富井眞ほか2021「京都市白河街区跡・延勝寺跡・岡崎遺跡の発掘調査Ⅱ」『京都大学構内遺跡調査研究年報2019年度』
- 18 平良泰久ほか1978「4 吉田近衛町遺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報（1978）』（京都府教育委員会）
- 19 （財）京都文化財団1989『吉田近衛町遺跡』（京都文化博物館調査研究報告第4集）
- 20 （財）京都市埋蔵文化財研究所2012『白河街区跡・吉田上大路町遺跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2011-3）
- 21 （公財）京都市埋蔵文化財研究所2020『白河街区跡・吉田上大路町遺跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2019-12）
- 22 （財）京都市埋蔵文化財研究所2005『白河街区跡・岡崎遺跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005-4）
- 23 新田和央2019「V 白河街区跡」『京都市内遺跡発掘調査報告平成30年度』（京都市文化市民局）
- 24 （株）イビソク関西支店2013『白河街区跡・岡崎遺跡－集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』（イビソク京都市内遺跡調査報告 第5輯）
- 25 （公財）京都市埋蔵文化財研究所2014『延勝寺跡・岡崎遺跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2014-2）
- 26 （公財）京都市埋蔵文化財研究所2016『円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015-17）
- 27 （公財）京都市埋蔵文化財研究所2017『円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016-17）
- 28 （公財）京都市埋蔵文化財研究所2018『円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2017-16）

京都大学構内遺跡調査研究年報 2021・2022年度

目 次

- 1 京都大学吉田キャンパスの地区割と調査地点
- 2～9 京都大学医学部構内A M20区の発掘調査



図版一 京都大学吉田キャンパスの地区割と調査地点



1 表土・攪乱除去後の全景（北東から）



2 灰褐色土・黒灰色土掘りあげ後の全景（北東から）



1 完掘後の全景（北東から）



2 集石の広がり（北から）



1 南部の集石 S X 9 の広がり (西から)



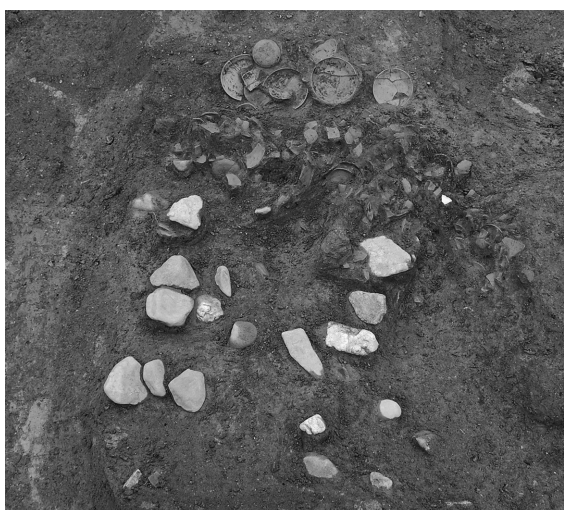
2 東北部の集石の広がり (北西から)



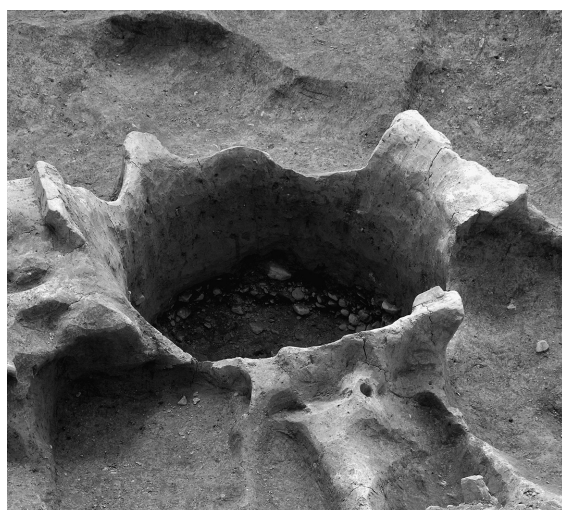
1 SR2・SR3 (北から)



2 SR2・SR3 (南東から)



3 SX4 (南から)



4 SX4掘りあげ (北から)



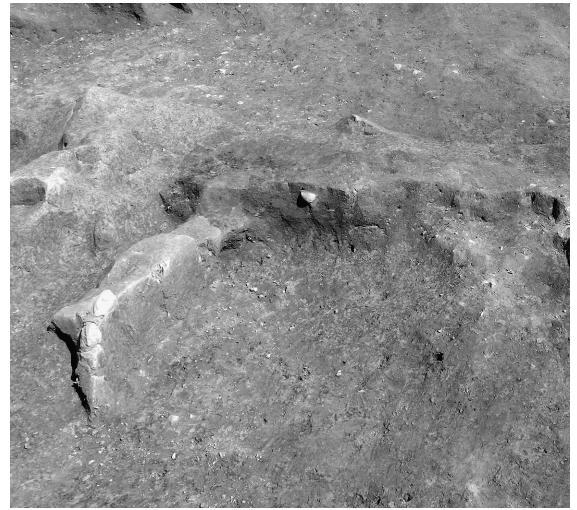
5 SX5 (北から)



6 SX51 (北から)



1 S X61 (北から)



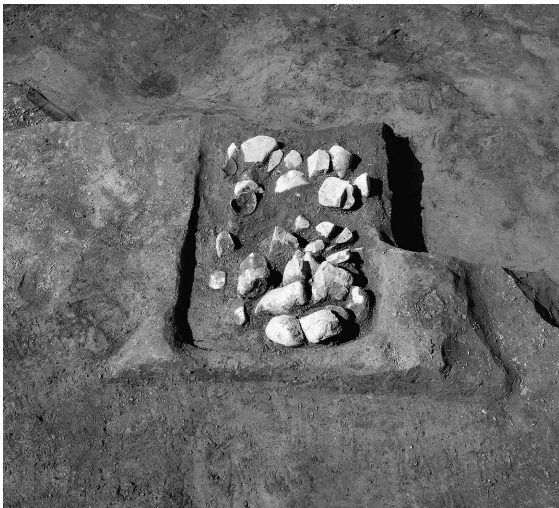
2 S X61 (南東から)



3 SE 4 (西から)



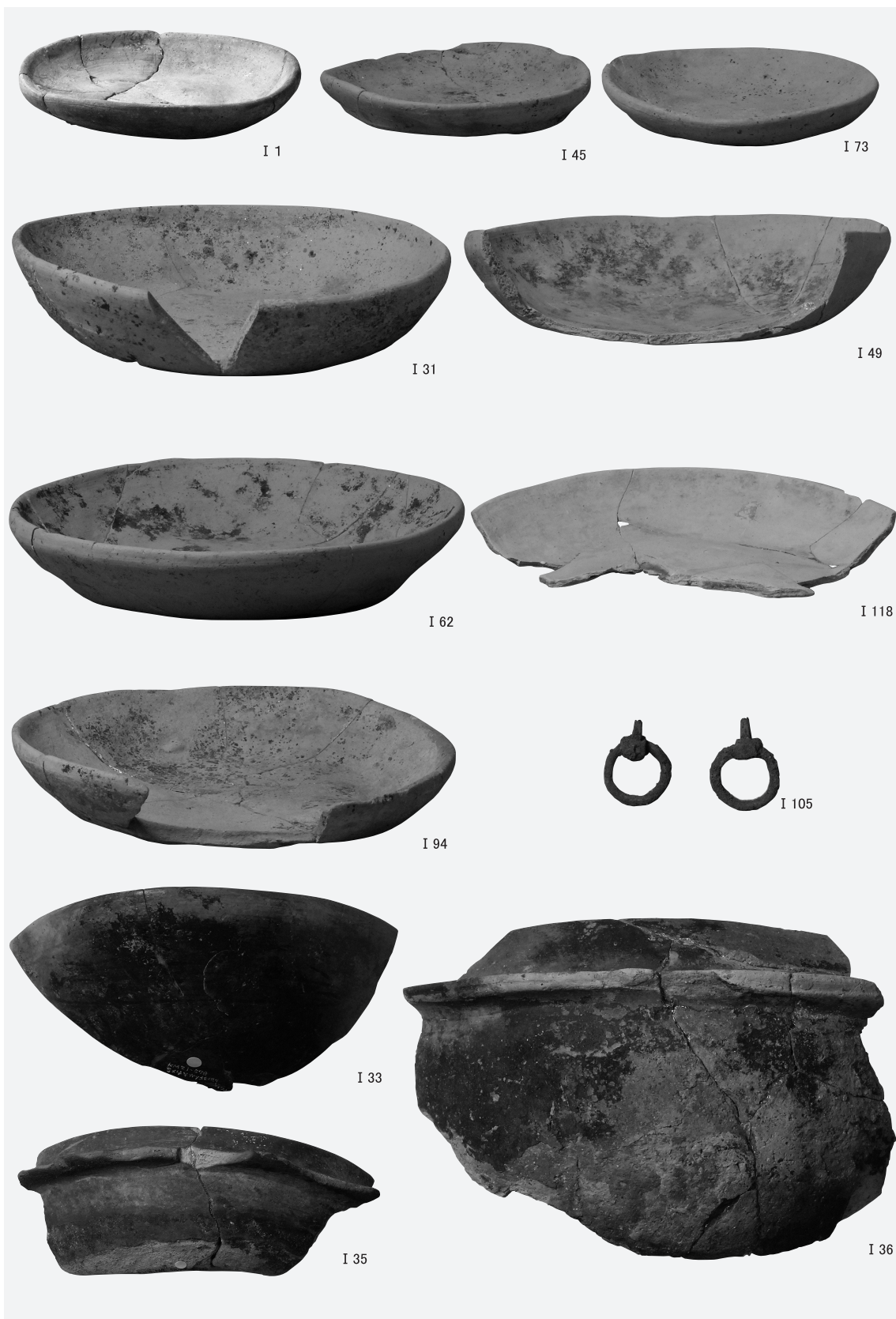
4 SE 4 (北から)



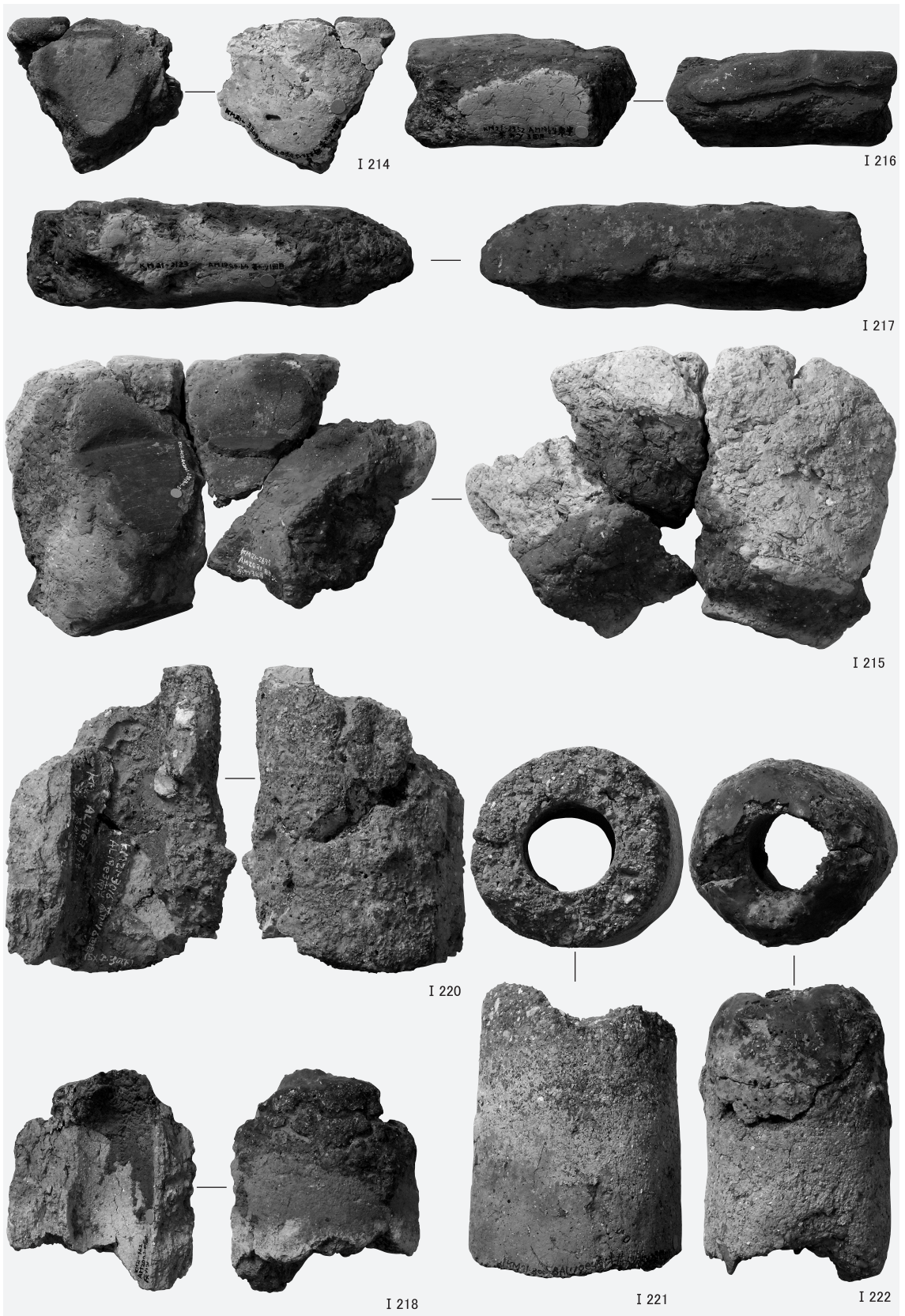
5 S X64 (南から)



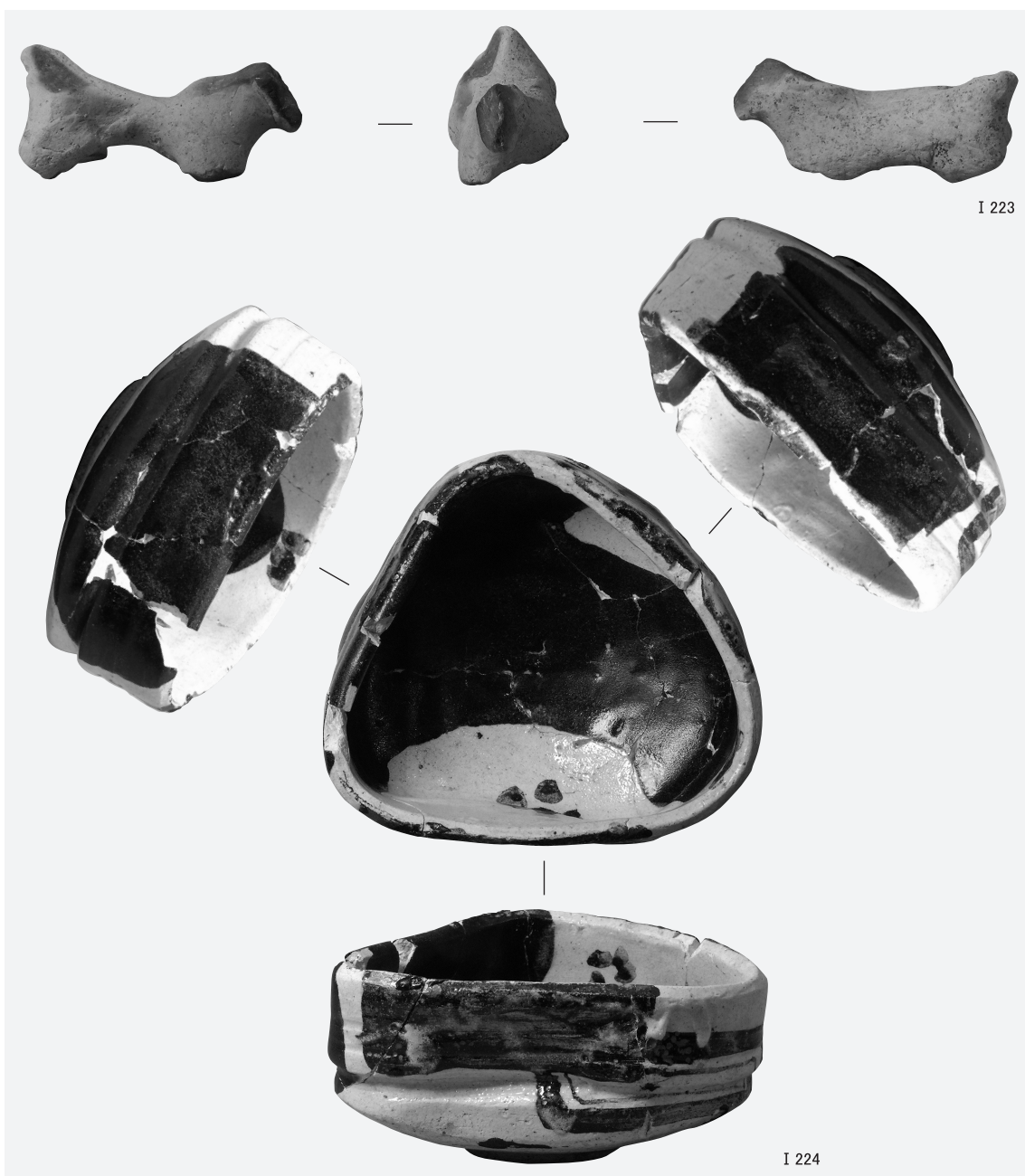
6 S X 2・3 (東から)



S X 4 出土遺物 (I 1 ・ 31 ・ 45 ・ 49 ・ 62 ・ 73 ・ 94 ・ 118土師器, I 33 ・ 35 ・ 36瓦器, I 105青銅製品)



铸造関連遺物 (I 214~217铸型, I 218・I 220~I 222ふいご)



1 不定形土坑出土遺物 (I 223土馬, I 224黒織部)



2 S X 2 出土遺物 (I 225・242・250土師器)

2023年 3月31日 発行

京都大学構内遺跡調査研究年報
2021・2022年度

編集 京都大学大学院文学研究科附属
発行 文化遺産学・人文知連携センター
京大文化遺産調査活用部門
京都市左京区吉田本町

印刷 三星商事印刷株式会社
製本 京都市中京区新町通竹屋町下ル弁財天町300